みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001015

土方久功日記　第12冊
1927年11月23日～1929年4月15日（昭和2年～4年）

解　説

この第12冊の終わり近くで，久功はいよいよ日本を発ち，南洋へ旅立つこととなる。母親が死去し，鎌倉の昌生叔父の家に寄寓していた久功は，すでに南洋行きの決心をしていた。そして，着々と南洋行きの準備をしていた。田中銀之助を訪ね，南洋での就職を頼み，1928年7月15日には，大船へ東郷吉太郎伯父を訪ね，南洋の状況を聞いていた。この年8月28日，新聞で佐伯祐三のパリでの客死の報に接した。かなりのショックを受けたようだった。しかし，

近頃ハ，誰ソレガ死ンダト聞イテモ，別段ノ感モ受ケナクナッテシマッタ自分ダ。青木ガ死ンダ時，岡村ガ死ンダ時，木下ガ死ンダ時ハ，実ニ変ナ気ガシタ。原瀬ガ死ンダ時，中嶋ガ死ンダ時ニハ，既ニ五島ノ萬千代サンガ死ンダ時ヨリモ何トモナカッタ。ソレカラ先達，南日恒太郎先生ガナクナラレタ（溺死）時――アノ時ハモウ麻痺シテ居タ。年ヲトッタノカシラン。ソレトモ父モ母モナクナスト，コンナ風ニナルノカシラン。

と日記に記した。

この頃，和歌，俳句への関心が高まった。現実逃避なのか。弟・久顕と，和歌俳句論のやり取りが，日記のかなりの部分を占める。後，久顕が歌人となるきっかけを作ったと言えよう。母親を亡くしてから，弟・久顕との関係はいっそう親密になった。4月2日，二人で金沢へ1泊旅行に出る。1年後の南洋行きを前にした旅行であることは明らかである。現実が悲しみ，苦しみに満ちていたものであったからか，旅行記は，若々しく愉快な戯文体の筆致で書かれている。

年が明け，1929年になると，南洋行きに向けて，荷造にかかった。また，親類縁者等各所へ暇乞いに行っていた。そして，方々から餞別をもらった。1月27・28日両日の日記に，長文の「南洋行キ次第」を書いた。

いよいよ，3月7日9時過ぎ，南洋航路船・山城丸に乗船した。見送りに来たのは，兄，弟，金子九平次，三沢寛等5人だけだった。久功は，前夜，9時から明け方3時まで兄・久俊と酒を飲み，ひどい二日酔いだった。

船が南下するに従い，日の光はどんどん強くなり，3日目の午頃には，小笠原の島じまが見えた。6日目の12日朝，サイパンに着いた。早速上陸し，親族へ手紙を書いた。そして，島内を歩き回った。日の光は6月のように強く，海の色は，今まで見た事のないような，チューブから出したようなウルトラマリーンの色であった。久功は，大いに満足した。

サイパンでは，翌日，見も知らずの島民の家を訪ね，島民料理を食べさせてくれないかと頼み，食事をした。初めての家を訪ねて料理を食べさせてほしいと頼むのは珍しい

ことであるが，久功の好奇心の強かったことの表れと見ることができよう。そこでは，望んでいたパンの実はなかったものの，トウモロコシのパン，コプラをしぼりこんだくず湯のような飲み物，肉の煮込み，牛の肝臓の煮たもの，牛の心臓の焼いたもの，三尺バナナと鶏肉の煮たもの，トマトと魚の油煮，魚の椰子油上げ，三尺バナナの煮たもの，お芋のふかしたもの。それと，ご飯。調味料が少なかったためか，どれも淡味で変化にとぼしかったが，久功は，満腹になって辞し，五時半のランチで船に帰った。ここには，すでに，島民の中に入って一緒に生活しようという久功の姿勢が見られる。

船は，テニアン島，ヤップ島を経て，19 日の午後，目的地のパラオへ到着した。数日は，邦人会の旅館に宿泊することになった。

21 日，旅館を出て，家賃 30 円で一軒家を借りた。自炊生活を始めるので，自炊用器具，米，味噌類を買い求め，新居に入った。

23 日から，ア・バイの絵を写しに行った。しかし，なかなか面倒ではかどらない。夜は，突堤までぶらぶら散歩した。南洋の月夜は明るく，美しかった。それから久功は，毎日のようにア・バイの絵を写しに行った。また，コロール島の中をすみずみまで歩いた。

パラオ滞在中の最も大きな出来事は，大工の杉浦佐助との出会いであろう。パラオへ来て半月ほど経った 4 月 4 日の晩，佐助はひょっこりと久功を訪ねてきて，11 時頃まで話していった。彫刻が好きで仕方ないから，弟子入りさせてくれ，と言うのである。大工さんの話は尽きることなく，実に興味深いものだった。8 日の夜も，10 時頃訪ねてきて，11 時半まで話をし，12 時過ぎて帰っていった。

コロールは，さして大きな島でないので，島内をほぼ歩きつくした久功は，パラオ本島行きを望んでいた。4 月 14 日になって，やっと本島行きが実現した。南洋庁農林課の佐久間氏とカヌーで本島のアイライへ向かい，第 1 日はそこに泊った。翌朝，久功はカヌーで北上し，夜 11 時半にやっと宿泊予定地のカイシャルへ着いた。

久功は，この日記 12 冊の終わり近くから，あこがれの南洋生活を始めるのだが，日記に明らかな変化が見られる。日本を発ってから，日記の記述が明るく，のびのびしてくるのである。久功の置かれた状況が，大きく変化したことを物語っている。

最後に，日記の表記について述べたい。日記は，第 1 冊からほぼ全て漢字・ひらがなで記されていたが，昭和二年（1927）12 月頃から漢字・カタカナ書が見られはじめ，ひらがな書と混在していた。しかし，翌昭和三年（1928）6 月以降は，ほとんどカタカナで記されるようになり，昭和四年（1929）になると，ほぼ漢字・カタカナ書となる。表記をカタカナ書にした理由は，南洋へ渡った後，現地語を日本語で表すには，カタカナ表記の方がふさわしいと考え，内地にいる間に，日記をカタカナ表記に変えたのではないかと考えられる。

〔表紙〕
[12　千九百二十七年十一月廿三日ヨリ　　千九百二十九年四月十五日迄
　　昭和二年　　HISAKASTU. H　　]

〔見返し〕
[高山ト海コソハ山ナガラ斯クモ　ウツシク
　　海ナガラ然モタダナラメ
　　人ハ花物ゾ空セミノ世人
　　（萬　十三巻）　]

✓八ッ出ノ花ニ虻ドモノ□□□（群レテ）寄ッテ勝手ナリ
✓八ッ出ノ花ニ虻ドモノ勝手サモノドカ□□（ナリ）カナ
✓蝿動カズ追ハバカ逃ゲン冬ノ縁

十一月

二十三日

新嘗祭。天気ウララカ。

午前中，池田サンノ方々ガ皆サンデ来ラレ，午後，嶌村ノオバサマガ来ラレ，夕方帰ラレル。日暮，百合子〔柴山〕ノ買物ニ師範ノ傍マデ行キ，秋庭サンニ一寸オヨリシテ来ル。夕方カラ風ガ少シ出テ，ヒドク寒クナル。

二十四日

快晴。午前，秋庭サンノ奥サンガ，昌道〔柴山〕ノ為ニオ願ヒシテオイタ先生ヲツレテ来ラレル。朝ノウチ床屋ニ行キナガラ，其ノ辺ヲブラブラ歩イテ来ル。

二十五日

晴。午前中，買物ガテラ綾子〔柴山〕ヲツレテ長谷ノ道ヲブラブラ歩キ，大仏様マデ行ッテクル。長谷ノ通リデ，坊城俊賢[152]君ニ逢フ。

荒居徳亮様
✓毎日毎日何シテオイデナサルカナ，モ少シ近ケレバ行ッテ見ルガナ

二十六日

✓秋日ヨシ蝿モ飛ベ飛ベウルサケド

久顕ヨリノ手紙

「御手紙面白く拝見仕り候，毎度ながら御返事のみを差上ぐる立場となり，汗顔に堪えず，御ゆるし下され度く候

日曜日にて試験もすみ，この処又少々暇あり，但し来月中旬，病理学各論あり，これを以て基礎医学ハ皆済，明年三月迄ニ内科各論，外科各論，産科□□（各論），婦人科，眼科と矢継早に試験，学生ハ辛きものと相観じ申候，

句は小子「専問（門）」外にて，とんと玉石相弁じ難く候へども，専問（門）外なるが故に，盲蛇に怯ぢずの法を以て妄評仕るべく，長き夜の御笑ひともならば，幸甚至極と存じ奉り候

［山道雑句概（欄外に記す）してわかりよく，摘みすてし花ここにまたのあたり，歌にもせまほしき境地と存じ候］

烏瓜に石投げてゆく登山哉
またありと聞□□（くや）イテ見上ゲシからす瓜

前者平明なれど，小生相好み候，後者稍あやうげに見え候は如何

此の山や霜置くまでのすすき哉

霜置く迄は，おきまどはするに非ずとの註，了承仕り候，併しこの句，矢張り「霜置くまで」が，相当の論点となるべしと愚考仕り候，おそらく，今は尚ほつや〳〵とした銀茶色の絹絲にてよりたる如きすすきの穂が，山の全景をぬきんでてゆらぐさまを見ての句と思はれ候へども，霜置く頃ともならば，かさ〳〵のほほけたる様となるべきを予想したるにや，それにしても，一句の力あまりに弱くは候はずや（直ちに結論に走り□□候間，文意相通ぜざるやも知れず），而して，そのほほけたるすすきは，たとへ霜にうたれ，雪が積みても消え□□□□（ざること）去ること先づなかるべきものと知り申候，小生の歌に

立ち枯れしすすきの根元先づはやく若草もえて春となりにけり

即ち，来春迄はそのまま立残るものに候，勿論この意味の「迄」にてはあらざるべしと存じ候，或は現に霜にうたれほほけたるを眺めて，「あゝすすきのよいのも霜のおく迄だな」との意とも考へらるれ共，さすれば「この山や」が，無用の長物，なくもがなと存じ候，

畔道に蛇くねくねと死んでけり
畔道に死蛇のうねりの力なく

小生，前の句の方が好きに候，総じてこの様なる境地は，これを発見して多少なりとも時間の経過をへてから主観がまとまり来りたるよりは，発見したるその時を，そのまま，主観化せらるる以前の姿に於て現はす方，却って有効と愚考仕るを以てに候。

家を出でて我が来し時に渋谷川に卵のからが流れて居たり（茂吉）

この場合の主観的の会釈〔解カ〕ハ読者に委ねて然るべしと存ぜられ候，

大露仏半眼の影に秋移る

素敵々々!!　如何にも観象の眼の洗練と表現の手腕の老巧を同時にそなへたる名句，小生はこの一句のみを得たることにて，他はすべて抹殺するとも惜しからざるものと存じ候，大露仏半眼の影に秋移る，巧い！　反読賛嘆の思ひを有するものに候，一点のすきもなき名句，文句なしに降参仕り候，

蘇鉄売る店に懸崖の菊一つ見事かな
西日深く懸崖の菊の半ばまで

店頭の菊と，座敷の菊，何れも小生好きなる境地，それらの感じは，それぞれ遺憾なく表はれ申し候，後の句わけても好きに候，

裏山の枯松天にかざすや秋の真日
裏山の枯松天にかざして秋まひる

真日とは太陽か，陽光か，陽光の方自然なるべく，更に秋まひるにて充分なるべしと存じ候，
天にかざして，天にかざすや，何れにせよ，主格がありそうで，その実，発見に苦しむ言ひまはしと思はれ候，勿論すべての句に主格を必要とすべしとは，いささかも思ひよらざるところ，うらやまの枯松の木はだに秋の強き陽光があたりて，あかあかと秋空にぬき出たる様なるべく，或は碧空に二三の白雲もとびたるべけれ共，両句とも相当に苦心の□□（あと）後，遂に血路を発見し得□□□（ざりし）ずに終りたるものの如くに相見ゆるは如何，但し此の場合，松の枯れてある事は，重大なる因子をなすものと愚考まかり在り候，

青桐の黄ばむ後や松空に

いろいろ想像致し候へ共，どうも分明仕らず，御教示の程願ひ上げ候，
妄言当死多謝多謝
兄上様　　久顕

御返事
拙句細々ト御批評下□□サレシヲ，自作ノ句ニ況シテ面白ク拝読仕候，興味覚エ候ママニ，聊カ御返事申述べ候，

烏瓜ニ石投ゲテ行ク登山哉
マタアリト聞クヤ見上ルカラス瓜

概シテ山道親句ハ久々ニ野山ニ遊ビシニ，気晴レテ気マカセニ一気ニ書キツケシモノニ候故，平明ナルト共ニ，平凡，否駄ニ堕チシモノ多キヲ，ツマラナク感ジ居リ候。
此ノ二句亦当日，道々多く烏瓜ヲ見候ママニ，何心ナク書キツラネシモノニ候ヘドモ，前者ハ山道ノ気分ニ乗リシモノカ，後ニ読ミ直シテ勝レタリト云フニアラネド，何トナキ懐カシサヲオボヘテ，捨テ難ク思ヒ居リ候，後者ニ至リテハ，アヤウゲ所ニ非ズ句ニナッテ居ラズ候。

マタアリト聞□□キテ見上シ烏瓜見上□(ル)シマデゾ面白クモナキ

位ヒニオ茶ヲニゴシ置キ候

此ノ山ヤ霜置ク迄ノ薄哉

成ル程，云ハレテ見ルト小生ノ小註ニアマリテ，「霜置ク迄」ハ多少ノ莫(漠)然タル感アルヤニ存ゼラレ候ママ，此ノ句□□ノ為ニ弁解セントニアラズ，小生ノ「霜置ク迄」ヲ茲ニ聊カ説明仕ルベク候，小生ハ「霜置ク頃トモナラバ，カサカサノホホケタル様トナルベキヲ予想シタルニ」アラズ，反対ニ秋モ深キニ，アマリニ若々シキ薄ナリシカバ，霜置ク頃マデモ未ダ未ダ，タケナハナランヨト想像致シタルモノニ御座候，此ノ想像ノ意ヲ想像トシテ句ニ盛ランニハ，アマリニ無理多カラント思ヒ，旁々霜ノ置ク頃ニ，此ノ山ノ山イッパイノ薄ノ枯レモ果テヌニ霜置キタルヲ見ラバ，興多カラント思ヒ，仮リニ既ニ霜置ク頃トシテ□(読)詠ミシモノニ御座候。従ッテ，「あゝすすきのよいのも霜のおく迄だな」ノ意味ニモアラズ，寧ロ反対ニ「マア此ノ山ノ薄ハ霜ノ置ク迄モ斯ウシテ薄ラシクシテ居ルヨ，コンナニモ未ダ見ラレル薄ニ霜ヲ置カセルノハイタイタシイコトダ」

ノ意ニ候。サレド霜ノオク迄ソンナニシテ居ル薄ガアルカナイカハ知ラズ候ヘバ，若シ事実トアマリニカケヘダタリテ無理ナラバ，此ノ句□(込)引込ムベキニ御座候

畔道ニ蛇クネクネト死ンデケリ
畔道ニ死蛇ノウネリノ力ナク

御説一応尤ニ候ヘドモ，小生聊カツケ加ヘタク存ジ候，即チ前者ト後者トヲ，アマリニハッキリ分ケラレシニ対シテ，少シク提議申述べ候，ナルホド後者ノ□□□(カナク)「チカラナク」ハ主観的ニ解セラレ候ヘドモ，亦単ナル写実トシテモ，サシテ解□□□(セラレ)シニクキコトナカルベシト存ゼラレ候。即チ小生ノ求メシモノハ，主観ト客観トノ分チガタキ渾一ニ御座候，例ヘバ前ノ句ニ於ケル「蛇クネクネト」ハ，主観ト解シテモ一先ヅ通ルカニ存ゼラレ候，即チ更ニ御引例ノ茂吉ノ歌ニ就イテ云ハンナラバ，家ヲ出デテ，「我ガ来シ時ニ」ノ辺ニ，何ヤラ主観的ナルモノヲ感ズル如クニ御座候，尚云ハバ

家ヲ出デテ我来シ時ニ渋谷川ニ卵ノカラガ流レテ居タリ（茂吉）

ト

渋谷川ニ卵ノカラガ流レ居リ（例ヘバ）

ト　ニテハ，両者間ニハ多少トモ明ラカニ主観ノ相違ヲ見ル如クニ候，□□クドク云ハバ

1 (家ヲ出デテ我ガ来シ時ニ渋谷川ニ卵ノカラガ流レテ居タリ
　畔道ニ蛇クネクネト死ンデケリ（状態ノ状態）

2 (渋谷川ニ卵ノカラガ流レ居リ
　畔道ニ蛇死ンデ居リ（場所）

3 (卵ノカラガ流レ居リ
　蛇死ンデ居リ（状態）

4 (卵ノカラ
　蛇（モチーフ）

(4) ハ何ノ味モナキモチーフニ候。(3) ニ於テ此ノモチーフハ或ル状態ニ限定セラレ，(2) ニ於テ更ニ或ル場所ニ限定セラレ，(1) ニ於テ始メテ或ル主観ト関連セシモノニ候。然ラバ他ノ一句モ亦

死蛇（モチーフ）

死蛇ノウネリ（情態）――事実

畔道ニ死蛇ノウネリ（場所）――事実

畔道ニ死蛇ノウネリノ力ナク（情態ノ情態）――事実

ノ如ク事実事実事実ト解シテ差ツカヘナキヨウニ存ジ候。〔欄外に記す〕[即チ此ノ二句ノ相違ハ一ツコトニ対スル客観ヨリ主観ヘノ移入ト解スルヨリモ，二ツノ異レルモチーフニ対スル感覚ノ相違ト解シテヨロシキカニ存ジ候，即チ前者ニ於テハ，蛇ガ発見セラレ，ソレガ死ンデ居ルコトニ気ヅカレ「クネクネト」ニ於テ状態ノ状態ノ観察ト主観トガ渾一セシ如ク，後者ニ於テハ死蛇ガ発見セラレ，ソノウネリガ気ヅカレ，「チカラナク」ニ於テ，情態ノ情態ノ観察ト主観トガ渾一シタルモノニ御座候] 但シ「力ナク」ト云フ語ハ，正ニ主観的語ニカタブキ候事，後者ノ表現ハ前者ノソレニ比シテ大イニ□□（単 純）率直ナラザル事，ソレダケ一句ノ感ジニ於テモ，マハリクドキ事等事実ニ候，

大露仏半眼ノ影ニ秋移ル

此句。先日アマリニ天気ヨキ日，独リシテ家ヲ出デ一句二句儲ケモノセンナド思ヒナガラ，海辺ニ一二時間ネソベリ居リ候ニ，一句モ浮バズ大イニ失望シテ，日暮前ニ大仏ニ詣リ候処，下ノ方既ニ陽差サズ，頭部ニノミ入日□斜メニ差シテ，半眼ノ影長ク引キシヲ，珍ラシクツクヅク眺メ候。人モ少ナキ庭ヲ一廻リシ，又ツクヅクト眺メ候。遠クスサリ，又近ヅクウチニ，コレナント口（クチ）ズサミ，口（クチ）ズサミシテコレナント思ヒ，日モ落チシママ，長谷ノ通ヲ歩キ歩キ帰リシニ御座候。

裏山ノ枯松天ニカザスヤ秋ノ真日
裏山ノ枯松天ニカザシテ秋マヒル

何トカウマキ語ヲト頭ヲヒネリ，頬ペタヲツメリ候ヘ共，ウマキ語ナク遂ニ「カザス」ヲ見ツケ候ヘドモ，アヒニクカザスハ他動詞ノミニテ，自動詞ニハ用ヰラレズ，大イニ迷ヒ候上，兎モ角ウマイ語ガ見ツカルマデカザスヲ自動詞ノヨウニ使ッテヤルコトニ致シ候。苦心モ此ノ辺ニ至ルト面白ク（或ハ滑稽ニ）相成リ候

久顕殿　　久功。

✓タソガレントシテ公孫樹只アザヤカヤ山ノ寺
✓静ケサニ公孫樹只アザヤカヤ寺ノ暮
✓茶ノ花ニタソガレカカル青キカゲ
✓茶ノ花ニユフベ人モナキ寺ノ庭
✓薄闇ニホノカニ咲ケル枇杷ノ花ホトホト見ズバ見ズテモアラン枇杷ノ花
✓シミジミト暮レテユクオ寺ノ庭ニ公孫樹ノ落葉散リ敷ケルカモ
✓手ミズ冷タク茶〔ママ〕山花ノ花ウスアカキ夕ベカナ
✓手ミズ冷タク茶〔ママ〕山花ノ花ウスアカキユフベカモ此ノ古寺ノユフベカモ

二十七日　日曜日
晴れて大変に暖かい。

二十八日
晴れて大変に暖かい。午後,石丸の叔母様と川上の叔母様とが来られ,夜九時迄遊んで,東京に帰られる。

二十九日
終日雨降り。思ひきって寒くなる。夕刻から風もはげしくなる。寒いのでいやになる。

三十日
終日小雨。不快極マル一日。寒さも一しほ。

✓ツクネント頬杖ヲツイテ居リ冬ニナル雨。

十二月

一日
晴。午後，出京。佑〔中沢〕サン少佐ニ進級。ビールヲ祝フ。

二日
シグレテ寒シ。朝，小石川へ行キシモ，叔母様〔土方愛子〕オ稽古ニテ御逢ヒセズ，敬〔土方与志〕チャン夫妻ハ四谷ニ引越シシ由。四谷ノ家ヲタヅネル。敬チャンハ留守デ，梅〔土方梅子〕サンガ日本館ニ寝台，椅子，テーブルヲスエテ，マダ何トナク落着カナイ。四時頃辞シテ，三沢ヲタヅネタガ

留守。
晩ニナッテ急ニ吐気モヨホシ吐瀉。夜中下痢一回，再び吐瀉。

三日
晴。下痢数回，朝カラ少量ノクヅユヲ食ベタバカリデ寝テ居タガ，夕方久顕〔土方〕ト一緒ニ鎌倉ニカヘル。

四日
朝カラシグレテ寒イ。午後，オヤツヲ食ベテカラ，久顕ト小坪ノ方マデ歩イテ来ル。昌生〔柴山〕叔父様オ帰リ。久顕，九時二十五分ノ汽車デ東京ニ帰ル。

五日
晴。今朝カラ，又々イネガ寝込ンデシマッタノデ，何ヤラカヤラ何ヤラカヤラ，本モ読メナイ

〔三沢〕寛ヨリノ手紙ニ

「○蝿動カズ追ハバ逃ゲメゾ冬ノ縁

ハ，逃ゲメゾト云フ意味ハ，逃ゲ様ゾト云フ意味デスカ，モシソウデシタラ，蝿ノ同ジ動作ヲ小生ガ見マシタラ，兄ト一寸変ッタ観察ヲ致シマセウ，ソシテ

✓蝿動カズ追ヘド逃ゲヌゾ冬ノ縁

ト云フ句ガ出来マセウ
蝿動カズト云ヒ切ッテシマッテ，追ヘバ逃ゲ様ゾト云ヘバ，アマリ味ガ無クナッテシマフ様ニ思フノデス，動カズト切ッテ，追ヘド逃ゲナイト云ヘバ，冬ノ縁ノイカニモ日ガアタッテ暖ナ感ジガ浮ビ出シテ来ル様ニ思ハレルノデス……」
ノ返事ニ云ッテヤル。

「寛様

蝿動カズ追ハバ逃ゲメゾ冬ノ縁

ニ就イテノ御評言，有難ケレド，腑ニ落チヌフシアレバ聊カ申述ベタシ。「蝿動カズ

ト云ヒ切ッテシマッテ，追ヘバ逃ゲ様ト云ヘバ，アマリ味ガナクナッテシマフ」ガ，ワカラナイノデアリマス。先ヅ君ノ直シテ下サッタ句，

蠅動カズ追ヘド逃ゲヌゾ冬ノ縁

ノ意味カラ検討シテミマス。君ノ句ノ意味デハ，冬ノ縁ニ蠅ガ居ルノデアリマスガ，時々動クノデアリマス。処デ君ガ追ッテモ追ッテモ冬ノ縁カラドカナイノデアリマス。

僕ノ句ニ於テハ，同ジク冬ノ縁ニ蠅ガ居ルノデアリマスガ，実ニ僕ガヂット見テ居ル間，動カウトモセズ，一ツトコロニトマッタキリデ居ルノデアリマス。少々根負ケノ気味デ，一ツ追ッテヤッタラ動クダロウト，イタヅラ気ヲ出シテミテ，扨テ立ッテ行ッテ，本当ニ追フ程ノ熱心モナイノデアリマス。

僕ハコノ二ツノ姿ノ中デハ，後ノ方ガ味ガアルヨウニ思フノデスガ。第一数モ少ナク勢モナイ一匹カ二匹ノ冬ノ蠅ヲ，コレデモドカナイカ，コレデモドカナイカト追フト云フコトハ，ヨッポド蠅嫌ヒナ人間ナライザシラズ，ウソデアリマス。其ノ上君ノ意味ノ場合ニハ，動カズト云フ語ハ更ニアタッテ居ナイト思ヒマス。少ナクトモ，縁カラドカナイト云フ意味ヲ直接的ニ語ル言葉トシテハ不適当デアリマス。寧ロ去ラズトデモ云ヘバ，幾分ドカナイトカイッテシマハナイトカ云フ意味ニトレルト思ヒマスガ。

僕ノ句ニ於ケル動カズハ実ニ目前ノ単ナル事実デアッテ，別ニ独断的ニ，例ヘバ君ノ前ノ句，

魚スマズ落葉バカリナリ蛇苦死池

ノ如ク云ヒ切ッタ訳デモナンデモアリマセン。
ソノ上，人間味カラ云ッテモ，追ッテシマッタノデハ芸ガアリマセン。

秋日ヨシ蠅モ飛ベ飛ベウルサケド

コレハ同ジク過日僕ガ作ッタノデ，少シモスグレタモノデハアリマセンガ，自分ノ気持ノ好イ時ニハ，人ガヨクナルモノデス。ウルサイト思フ心ニ変リガナクトモ，シカモ奴等モ嬉シクッテブン〳〵ヤッテ居ルノダロウト，善意ニトッテヤリタクナルノデス。コノ心ノナイモノハ，人間トシテモ味ガナイト僕ハ思ッテ居マス。

トベヨ蚤同ジコトナラ蓮ノ上（一茶）

ココニアル矛盾トカディレンマトカハ，更ニ一曽豊カナ人間味ニヨッテ，当然許サル

ベキダト思ッテ居マス。

兎モ角，此ノ句ニ就イテノ御忠言ダケハ，ソックリ君ニオカヘシシテ，僕ノ句ハシバラクコノママニシテ置キマス。」

六日

曇がち，晴。風あれど，なまぬるくて暖かし。

七日

久顕様。

先日はわざ〳〵おびき出し候処，一向おかまひも致さず失礼仕候。汽車に乗遅れし由，ウカツ者の本体に御座候。更に一時間の待ちぼけは出立ち悪しかりし因果の終りと覚え候。

早速ながら，子規の画讃論《病牀六尺第五十七回》御書送り被下候事，誠に辱く候。大いに参考に相成候事，感謝に堪へず候。云はれて□□（ゐる）みると，なるほど尤とうなづかれ候も，何やら一面的なる観も無之にあらざる如くにも覚え候。也有に至りては，正にすぐれたりとおぼえ候へ共，「要するに画ばかりにても不完全，句ばかりにても不完全といふ場合に，画と句とを合せて始めて完全する様にするが画讃の本意」に至りては，多少一面的にも感ぜられ候。勿論是れも一つの完全には候へ共，一向にこれを主張致すは如何かと存ぜられ候。即ち自画自讃の場合はとまれ，誰か始めより讃を入れてもらはん為，ことさら不完全なる画を描かむや。然らば画家が完全なりとせし画に，更に讃を入れ度くなる才子に至りては，正に不粋者の極みと相成るべきに御座候。或は皮肉屋の子規なれば，この辺の処をこっぴどくやっつけしつもりやもはかられず候へ共，兎も角あまりに外見のみより推すは如何に候や。物の表には裏もあり，コッタものには裏の又裏まで有之候様に御座候へば，所詮此の論法は基本的概念論たるにとどまるかに存ぜられ候。

それはそれにて，子規のいふ画ばかりにても不完全，句ばかりにても不完全……にも亦，自ら度合有之べく，小生の場合の如きに至りては，第一，葵が葵に見えるか否かが先づ問題に候間，自ら問題の中心も亦異動せざるべからざるかに存じ候。耻づかしき次第なれど，亦已むを得ず候。

又前にかへりて，例へば小生の如き，特殊のグーより，南蕃人形等を主題と致し候場合等は，寧ろ却て句をして説明させて，始めて幾分の並偏（普遍）性を得る如き事も有之べきと存ぜられ候。

右感謝にかへてあらあら。

終日曇って寒イ。

八日
終日曇。寒くて蔭気で，日暮から雨になる。

九日
寛様
またまた閉口の雨降りです。その上くだらないおまけの寒さです。お正月も近いといふのですから，仕方がないといへば仕方がないのですが，いづれにしても心細い次第です。
扨て，お約束の君の句に対する感想を□先づ第一番に述べる事に致します。が，今度は多少，機に乗り過ぎて沢山お送り下さった為か，なるほど玉石ごっちゃの感があります。尚敢て云ふならば，石の方が多いかも知れません。

一望凩に暮れ富士□□□(濫なり)藍なり

の一句，小生愛誦して止みません

日落ち濃藍の空に葉黒く

と共に，どうも君は夕方の景を掴むに，ひどく鋭いように思ひます。そして，調子に於ても，句形を越えて巌とした確かさがあって，少しもあやうげな感のない所，正に老手の域であります。此の境，文句なしに降参します。

桐箱の色と味とを愛すかな
柱によるや机上の乱れ雨を聞く

前者の趣味高く，後者の姿面白く思ひますが，二句相通じて一脈のあきたらなさを感じます。それは，「構へたる心」，多少露骨な自負心が透いて見えることであります。平たく，そして悪く云へば，何処とはなしに，これ見よがしの作意が句辺に漂ってゐることであります。世阿弥と云ふ人が花伝書の中に「秘するは花なり。秘せずば花なるべからず」と云うて居ります。
第一の句に就いて云へば，作者が桐箱の色と味とに気がついたことが読者に伝へられればいいのだと思ひます。否，そこでとめて置くところに奥床しさがあるのだと思ひます。同じく後の句に於ても，「雨を聞く」の中に，既に立派に，而も奥床しく君の姿が

描かれてゐると思ひます。それを其の上更に柱によるやと云って，切角の奥床しさを峡〔狭〕く限定して了ったようです。それよりもここは，薄寒やとか何とか云って「雨」を説明するとか，或は季を説明するとかに止めて置く方がよくはないかと思ひます。

主移って唯サルビヤの乱れけり

此の句，題詞をはなれると，稍平凡であります。これでは只空家の前を通ったらサルビヤが乱れてゐたと云ふだけで，曽て君自身が可愛がったサルビヤとはとれません。少なくとも，サルビヤに対する君の感慨は何等描かれて居ません。

家移ると庭のサルビヤをながめけり

こんな風にでもすれば，兎も角サルビヤとのお別れが描かれると思ひますが。

薄日あびて枯野の尾花ほの白し
二三人動かぬ影の枯野原
子供等の遊べる朧にて声夢なり

是等「夢の中に遊べる心持三句」は，どうも朧で賛成出来ません。朧の姿がもっとはっきり描かれてほしいと思ひます。是等の句の朧さは，夢の中の朧さを覚めてゐて作ったと云ふより，曽てあった光景を夢の中で作ったと云ふような感じです。たよりなく，あやうげです。

簪をいくつ集めて八ッ出花

は，稍チャチ

天をます枯松の今朝はなかりけり

は，題詞をはなれては稍無理

――――――――――――――――――――――――

朝からどんより曇って，時々黄色い日が照ったりしては居たが，暗くてだんだん寒くなって，夕方からとう〳〵雨になる。

十日
終日雨。午後，昌生叔父様が帰って来られ，夕方から安藤氏が来られる。

十一日　日曜日
晴。

十二日
晴。午後，川上のおば様来られ，晩八時の汽車で帰られる。

十三日
晴。

十四日
晴。

十五日
晴。
十六日晴
□□□□。風烈し。但，南風にして気持悪き程暖かなり。

✓古池ヤコンナトコロニ枇杷ノ花

十六日
終日雨。寒く。

十七日
晴。北風が吹きさらしてひどく寒い。

十八日　□□□日曜日
小雨。朝早くみぞれが降る。

十九日
晴，後曇。今朝は又ひどく寒くて，庭の芝生一面に真白に霜がおりてゐる。晩方ちらちら雪。

✓凩や床の中迄はひどからう

✓凩よ寝つく間(ま)程は止めばよき

二十日

昨夜ノ雪ガ屋根ヤ芝生(ママ)に薄ク残ッテ居ル，晴レ寒気酷シ。

二十一日

晴。風稍荒ケレド，アマリ寒カラズ，朝ノウチ所用デ橋本太吉氏ヲ訪ネル

二十七日

二十二日に東京に出た。二十三日，雨に降られ。□□□(二十四)佑サンと久顕とで新橋演舞場見物，菊五郎，吉右衛門，三津五郎の一座で，一ノ谷嫩軍記，太刀盗人，と世話物の何とか云ふのを見て，最後のは見ないで帰る。

久々で旧劇を見た。時代物もいいが，時間が長いのでがっかりする。太刀盗人はいつみても面白い。

二十四日は大変な風でひどく寒かったが，□□午後出かけ，敬チャンの処を尋ねたが，留守なので銀座に出て時をつぶし，築地小劇場に人形座を見にゆく。つまらない。三沢，倉沢，荒井の徳サン，田中ノ戌チャンなどが来て居たので，それでも終まで見てかへる。二十五日，大森ノ兄上の処へよばれてゐたので，午後ゆく。大変なお客様だった。夕方辞して帰る。二十六日，暖かい。が面倒臭くて外へ出る気がしない。ぼや〳〵してゐる。久顕サンと高円寺の方をぶら〳〵散歩。二十七日，今日朝，三沢を尋ね，一緒に銀座に出，四時三十五分の汽車で三沢に別れて鎌倉に帰って来る。

二十八日

曇，午後雨ニナル。夜，止ム，風烈シケレド生温。

二十九日

晴，風荒レテ寒シ。

三十日

晴。風荒レテ寒シ。夜，昌生叔父様お帰りになる。

三十一日

晴。いろいろ。

✓年も暮の大夜夜更けぬ聞ゆらく遠海の浪の荒れの寒けく。

昭和三年

一月

一日

晴。静か。午後，叔父様お帰りになる。

✓五本松ニ元日ノ朝日アフレタリ

二日

朝小雨，曇，午後晴れ，晩風立つ。
終日家に居て，子供達の相手。

三日

晴，風。晩，久顕来。

四日

晴，静か。午後，久顕と茅ヶ崎ニお墓詣り。

五日

晴，午後，久顕と散歩，長谷通りを大仏様まで往復。晩，佑サン夫妻，子供達ヲつれてくる。

六日

晴。風アリ。昌生叔父様，午後，子供達ヲツレテ帰ラレル。

✓万歳ニ春祝ハセテ居ル居候
万歳ニ春祝ハスル居候
✓□□□□□□□□□□
✓芽出度サモ少シハ欠クル居候
〔ママ〕
✓兎モ角モ母ト祝ヒシ去年の春

七日

晴。朝早ク梅子叔母様御産，女ノ子[153]。
久顕，午後東京ニ帰ル。毎日ノ事ナガラ何クレトゴタゴタシテ落着カナイ。

松ノ終リニ
✓出マシタリ□□□□□松トレシ朝ニ三ノ姫

八日　日曜日

家中で寝坊して居たら，十時前に譲二叔父様が子供達をつれて来られる。家の中はごったかへして居るので，皆で十二時半の汽車で横須賀ニ行き，山城[154]にゆく。三時半のランチで上陸，三笠[155]に行ったが，時刻が遅れたので見物出来ず。水交社で晩食，それより同勢にてコマツへ行き，終列車で鎌倉へ帰ってくる。

九日

曇晴。譲二叔父様達ハ，寝てゐるうちに東京に帰られし由。昌生叔父様も夕方艦に帰られる。

十日

曇。朝小雨。夜小雨。

なまぬるい風が海の方から吹いて，一日中吹き荒れて，霜どけがして，地面がじめじめと春先のようにやはらかくなった。小さい道哉のお墓詣りをして悲しい思ひをした。倉沢の若い奥さんが死んだ通知をもらって，うっとりした。

✓新婚の夢まださめぬ頃を春浅みよき人逝けば悲しきろかも
✓八千草の千草の中ゆこれよこれとすぐりし花のみのらずもあはれ
✓にひばりとこよの光かけまくもおぼしおこししにひばりもはや
✓春を浅みまだ春を浅みみまかりし君がいもいとしと君泣くらむぞ

夜十一時を過ぎて，風益々荒らく，雨瀧のように降る。

十一日

雨〔止カ〕降んで，青空が思ふさま青くなる。暑いように暖かい。晩，昌生叔父様オ帰りになる。

✓この大木（おほき）は何とふ木にか冬の日に堅葉つややけくつぶら実の赤き
✓赤子あやして妙本寺の庭を一廻りして一とき居しに肩のこりはも
✓妙本寺の山に鵯鳥が鳴き渡る鳴き渡る毎にこの赤子笑ふ
✓此の寺の庭までは日足届かねど裏山の照りに冬日晴れにけり

十二日

曇，晴相半。寒さが帰って来る。此の頃はイネが寝込んだり，看護婦さんが居たり。子供達が外で遊べなかったりするので，道隆のオ守りだの，何だのかだので，寝る前の

わづかな時間だけが自分の僅かに落着く事の出来る時間だ。だが幸な事に，そんなに何も出来ない事を苦に思ふような心も用心深く鈍って居てくれる。

✓赤子あやせばただに赤子にへつらひて大方の事はさもあれとこそ思へ
✓此の赤子は鳩が好きな赤子ほほといへばほほといらへて手もてあっちさす

十三日
曇，晴，寒シ。

十四日
曇，時々薄日す。晩，叔父様御帰宅。

✓夕寒に羽子の音続かずまた一つ

十五日　日曜日
雪がうすくつんでゐる。午までちら〳〵降ってゐたが，午後晴れていい日になる。叔父様と午後半日「書」の整理。晩，叔父様艦ニ帰られる。

寛様……
かるが故に，御作面白く拝見致し候も，細々と何か申し上ぐべき悠気なく候間，あっさり片づけて，此の度は失礼可仕候間，悪しからず御海容被下度く候。

　凩や木の葉の霰犬の巴

　犬の巴面白く存じ候，

　火鉢だく夜や鐘の音犬の声

同じ技巧ながら，前の句とくらべて面白くなく候，此の名詞並べの句は，互の関連が説明せられぬ故，余程必然性を要し候，然る所，此の必然性乃至並〔普遍〕偏性を気にかけると，兎角平凡俗趣に陥る如くに御座候，即ち此の名詞並べの技法は，非常の時に大なる効果ををさめ候も，常時凡庸に用ふる時は，兎角句の位あがらぬものに御座候，

　寂々身を切って月霜に氷る

は，堂々たるものに候，但し，敢へて云はば，寂々身を切っては，少しく気ほひ過ぎし如くにも存ぜられ候。も少し優しき言葉にて同じ思ひを歌ひ得ば，更に上乗と存じ候。

厠に立つや凩ほえて弦月の氷る
風ないて弦月のぞく寒さかな

どちらを取るやとの仰に候へども，忌憚なく云はば，両方とも寒さにとらはれ過ぎて，姿に乏しき如くに覚え候。凩ほえて，風ないては，既に随分強き言葉に候，重ねて弦月の氷る，寒さかなと云はずとも，足らざる如き事無かるべく，ここは寧ろ

厠ニ立ツヤ凩ホエテ月冱エ〳〵
風ナイテ弦月ノゾク小窓哉

ノ如く，調子を落して句を据ゑる位ひにては，如何かと存じ候も，必ずしも主張致すものには御座なく候，

以上草々

十六日
晴。風吹けど寒からず。

十七日
晴。霞んで静か。

十八日
終日小雨。

十九日
晴。霞んで静かで稍暖かい。午後，川上のおばさまみえ，夕方帰られる。夕方小雨。

二十日
晴　寒

二十一日
晴。寒

二十二日　日曜日

晴。風無けれど，ひどく寒し。

二十三日

曇。夕刻より雨。ひどく寒い。

二十四日

雨ヤンデ，午後マデニダンダンニ晴レテ，暖カイ。夜又雨ニナル。

盛岡ノ上原氏ヨリ家福餅ヲ送リ来ル。

✓上原ノ氏ガ致(オコ)シシ家福餅盛岡名産家福餅是レ
✓サス竹ノ君ガ致(オコ)シシ家福餅イザ戴カム子等ニモワカタム[156)]
✓送リ来シ人ノナサケノ味ニコソ舌ニヨロシキ家福餅ノ味
✓送リ来シ人ノナサケノ籠ラフカ家福餅ノ味ヲ忘ラフベシヤ
✓北国ノクルミノ香スレ家福餅□□□□□(心アル如モ)噛メバコソ香スレ心アル如モ
〔欄外に記す〕
［胡桃］

二十五日

晴。静カデ暖カイ。　□□□□

二十六日

晴。暖かい。

二十七日

曇。午後三時頃より雨。

午後，附属小学校で県下小学校作品展覧会があるので，小供達をつれて見にゆく。

二十八日

どうやら晴。大変ニ暖かい。

✓此の寺の梅の花早しと見れば　木蓮の蕾もそれと目立つ程なり
✓此の寺の裏山に鳴く鶯の声　かしまし□□□(くして)けれどあはれ□□□□(さひたり)ふかけれ[157)]
✓山茶花の末花一つ褪せたるべ　沈丁の蕾青けく芽ぐめる

二十九日　日曜日

晴。

三十日

晴。

三十一日

晴。

✓日だまりに開ききったり福寿草
✓縁の陽(ひ)に福寿草の黄や鶯の鳴く

〔欄外に記す〕
[久顕様]

✓朝ナ朝ナ置キ敷ク霜ノ白ケクニ寒サモ頂上ト覚エテ候
✓風邪(かぜ)□□□□モヒカズオ過ゴシナサレ候ヤ　カホドモ寒キ日毎日毎ヲ
✓二月五日オ墓詣リシテソノカヘリ東京ニ出デント思ヒ居リ候

✓墓の辺にあかきものあり寄りて見れば朱色かなし(愛)き山梔(くちなし)の実こそ
✓山茶花の末花あはれと見たれど山梔の実の朱色は更なり
✓枯るる程は枯れし冬べの御(み)墓所に山梔の実の朱色かなし(愛)も

昨日(きぞ)の雨　昨日(きぞ)止みけるを
此の寺の草葺屋根ゆ
□□□□□□□□□

今日の日の春めく晴れを
草葺の此の寺屋根ゆ
溜り水　ひまなく落ちて
日溜りに　音し落ち居て
はねかへる　音のしみじみ
日溜りに　しぶきし撥ぬる
そのしぶき　きららきららぐ
飽かず見るそをば
　返歌
雨止みて時ありてここの草葺屋根ゆ

溜り水音し落ち居り飽かず見るそをば

雨はるか過ぎけるものを此の古寺の
草屋根ゆ滴降り止まず音のよろしもよ

雨止みて今日は晴れしを此の日溜りに
軒水の落ちてはしぶく此の日溜りに

二月

一日

晴，北風ガ寒イ。

午後四時半頃，倉橋弥一君ガ訪ネテクレル。長谷ニ川路サンノ奥サンガ伴野君ヲツレテ来テ居ルノデ，見舞ニ来タ帰リトノ事デ，夕食ヲ供ニシ，八時ノ汽車デ東京ニ帰ル。

二日

晴。
晴□。午後，秋庭サンの奥サンが来られる。

✓冬の月あまりに寒き夢ながら
✓下駄の音（オト）に急ぎ心や冬の月

三日

晴。午後，長谷に川路サンの奥さんを訪ねる。

四日

晴。静か。叔父様の用で山城に行く。午後三時三十分の定期で叔父様が上陸されるので，一所（緒）に帰る。

夕方，山崎泰雄君が来てくれたが，まだ方々寄るとかで，直き帰る。

五日　日曜日

曇。終日何をすると云ふでもなく，ぶら〳〵してゐる。東京に出るつもりだったが，天気が如何にも怪うげなので止める。晩のラヂオは明日は雪が降るだらうって云ってゐる。遅く雨が降りだす。

六日

昨夜ノ雨ハ雪ニナリ，一二寸積ンデ居ル。昼前マデ続イテ降ッテ居タガ，ダン〳〵雨ヲマジヘ，雨ノママ夕方マデ続イテ降ッテ居ル

七日

春先のような暖かい，いい晴日で，少しばかり積った雪はすっかり溶けてしまふ。

✓あは雪の溶けてかげろふや墓どころ
✓雪どけの撥ねてまぶしき日向哉
✓雪どけの寄ってちひさく流れけり
✓雪どけに浮いて流るるや梅一輪

八日

晴れ。下の嶌村さんの貸家に，今日から川上のをぢさまが来られる。

久顕様

御作沢山ニ御送リ下サレ有ガタク拝読致シ候，早速ナガラ妄評仕ルベク候，妙本寺〔ママ〕の歌ハ仰セノ如ク愚作ト迄ハ見下ゲズ候ヘ共，ドレモドレモ今一息ホシキ如クニ候，

✓日のささぬ蓮池の底の枯れはすの乱れたるを見る秋も暮るる頃

モ四五句ノ「乱れたるを見る秋も暮るる頃」ニテハ，聊カ中途ハンパニテ，主観ノ稀薄ヲ感ジ候，ココハ，「枯ハスノ乱レ……シ」ノ如ク，何等カ主観ヲ説明スベキ語ヲ入ルルナリ，或ハ純客観的ニ「枯レハスノ乱レニ乱レタリ」ノ類ニ，何処迄モ叙景ニ止メ置ク方ガ有効ノ如クニ存ゼラレ候，

✓山庭の大きしじまをひっくらかし百舌鳥鳴き去りぬ　静かなる哉

ニ於ケル「ひっくらかし」ハ大イニ詠ミ得タルト同時ニ，多少過ギシ感，是レ無キニアラズ，「ユルガシテ」程ノ言葉ニテ，何カ適当ナル語ヲ見ツケ度キモノニ候。

✓大木のいてふの下の墓所おびただしもよ黄色の落葉

ノ歌ハ多少平凡ノ如ク，多少大ザッパノ如ク，墓石ノ上ニマデ一々積ンデ居ルト云ッタ様ナ「姿」ガホシク存ゼラレ候，

✓仰ぎ見る遥かに高き梢よりいてふ散り来も散りてはたまる

イテフノ落葉ガタマル如キ主題ハ，ヨホド「ウマク歌フ」コトガ肝要ニテ，技ヲ練ル為ノ習作トシテハヨロシキモ，兎角面白カラズ候，猶，或ハアマリニ潔癖ノ如クナルヤモ知ラネド，セッパツマッタ表現ニアラザルカギリハ，「梢よりいてふ散り来」ノ如キハ止メタキ如クニ候，

〔以下抹消〕
[✓この庭にいてふ静かに散りて居り梢には寒きほそ月を見る
「梢には」ノ「は」ノ意味，有ル□□□□□ガ如ク無キガ如ク，解シカネ候，御序ノ節御説明下サレ度ク候，]
〔欄外に記す〕
[(一字「静リテ」ハ「散リテ」ノ誤ナル由ニ就キ，此ノ一下リ抹殺)]

諏訪湖

信濃は，群山のむら立つ国，その山の囲む大湖（おほみ）は，冬来れは吹く風寒み，峯こえて日は照せれど，天霧ひ雪は降らねど，日を継ぎて凍（し）み渡るらし，汀辺に我が立ちてきく，あはれその音，

返歌

紫に氷湖（ひうみ）くれ行くひと時を騒立（さゞだち）さむし岸の浅茅生
立ちめぐる雪の高峯の夕映を寒しとは見たり家離（さか）り居て
あかあかと夕はゆる山に向ひ立ちひたぶるに我は家ぞ恋しき
うから（ら）がまどゐのひまも凍みわれて止む時もなし諏訪の大湖は
この里に老ゆらむ娘等（こら）と炉に居りてその訛れるをひそかに愛す

長歌ノウチ，「雪は降らねど」ハ，不注意，或ハ不用意ト存ジ候，即チ信濃ハ大イニ雪降ル国ニ候，而シテココハ，今ハ「雪モ降ラヌヲ」ノ意ト存ゼラレ候，若シ上ノ「照せれど」ニ対シテ「降ラネド」トナシ，押シテ意ヲ通ハセントシタルナラバ，ソハ無理ノ如クニ存ゼラレ候。

返シ歌ノウチ，「紫に……」「あかあかと……」等スグレテ覚エ候，但シ一々ニツイテ難クセヲツケルナラバ——最モ不注意ナルハ「うから　が」ノ歌ニテ，「まどひのひまも」「止む時も」ハ，重〔複〕復ニテ蕪雑ノ如く思ハレ候。「マドヒノヒマモ凍ミワレテ止マズ」カ「マドヒシ居ルヲ（マドヒノヒマヲ）凍ミワレテ止ム時モナシ」カノイヅレカニ致シ度ク存ゼラレ候，

「この里に……」ノ歌，例ノ潔癖ヤモ知レザレド，「炉に居りてその訛れるを」ハ，常識的ニハ意通ズルモ，表現トシテハ感心致サズ候，

「紫に……」ノ歌，四五句ヲ転倒シテ「岸の浅茅生」ト名詞止メニシタルヨリ見ル時ハ，

浅茅生ガ焦点ノ如ク，「騒立さむし」ト語ヲ切リシヨリ見レバ，「さむし」ガ中心ナル如ク，互ニ転倒セシ意味ヲ殺シ合ヒ居ルガ如キ形ニ候。

「騒立チ寒キ岸ノ浅茅生」ナリ，「岸ノ浅茅生騒立チ寒シ」ト致シ度キトコロニ候，前者ノ如クスルトキハ，岸ノ浅茅生迄ガアマリニ長々ト一本調子ニナルヲ恐レ，後者ノ如クナストキハ，騒立チサムシハ，結句トシテ多少物足ラヌヲ恐レシニヤ，兎モ角此ノ間多少ノ無理アリシ如ク感ゼラレ候，猶，附記セバ，「さむし」ヲ止メテ，騒立ノ「姿」ニナセバ，此ノ歌「天地の春」ニモマサル秀歌トナランカニ存ゼラレ候。小生，アナガチ主観語ヲ排斥スル意ナキモ，正道ヲ堂々トユクガ，君ノ歌柄ノ如ク思考スルモノニ候

（天地の春）

✓きら〳〵と樫の若葉に春の日は光りて跳れり春空の下に
✓美しき春日の光樫の葉のどよむと見ればきらめけるかも
✓あめつちに溢るる光ひととこに引締めて立てりこの大がしは
✓しん〳〵と降り注ぐ陽に我が膝の白のむすびの眩しかりける
✓野に出でてべんとう喰へば青草の香のうつれるをあはれと思ふ
✓天涯の末に澄み入る空の色ふりさけ見れば悲しその色

「天地の春」ハ，君ノ自信ニタガハズ正道ヲ堂々ト行キテ，瑕瑾ナキ秀歌ニ候。ナカナカ及ビガタキモノニ候。

但シ，此ノ内，「野に出でて……」ハ，別ノ味アリテヨロシク候ヘドモ，「しん〳〵と……」ノ一首ハ，少シク大業ニテ滑稽ニ候，「野に出でて……」ノ如キ味ノ方，此ノ主題ニフサハシク思ハレ候，

以上，厳密酷評ニ過ギシ嫌ヒアレド，御礼ノ心ニ候，

九日

晴，

十日

晴。午後，イネヲツレテ茅ヶ崎ニオ墓詣リニ行ク，帰リイネヲ先ニカヘシテ，オ末様ノ所ニヨル，丁度久武〔土方〕ガ帰ッテ来テ居タノデ，一緒ニ夕飯ヲスマセテ，七時ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテクル。

昌生叔父様オカヘリニナル。

✓麥垣々冬餌ヲアサル群鳥

十一日　紀元節
氷雨が雪になり，真白に積む。

十二日
曇。雪の翌日の曇日で，誠ニはえない。雪はあらまし溶けてしまふ。

十三日
晴，寒。

十四日
氷雨。雪まじり風まじり。寒イ。

〔弟・久顕からの手紙，便箋四枚をノートに貼付。縦書きで，右から左へ書く。〕

早速御評言を下され，有難く候，只今，産科の勉強中，小閑を得て御便り申上ぐる次第，因に先日の眼科ハ及第仕候間，御喜び下され度候，小生の歌の御高評に対することは後回しとして，今の度は先づ御作につきて妄言相聯ぬべく候。

輝く雫の長歌を初めに読みたる時，ことにその後半に至りては，光，音，音，光と，ほとんど応接に遑なく，一句々々順を追ふて味ふ中に，我が頭，殊〔殆カ〕んど疲れ申候，さるにても，勇を鼓して拝読二三回に及びし時，漸く悟る所あり，忽然として妙味を覚え申候（但し御自覚ありしや否や，或ハ却って片腹痛しと思召すやも知れず）。即はち感すべくして解すべからざること，歌といふよりはむしろ或種の詩の如きものと合点仕り候，実際今日の如く雪のあしたなど転り落つる雫を見て居ると，ひらりと光ってはぽつりとおちる，一つが落ちたと思ふと又，左の隣でおちる，今度は二寸も左のがおちるかと思って居ると，忽ち右の方で又光る，右の端で光ったかと思ふと，まん中でおちる，そしてその間に，その一粒々々がそれ〳〵の音をたてゝ，可愛らしい音と強い閃きとがちゃんぽんにたえまなくきこえて見えて，それは〳〵とても復〔複〕雑なるものに候，あの様子をよくも三四行の間に詠まれたる哉と感心仕りたる次第に候，然しながら，上半分には多少意見これあり，先づ起しが稍ことはり過ぎたる憾なきや，「昨日の雨，昨日止みけるを」が，すでに言ひすぎと考へらるゝに，更に「今日の日の春めく晴れて」と重ね，而して後に初めて矚目の光影に及び候様，小生ハ同意致しがたく候，昨日の雨昨日止みけるを，は後の「溜水」に含ませても決して不満あるまじく，今日の日の春めく晴れて（この句自身としては，のどかなよき句と覚え候）も，「日溜」といふ特殊の気分の日向（ひなた）に含ませて割愛するか，或はこれを最後に置きて，結句を中段と多少区別するも妙ならむと存じ候，更に最初に大影を感ぜしむる手段として，「此の寺の草葺屋根ゆ」は小生の好み

によれば,「くさぶきの　この寺屋根ゆ」(寺よりも草葺屋根が先に眼に入り候) と致し度く候, 返しの施頭歌三首, 何れも「雨止みて時あり」にかゝづらひすぎたる感これあり, 昨日の雨が今日落つることに, 殊更特殊の興味を感ぜられたるにや。且つ何れも長歌程の閃きに乏しき様感じ申候, 返歌第一首の結句「飽かず見るそをば」のあたりに, 工夫あって然るべしと存じ候,

次に小生の歌への御高評事, 枯れ蓮の歌の「秋もくるゝ頃」は, 御説の如く全く中途半端にて, 好ましからず候, 実にこの歌はすでに小生歌稿中より抹殺致さんかと存じ居りたる所にて, 何方か改作せずんば唯ではすまぬ歌に候, 次に「山庭の」の「ひっくらかし」が過ぎたりの御言葉なれど, 小生としては, 尚ほ足らざるやを疑ふ句にて, 静まりかへりたる秋の夕ぐれに, 突然何の予告もなしに百舌鳥がリュリュウン〳〵とやり出すと, その瞬間に突きおとされた様な気がしてハッとする程の鋭きものに候,「ゆるがして」や「とよもして」等の調ひたる言葉にては, 到底足らずと存じ,「目茶苦茶にし」「たゝきこわし」「ひっくりかへし」「ひっくらかし」「おしつぶし」「けとばして」等を考へ, 結局「ひっくらかし」と据ゑたるものに候,

素知らぬふりをして歌ふのは, 茂吉などのよくやる手法に候へども, 小生の技の足らぬにや, 或は兄の趣味ならぬにや, 恐らくは両方にて, 兎も角も, この様な, つまりいてふの木の歌の如きは, 常に兄の不評を蒙る所に候,「大木の」の歌は,「蓮池」の歌と同様, このまゝにてはどうも度し難き代物の如く感ぜられ候, 或は「そ知らぬふり」を止めて, もっと突込んで「姿」を詠むべきやも知れず候,「仰ぎ見る」は, 可なり苦心致したるもの, 梢を離れたる葉が土に落つるまで, ず──っと高い梢の方から, 而もはっきり一葉々々が見えて居て, ひらひらひらひらと, 相当の時間を要して中程をすぎ, 根元に近づき, 遂に土に達し, 落ち付くべき所に落ちついて, かくして次から次へと落ちたまる様に興味を感じたるものに候,「止め度し」と言ひて止めればそれまでながら, 工夫して見たき境地と覚え申候,「この庭に」の歌の「梢には」の「は」は, 一と通りの意味を有するつもりに候, 即はち,「この庭にいてふ静かに散りて居り」までは, 小生は散る葉を見て未だ梢を見上げず, 而して散り来る方に眼をむけて, 始めて梢を見, そこに細月を発見したるものにて,「は」には, 作者の動きを説明させたき心に候, 総じて歌をよむ場合に, 作者の位置, 或は姿勢等を判然せしむることは, 一種の気分を説明するに, 可なり重大なる役目を演ずるものと常々心得申し居り候, 花を見るにしても, 縁側から庭を見たるか, 庭に出て三四間も離れて見たか, 或は一尺, 五寸の近くまで顔を近よらせて見たるか等は, 可なり一首の気分に影響する程の境地の変化に候, 重大な用件を帯びて道をあるいて居るか, 旅屋の浴衣で散歩して居るか等が, 全く異る境地なる事は勿論に候,

諏訪湖の歌はこの度は止め申候,

兄上様　　久顕

江波氏上京中の由，御遊びにお出下さいと，広瀬より伝へられ候，先週金曜日の話。

久顕様……

扨テ小生ノ変ナ歌ニ就イテ，コマゴマト御批判下サレアリガタク候，ヤヤコシク，サワガシキハ，如何様，小生ノ作全般ニワタル欠点ノ如クニ候モ，兎角大様ニシテ，ナメラケキ歌ニ至リテハ，更ニ小生ニハ不得手ニ候為，ママヨ，何処マデモヤヤコシクナレ，サワガシクモ構ハズト度胸ヲキメ居ル次第ニ御座候，扨テオコシヲコトワリ過ギシトノ御評，成ル程ト合点致シ候モ，実ハ此ノ節頻々ノ降雪カラニ御座候，ト云フハ，アノ変ナ歌ハ先月十九日ノ着想ニテ十日程モ成ラズ。即チ十八日ガ雨ナリシヲ，十九日ハ忘レタル如キ好天ニテ，現ニ当家ノ屋根ハ（尤モ瓦ナレバナレド）カラカラニ候処，フト妙本寺ノオ庭ニ参リ候ニ，アノ如クニ候，大イニ興覚エ候ヘドモ，日中日向ニ，カクモシゲシゲハシブク「雨ダレ」ハ，何トシテモ何トカコトワラネバナラヌ様思ハレテ，短歌五六首モ詠メン如ク思ハレナガラ，遂ニ一首ヲモ成サズ，遂ニ月末ニ到リテ，アンナモノニマトマリ候次第ニ候，成ル程，ハジメヨリ雪ドケノ如キヲ予想セバ，単ナル「雪ドケノ」ニテ結構ノ上，返歌ノ一首一首ニマデコトワリシ草葺屋根モ，要ラザリシヲワカリシ次第ニ候，「クサブキノ此ノ寺屋根ユ」ハ，ヨキ云ヒマハシ御教示下サレ候，直チニソノ如ク改メ候，尚返歌ノ「雨止ミテ時アリ」ニカカヅラヒタルハ，「殊更特殊ノ興」ニモ侍ラズ，前述ノ如キ次第ニテ「日溜リ」ト「雨ダレ」トヲ，何トカ結ビツケン迄ノ窮策ニテ，重々見トモナキ次第ニ候

次ニ先日ノ御作ニ就イテノ小生ノ妄評ニ対スル御抗議，ナカナカウガチタルモノアリ，大イニ得ル所アリ，盲者ハブツカッテハジメテ知ルモノト悟リ候，今後モ大イニブツカルベク候間，オハネカヘシ下サレ度ク候，

少々執拗ノ嫌ヒアレド，今一二申述べ候，

「仰ギ見ル……」ノ歌，御説明ニヨリテ大イニ見直シ候モ，小生ハ「散リ来モ散リテハタマル」ヲ，連続的ナル一ツコトト見タルモノニ候，サレバコソ，落葉ガタマル如キ□□□□主題ハト頭ヨリ申候，

御説ニヨレバ「梢ヨリ散リ来モ」ハ中程ヲ過ギ，根元ニ近ヅキ，遂ニ土ニ達スルヲ歌ヒ，「散リテハタマル」ニ於テ，カクシテ次カラ次ヘト落チタマルヲ歌ハレシ（厳密ニカクトニハアラネド）由ナルモ，「散リ来モ散リテハタマル」ニテハ，聊カ不明瞭ニ候，否，譬ヘ散リ来モト一度切リタリト雖モ，一般ニハ此ノ形ハ一ツコトヲ念ヲ押シタル如クニ取ラレ，「散リ来モ」ト「散リテハタマル」トハ御説ノ如ク，オ誂ヒ向キニハ受取リ難ク候，即チ御説ノ意ナラバ

仰ギ見ル遥カニ高キ梢ヨリイテフ散リ来モ斯クテハタマル

ノ如ク，同ジ言葉ヨリ来ルマギラハシサヲ避ケ度ク候。尚是ヲ更ニ厳密ニ解剖セバ，前者ハ次ノ如ク

1 仰ギ見ル遥カニ高キ梢ヨリイテフ散リクモ
2 仰ギ見ル遥カニ高キ梢ヨリイテフ散リテハタマル

(1)（2）ハ連続的ナル一ツコトノ時間的差異ヲ表ハス。カ或ハ次ノ如ク

仰ギ見ル遥カニ高キ梢ヨリイテフ ┬ 散リ来モ
└ 散リテハタマル

ノ如ク「散リ来モ」ト「散リテハタマル」トヲ，大体同義ト解スルナラバ，一ツコトノ「念押シ」，或ハ一ツコトノ「二重ノ咏歎」トナルベク，此ノ二ツノウチノイヅレカニ解セラルベキ如クニ存ゼラレ候，

後者ハ

1 仰ギ見ル遥カニ高キ梢ヨリイテフ散リ来モ
カクテハタマル

ト解スルカ，或ハ場合ニヨリテハ

2　仰ギ見ル遥ニ高キ梢ヨリイテフ散リ来モ――（即）カクテハタマルノ如ク解スルカノイヅレカト相成ルベク候，而シテ，此ノ歌ノ場合ハ，(1）ノ如ク解シ得ベク，例ヘバ「山庭ノ……」ノ歌ニ於ケル「静カナル哉」ハ（2）ノ如ク解シテ可ナラント存ゼラレ候，

次ニ「コノ庭ニ……」ノ歌，前便ニハ，

コノ庭ニイテフ静カニ静リテ居リ梢ニハ高キホソ月ヲ見シ

ト御座候，「散リテ居リ」ナラバ，ソコニ漸遷的ナル関係生ジテ，御説ノ如ク「ハ」ノ意味明瞭ト相成リ候，「静リテ居リ」ニテハ，其処ニ何ラ漸遷的ナル関係明瞭致サザル故ニ，前半ト後半トノ関係ハ，全ク対立スルモノノ如ク解セラレシ為，「ハ」ノ意味判然セズト申シタル次第ニ候，

(蛇足ナガラ，静リテノ場合，小生ノ解釈セシ所ヲ一応申シ添へ候)

即チ小生ハコノ歌ヲ

1　コノ庭ニイテフ静カニ静リテ居リ
2　（イテフノ）梢ニ（ハ）寒キホソ月ヲ見ル

ノ如ク解シテ，只々迷ヒシモノニ候，御説ノ如クバ〖「静リテ」ヲソノママトスレバ〗

1. コノ庭ニイテフ静カニ静リテ居（ルヲ見ル）
2. （サテ）梢ニハ寒キホソ月ヲ見ル

ノ如クト相成リ，然ルトキハ「総ジテ歌ヲヨム場合ニハ作者ノ位置，或は姿勢等ヲ判然セシムルコトヲ常々心得」ラルル君ニシテ，前半（1）ニ於テハ客体ヲ客体ノママニ独立セシメ，後半（2）ニ於テ客体ト主体トヲ対立セシムル如キ手法ヲトラルルハ，甚ダ解シ難ク思ヒシモノニ候，而シテコレハ当然

コノ庭ニイテフ静カニ静リテ居リ
梢ニハ寒キホソ月カカル

或ハ

コノ庭ニイテフ静カニ静リテ居リ
梢ニハ寒キホソ月……見ユル

ノイヅレカナラデハ叶ハズト思考シタルモノニ候，

十五日

晴レテ春ノヨウニ暖カイ。ヒドクイイ気持チデ，ウカレ出タイヨウナ日ダ，

〔欄外に記す〕
［青イ海ニ浮カブ］

私が生れた東京よ
私が育った東京よ
繁華な都会よ，雑踏の巷よ
親しい友達よ，骨肉よ
お別れの時が来たようだ
随分永い間の交情だった
そして私は兎も角もお前から受取ったものに対しては
それだけの恩顧と感謝とをも忘れるものではない
これから先も閑かな追憶の靄の中に
夢見勝ちな気ままな物語の虚構の中に
□□□□□□□□□□□□□□□□
〔欄外に記す〕
［或る時，物悲しいようなゆうべの砂浜で］
永く永くお前を思出す時があるだろう
だが私は今は立たなければならない
私は青い海に浮び出度いのだ
青い海は私を未だ知らない，懐かしい――
何処へでも私をつれて行ってくれるだろう

偖て，私はぢきに青い海に浮び出るだろう
北へか？
昔古代ギリシャの頃には世界の遥か北の果に
高い□□山々の彼方に久遠の春と祝福があって
そこに幸福なる――ハイパーボレアンズが住んで居た
だが今ではハイパーボレアンズさへ凍(こご)えて了ったらしい
否，譬へそこには何んな詩があるにしても
私の血は北方の永い冬の窒息には堪へないだろう
そこで私の血は常夏の南へと憧れる
その南の青い海の只中に浮んでゐる小さな島は
私の為に暫らくの好もしい生活と，それから，
私の為に静かな墓地とを用意してくれるだろう
そこでは大王椰子の木が高く天にかざして
すこしの風にその高い葉先をさら〳〵と鳴らすだろう
そこでは乾いた砂地に何処までも，何処までも
その太い根をぶす〳〵と突刺して蛸の木が育つだろう
そこで私は裸かの黒ん坊達を見るだろう
そこで私は黒ん坊の若い娘達と知合ひになるかもしれない
そして若しもその娘の顔形が不思議にも美しかったなら
その娘は若しかすると彼女のおぢいさんから
スペイン人の血を貰ったかもしれない
私達は綺麗な泉のほとりか，椰子の木の葉蔭で
金色の水々しいパパイアか，滴るマンゴーの甘露を吸って
暑い昼時を休み，まどろむかもしれない
そんな時，私達はお互の生れについて話し合ったり
或はお互の知識を交換したりするかもしれない
彼女はこんな風に話し出すかもしれない
『アヌ――それは全であり，本質であり，無限の天がその身であった
アヌ――全であり，本質である――は其の妻，悲哀の地球とねた
彼女は総てのものの母，御祖(みおや)なる海，ヤーを産んだ
アヌ――その神性は尽きない――は身隠れた
（地球は永遠の悲哀の底に沈んだ）
ヤーは自分の裏なる母性とねた
彼女はウツなる太陽――唯一の王である――と
水なる海，アダとを産んだ

アク――火は唯一の王なる太陽――ウツの子である
火――アクは□□（妻と）その妻としてタスムを娶り
ウツなる太陽と共に我々の祖先となった
けれども我々の祖先は遠い
ウツは自らを外界の女王と呼ぶ女とねた
彼女から白い雲と黒い雲と黒い雨とが生れた
ウツは自らを内界の女王と呼ぶ女とねた
彼女から虹と日光と赤い雲，赤い雨とが生れた
下々の神々が其々の使命を負はされた
シューチは南風を司り
アダッドは雷と暴風雨とを
そして総ての戦闘とを司る
シン――月は暗黒と夜とを治め
イスターは金星によって愛を護り
エンリルは地に居て精霊をみそなはし
かくして総てのものの本源は，そこから
寛大な守護と厳正な応酬とを約束される
それ〳〵の神の中にある筈である……』
それとも彼女はこんな風に説明するかもしれない
『はじめに最上永遠の神ザマナが居た
チャウイなる天空がその住所であった
神エンリも神アサリ〔ママ〕も共に彼の家来であった
神ザマナは水によって始めて人間を造り
地上に生れる総てのものをも造った
太古の時，低地は全く水で覆はれてゐた
神ザマナは□（イ）エマ山の頂に二人の若い人間を見た
それがサムスとその妹カラとであった
其の頃人間は未だ火を知らなかった
神ザマナはダムーヅに行って火を求めるように教へた
サムスが火を取りに行って留守の間に
カラは孕んで子供を産まうとしてゐた
子供は無事に生れて，無事に育ち
斯くして人間は殖えていった
神ザマナは人々によい事を教へようと思って地に降った
神ザマナはダムーヅの山に登って見下した

神の妻となすべき女を求める為である
バンザゴンの女達は髪を短かくしてゐる故に気に入らなかった
エルピの女達は皆体が弱々しい為に気に入らなかった
ビルヅンの若い女達は皆甲状腺腫だったので驚いて逃げた
神ザマナは最後にダムボックに来た，そこで
神ザマナは優しい娘クラと結婚した
神ザマナはリフランの園で農業と植樹とを教へ
収穫の貯蔵と其の他の事々とを教へた
神ザマナは更に一々のものにはそれ〳〵の名のあることを教へ
神ザマナは其の一々のものにそれ〳〵の名をも与へた
神ザマナは最後に道徳に就いて教へ，そして
唯一人の妻を持つことの正しい事をも人々に教へた
偖テ
不死霊――アニイは総ての善と総ての悪とに対して
多くも少なくもない守護と懲罰とを約束するだろう
唖者と聾者との霊はピンテンとなるであろう
狂者の霊はウォングオングとなるであろう
我々生きてゐる人間の霊魂――タコーは
善なるアニイに愛せられるように
悪なるアニイ――フターツに脅かされるだろう
善なるリムン――幽霊に優しく導かれると共に
復讐のリムン――幽霊を恐れねばならぬだろう
リファ――鬼火が我々の前にあるとき
又アニイが蛇の姿となって我々の前にあるとき
我々はそれら亡者のアニイを驚かしてはならないと共に
それらのアニイから我々自身を害せられない為に
我々はシナラウィタンの槍を持つことを忘れてはならない
我々は生きてゐる我々のタコーを愛すると共に
我々は死後に於て追放されたアニイとなって
山上に生活しなければならない事をも忘れてはならない……』
処で若しも私がこんな風に話すとしたら
『私達が産れ，私達が育った都会には
三層五層の鉄骨の建物が魔のように重り合ひ
蜘蛛の巣のような道路には蜘蛛の巣のような電線が走り
其の中を電車と自動車とが轟々と鳴きながら

精励な蟻達のように駆けめぐり，ぶつかり合ってゐる
人々の或るものは二間もある望遠鏡から天空をのぞき
夜の星々の一々の運行と距離と又大きさとを観測し
（そこでは誰一人，白い鳩が二ヶ月かかってオラの木の実を
月の世界から持って来たと信ずるものはない）
焼けてゐる太陽の中に無数の黒点が増減するのを見張ってゐる
人々の或る者は起きてさへゐる間顕微鏡をのぞく事によって
我々人間と他のあらゆる動物とは只一輪の菫の花と同じように
無数の細胞から出来て居ることを発見した
人々の或る者は飛行機に乗って鳥のように空に翔り
人々の或る者は潜航艇を操って魚のように海の底を行く
哲学者は実在論と観念論と機械観と目的観とを弄び
芸術家は主観と客観と，理論と感情との間を模索する
そこでは又所有法律の条項が厳然としてゐるから
どんなに神を恐れない者も，亦何んな心をも持たない者も
決して悪を働く事は出来ない筈になってゐる
だが又そこでは一人の父が亡くなった時には
彼のアニイは（多分恐ろしくもないが，多分別段の何でもないらしい）
何うにでも成るように成って貰ふより仕方がないことになってゐる
偖て
私達の居た東京には銀座と云ふ所があって
私達の誰でもが何時でもそこへ行く事が出来
そこには沢山なカフェーとバーとがあって
冬のさ中にも暖かい暖爐の側の卓子には
香高いカーネイションかスヰートピーの花が盛られ
そこには泉のように絶えない酒蔵があって
沢山の着飾った女達が私達の為に
色々の匂ひの酒を望みのままに運んでくれる
そして若しも私達がそれを望むならば
そして其の報酬として銀貨の一枚を彼女の手の上に置くならば
彼女は譬へ彼女の為には何んなに悲しい時でさへ
彼女は私達の為に，にこやかに華やかな笑顔を笑ふであろう……』
そして若しも私がこんな風にしか話すことが出来ないとしたら
私は何んなに悲しい耻づかしい思ひをするかもしれない
そしたら私は彼女に私の悲しい過去を笑って貰って

も一度彼女の話を始めから話し直してもらはう
そして私も今迄身に積もった着物を一枚ぬぎ
そして又一枚と云ふ風にぬぎ捨てることにしよう
そしたら南国の太陽は私の蒼ざめた皮膚に
彼の愛子の表識として，あの金銅色の別の着物を
一枚又一枚といふ風に充分迄恵んでくれるだろう
そして其の下に私の血を熱く沸らしてくれるだろう
そこで私は私の父のアニイが又私の父の父のアニイが
今尚何処に何んな風に生活してゐるかを
又私自身のアニイが何んなに確かに私の中に居り
そして私の死後に於ける其の姿をも確に知るかもしれない
そして多分それよりもまだ〳〵幸なことに
青い海の只中に浮んで居るそんな小さな島は
そしてそこの空気とそこの太陽とは
そこの暮しとそこの娘達とは
只に只に私の気に入ってしまふかも知れない
そしたら私が生れ，私が育った東京よ
繁華な都会よ，雑踏の巷よ
そこに親しんだ友達と骨肉とよ
(私は兎も角もお前から受取ったものに対しては
それだけの恩顧と感謝とをも忘れはしない)
益々復〔複〕雑に益々華やかにお前らしく育つがいい
お別れの時が来たようだ[158)]

夕方から雲が出，夜遅クナッテ雨。

十六日
曇，晴。

✓梅の花をいけてみたりけり二階住み

十七日
晴，曇，相半，夕方雲〔曇〕，時雨あり。

十八日
晴。昌道，道隆発熱，就床。

十九日　日曜日
百合子も発熱，就床。梅子叔母様も発熱。赤ン坊には看護婦をつけて二階に隔離。

二十日
明方四時頃，傍の綾子に起こされる。綾子も発熱，直ちに病室に移す。東京から看護婦一人来る。

二十一日
梅子叔母様ハ，午後床を上げてしまはれ，夕方，東京から今一人看護婦が来る。

二十二日
晴。すっかり春めく。午後，銀行，郵便局へ行き，学校に行って，丸茂先生に面会，昌道ノ願書を依頼，帰り秋庭サンによって来る。
道隆容態悪し，熱九度七分に昇る。他の三人ハだん〳〵よし，

二十三日
生温い風が吹きあれる。長谷まで道隆の為に梨を買ひに出たが，街は埃で大変だ。

二十四日
今日も風がひどい。花時前らしいが，昨日の風から思ふと大分冷たい。

二十五日
冷たい風が吹きあれる。

二十六日　日曜日
晴。

二十七日
晴，暖かい。昌道床を上げる。

二十八日
晴，静かで暖かい。

二十九日

晴。百合子，綾子も，もう起きていいようになった。道隆も今日は急に熱が降って機嫌がいい。

三月

一日

晴，曇。夕方から小雨。

午後，扇州園までぶら〳〵歩いて花を見てくる。

二日

春雨。午後，嶌村サンに行ってくる。

三日

晴。多少風立つ。夕方叔父様帰〔ママ〕らる。晩，安藤氏来る。

四日　日曜日

午前中は，輝かしいような日だったので，久々に庭の芝生の草など取って居たが，午後はすっかり曇ってしまふ。三時頃，金子九平次君が尋ねてくれる。永い間病人のおつきあひで家の中にばかり居たが，金子君が来たので，一緒にぶら〳〵水道路から海岸に出，大仏の方までぶら〳〵歩いて来る。六時五十八分の汽車で金子君ハ東京に帰る。

五日

早朝より降雪。終日降り積む。朝，昌生叔父様艦に帰られる。昨日で下の看護婦二人とも帰る。

六日

晴。ひどく寒い。先達中ハ非常に暖かく，毎日七八度もあったのが，今暁ハ忽ち零下五度ニまで降る。

七日

晴。久宮祐子内親王殿下，今暁三時過ぎ薨去。

八日

晴。

九日

どんよりと終日曇。

十六日

晴。十日雨降りしも，夕方出京。十一日雨，後止む。朝九時半の特急で環〔島村〕サンが英国に立つので，送りにゆく。帰り雨風の中を千代子叔母様と銀座を歩く。十二日，晴，朝，奥沢[159]に金子九平次君を訪ねたが留守だったので，上野に出，大原孫三郎氏のコレクションを見る。十三日，晴，昼前，小石川へ行きしも，伯母様お出かけがけにて，玄関前にて一寸お逢ひせしのみ，上野の博物館にゆく。それから神田の三越に，たのまれ物など買ひに行ったが，曇って来たので，急ぎ目に帰りかけたが，丁度電車の中で雷鳴降雹にあふ。中野についたら止んで居た。十四日，晴。朝，金子氏を尋ねしも留守故，上野に出，松方幸次郎氏のコレクションを見，神田に出，田辺サンに寄って来る。十五日，晴。夕方築地に行き，与志チャンに会ってくる。

今日午後二時二十分の汽車で鎌倉に帰って来る。早速，昌道の試験勉強につかまる。夜，昌生叔父様お帰りになる。

〔欄外に記す〕
［英子の処に宿泊中，一夜泥棒入る。

春立チテ先ヅ泥棒ニ見舞ハレシ］

十七日

晴，昌生叔父様，朝艦に行かれしも，晩帰られる。

十八日　日曜日

晴，大変暖い。

十九日

晴，大変暖かい。

二十日

晴れて暖かいが，風がひどい。夕方，梅園の秀サンがひょっこりたづねて来る。

二十一日

晴れ。暖かい。風が吹いて風が吹いて，埃で埃で目も何もあいて居られない。朝十時の汽車で，昌道を目白の学習院につれてゆく。馬場サンに会って，帰り外苑をまはって明治神宮にゆき，四谷にまはり，九段に出て招魂社に詣り，新宿に出，駅の上で夕食，中沢サンにゆき，宿る。

二十二日

六時に起き，昌道を学習院に試験を受けさせにゆく。午後三時までかかる。中野に一辺かへり，夕方六時二十分の汽車で鎌倉に帰る。

晴れては居たが，風が冷たくてひどく寒い。

二十三日

晴，風〔嵐カ〕めきて寒シ。

二十四日

□□□晴，風稍強シ

二十五日　日曜日

午前中晴，無事。午後風烈しく，空暗くなり四時頃小雨ありしもぢき止み，夜に入りても烈風止まず。

二十六日

昨日からの風止まず。朝から真っ暗。そのうちに雨になり，午後まで降りつづく。夕方雨も止み，風も止む。

昌道入学許可。

二十七日

終日曇り。寒い。午後小雨。

二十八日

晴。夜に入りて雨。暫らくして止む。

二十九日

晴。午後，子供達をつれて扇州園に花を見に行く。序に一寸，荒木サンの所にお寄りする。

三十日

曇，小雨。午後，東京に出る。

三十一日

曇。昼頃から，雨降ったり止んだり。

朝，目白の学習院に行き，寮務課に行き，昌道の入寮に就いて聞き合はせ，四谷にまはり波多野サンに行き，昌道の保証人代理になって貰ふ。波多野サンから電話で甘露寺〔方房〕の都合を聞いたら，直ぐ来いと云ふので，龍岡町[160]まで訪ねてゆく。一時して甘露寺と一緒に邦楽座に活動写真を見にゆく。七時半頃出，銀座で食事，甘露寺と別れて帰る。
発信　甘露寺方房
□□□□□□□□。

四月

一日　日曜日

曇，晴。午後四時何分の汽車で鎌倉に帰ってくる。一緒に久顕も来る。

二日

曇，後晴。梅子叔母様，昌道をつれて出京。十一時半の汽車で久顕と横須賀に出，自動車で引橋[161]までゆき，歩いて油壺[162]を見にゆく。それから三崎に出，自動車で逗子に出，更に自動車で，燈のともる頃金沢[163]に入る。荒居屋に宿る。↘

発信，甘露寺方房。

三日

神武天皇祭。雨。十時前，どうにか止む。九覧亭[164]に登って八景を見。金沢文庫に行く。逆行して「ちよもと」で昼食。二時出発。朝比奈峠[165]を越えて鎌倉に帰る。朝比奈峠の頂上頃より又々雨となる。

〔欄外に記す〕
［金沢ノ旅[166]］

↘二日の午前十一時と云ふに，久顕と二人して家を出でけり。一泊小旅の予定なり。此の旅，久方ぶりにて少しは珍らしかりけり。横須賀に出でければ，既に昼時なりければ，地図一つ求めて食事なと取らむと町を行けり。おもはしき地図なくて，稍暫し町を歩きて，少しく大業なれど神奈川県の地図一枚買ひ，扨て簡単に食事せんと思へど様子を知らねば，あちこち料亭の看板に文句を云ひ〳〵過ぎけれど，斯くても果てねば，やがて綺麗にもあらぬそばやに入りて，薄暗き一隅に腰を下し，親子丼のあまりうまからぬを一つづつ平らげぬ。丁度，食ひ終りし頃なりけり。一人の娘，黒き事務衣を著けたるが——何処ぞの下級女事務員になむ——のれんより顔半ば見せて，慣れたる振りにて「かけ一つ，したまでねがひます，したですょ」と云ひすてて行きけり。

そばやを出でしが，乗合自動車の音のみ気はいして姿の見えねば，誰ぞに尋ねんと思ひしに，ふと見れば傍に立話せる娘の一人は，先のしたなりけり。半ばがた帽をとるまねして尋ねければ，したはなかなかに親切ある振りにて，「角に眼鏡屋ありて，市内乗

合の監督居る筈なれば解るべし」と云ふ。其処にて聞けば，此の監督は又不親切ものにて，確とは物云はず。只此処に待つべしとおしへられぬ。待つほどに，幾台となく乗合ひは来れども，三崎行と云ふは一つもなければ，待ちあぐみて自動車道を駅まで戻る心組みにてぽつ〳〵戻りぬ。幸ひ半ば程も戻りし頃，三崎行の車来りければ呼びとめしに，丁度二人だけ乗る席ありて，わけもなく走り出でぬ。此の道ハ，以前二三度菊名まで行きしことあれば，安心して外の景色など思ひ出しつゝ行きぬ。少しは尻の痛くなる頃，引橋と云ふに着きければ，油壺には何処にて降りなばと問ふに，此処ぞと教へられて，忽々自動車を降りぬ。朝のうち昃り勝ちなりし空も漸く晴れて，今は雲も無ければ，晴ればれして道を行きけるに，早くもそれらしき入江，右手に見えしが，行き合ふ人もなければ，それと確かむべくもなきうちに，早や入江も半ば程に来ければ，漸く不安を覚えけり。入江の望めは，丁度思はせぶりに見えて，見尽しかねければ，背のびして今少し見えなば心安けむと思へど，何の甲斐もなきままに漸くじれったくぞなりける。遂に忍びかねて，とある道添ひに下りけり。

子等の遊びを止めて珍づらしげに見る中を，小さき漁師村を過ぎて浜に出でければ，浜には一面に鰯を箕に並べて乾し，海は青く静かにて，大方の舟は岸につながれ，大きやかなるが二つ三つ中程に浮かみたり。入江は形おもしろく，向岸の岩も油壺のにほひ程には見ゆれども，あまりに名勝らしからず。漸〔暫〕らく眺めしに，漁夫のありて「何ぞ見に来しや」と問はれ，油壺をば見んにと答ふれば，これは又親切にくど〳〵と今一つ先の入江にこそと教へられ，油壺のにほひも消えて，元来し道にかへりけり。

やがて臨海実験所[167]の門を入りて，こたびは本物の油壺にこそ着きけれ。景は稍すぐれたれど，松の枝間よりすかし〳〵見る油壺は少しばかり物足らず，先のにほひのさほどにも増さぬを物足らなく思ひながら，海辺へと降りぬ。水清く静かなれど一望し得ず，城ヶ嶋[168]への舟も夏ならでは通はぬそうにて残念なれど，引返しけり。上より見直して舟にてゆかれぬを再び三度残念がれど，詮もなければ反対に悪口云ひ云ひ戻りけり。

舟なくてにほひばかりや油壺

それよりも，畑中の高き道より左右に，遠近の海を見わけて行きしうちは勝りけり

七三に海を見わけて三崎道
両の手の海それぞれや三崎道 ↘

四日

晴，八幡様の国宝館が出来上った由，新聞に見えて居たので，お昼前，久顕と子供達

をつれて見にゆく。

↘やがて三崎の町に入りけり。されど変りしようもなくて，岬のはなまで出でけり。新らしやかなる三崎の港にも，多少の情趣はなきにあらねど，城ヶ島はあまりに近々として面白からず。つく〳〵眺めても一向面白からず。裏の小高きに登りて今一度眺めしが，二分どころ見直して満足もせねど降り来ぬ。先程より喉のいたくかわきて，渋茶にてもぐっと飲み度き処なれど，そんな所もなければ，とあるカフェーに入りてビール一本に渇をいやし。逗子行きの自動車を問はせけるに，直ちに出づるそうなれば，切符を求めて乗り合ひぬ。逗子迄はなか〳〵の道のりなれど，先きよりは道もよければ安々と乗りて，五時半過ぎて着きにけり。六時の乗合自動車にて更に金沢に向ひ，こたびは道もわろく，自動車も更に粗末なりしも，間もなく燈ともる頃金沢の町に入りぬ。さる程に，運転手のどちらまでと問ふに，金沢迄と答ふれば，金沢は此処なれど，金沢の何処へ行かるると問はれければ，知らずと答ふるもおかしく。宿屋のある所にておろせと云へば，合客の一人なるが土地に明るき人になむありて，宿の第一は「ちよもと」「あづまや」，次にはなにそれと教へしかば，さらば少しく町を歩かんとて車を降りぬ。行く程に「ちよもと」を過ぎ，「あづまや」をも過ぎ，海にうかぶ燈の点々とありければ，今少し今少しと行きしに，宿らしきものもなし。引かへして若衆に逢ひければ，海中につき出でしあたりに燈しげきを指して，あそこらに宿ありやと問へば，あそこらは料亭旅宿なりと答へければ，同じことなら場所のよき所に宿らむとて行きぬ。

〔欄外に記す〕
［金沢ハ何処ニ宿ラン春ノ暮］

又「あづまや」を越し，「ちよもと」を過ぎて，そこに行きて問ふに，此のあたりは別荘のみにて宿はなきそうにて，先き来し道の「あらゐや」と云ふをおしへられければ，勝手も知れず，兎も角そこに宿る心組みして訪ねけり。「あらゐや」と云ふは，間口の半ばを腰かけの食堂風にしつらへし大きからぬ宿なりけり。兎も角も上りければ，外には客もなきようにて，奥の八畳の間に通されぬ。只一人の女中と云へるが，おなかさんとて，崎玉産のちんころの如き女なりけり。言葉も賤しく行儀もなけれど，一角のもてなしのつもりにて，先づ〳〵と風呂に案内せる。醤油にて煮しめし如き手拭をくれしに驚きあきれしも，労れし身にゆっくりと湯槽につかりけるに，明るからぬ電燈のあやしくまだたきて，つと消えしまま真暗の闇となりしを，暫しは音沙汰もなかりけれど，やがておなかさんの来て提灯一つさげて来り，冗談一つ二つ言ひながら，そこにつるしてくれけり。

✓金沢ノ宿ノ湯ハ提灯デハイリケリ↘

五日

晴，十時五十分の汽車で久顕と茅ヶ崎にお墓詣りにゆく。

↘風呂より上りて宿の貸著にくつろぎしも，これはまた旅宿に似合ひてお粗末なるしろもの，色褪せはてし木綿のあやしげなるなり。おなかさんの来て，御酒はと云へば，ビールをとたのめば，お肴はと云ふ。お肴は何々の出来るぞと云へば，蛸の酢のものと刺身の新らしきがありと答へければ，それをとたのむ。電燈はなかなかに灯らず，八畳の間に提灯一つの薄闇に立派ならぬチャブ台を囲みけり。ビールには，あられせんべいのつきけるが，おなかさんは一緒になりて，此のあられせんべいをぱりぱり噛みて侍るに，ちと辟易の思なりけり。蛸の酢のものと刺身とは，自慢程にはなきまでも，兎も角此処の秀逸なりけり。

ビール四本程飲みける頃，電燈の灯りてやうやく物の味をかみしめけり。床には桃の花を活けけるが，軸のなきは，少しおさまり悪きふうなり。

〔欄外に記す〕
［軸ハナクテ桃ヲ活ケタリ宿ノ床］

此の間（マ）の唐紙，襖は浪模様にて，チャブ台は電燈のもとに再び見さげししろものなりけり。やがて御飯をとうながしけるに，お吸物はかきたまのあやしげなると香の物のみ出で来たり。こは粗末なる哉と顔見合はせけるが，腹は充分に肥えてけり。

〔欄外に記す〕
［波ノ間ニカキタマ茶漬ケオナカサン］

一休せる頃，おなかさんの床二つのべてくれけり。これも木綿のせんべい布団を道に二枚づゝ敷きて，同じく木綿のかいまきと夜具とをかけてけり。又々辟易の気味なり。されど今となりては，一流といふ「ちよもと」へ行かざりしを悔みても詮なければ，すご〳〵と其の夜具にもぐりけり。

夜半目覚めければ，雨の音しきりなり。明一日をここにくすぶるには堪へねば，傘など買はせても立たんなど思ふうちに再び寝つきぬ。

〔欄外に記す〕
［宿ニ夜半醒メテ聞ク雨　朝ハ止メ］

明くれば三日。八時近く目覚めしが，雨は止まずてありけり。窓の雨戸一枚くりて見れば，庭はなくて一間半程の所になまこ亜鉛の垣をめぐらし，藁屋の裏に山の上のみ春雨にけむりけり。□□□□□□□□□□□□□（洗面して帰ればおなかさん）〔欄外に記す〕［春雨ヤ久方ブリノ宿ノ朝］　久方ぶりの宿の朝にてはありける。小生先づ朝の憚りに行きて帰るに，久顕もつゞきて厠に立ちぬ。

やがてすぐに又，建具悪しき憚りの戸のギーッと音してければ，こは早き厠にこそと思ふに久顕は出で来ずて，女中部屋のあたりに一斉の笑声にまじりて，「知らずにひょっと開けたらさ……」と聞こえけり。さてはやられしよと思ふに，しばしにて久顕出で来てニタニタと笑ひ居れば，「知ってるよ」と云へば，「あけられた」とて，一部を語りければ，「ひどきものよ」と慰めてけり。洗面して帰るに，おなかさんの来て，お座敷はあちらに出来て居りますと案内しければ，間もなく行きけるに，こたびは明るき六畳の，床には兎も角掛物などあるに，久顕先に来て，せんべい布団に胡坐して居たるが，小生の至るよと思へば，直ちに床の側の開きをあけて見よと云へば，何事ぞと問ふに，それには答へずて，後の障子を引いて指さしける。縁に竿かけて女子のゆもじ，子供のパッチまで乾してありける。開きのうちには，桃色のゆもじのつるしあるそうなり。ここのチャブ台は昨夜のにまして古めかしく，一面に焦げ跡のぶつ〳〵ときたなかりけり。昨夜の波の間もさることながら，今朝のゆもじの間も相応なり。やがておなかさんのお茶を持て来たれば，梅干一つかみて朝の茶をすすり，朝飯も忽々にすましけり。

〔欄外に記す〕
［波ノ間ヲウツレバコハヤユモジノ間（マ）］

十時といふに雨も小止みに止みければ，早々立つべかりとこそ，愛想を求めしに，九円といふ。うち三円はビール代なり。されば御一人金三円也。さにこそ，蛸の酢の物と刺身の新らしきをのぞきなば，誠に気の毒なものなりけり。兎角して宿を出でけるに，おなかさんの八景見晴しに案内せんと云ふに従へば，すぐそこなる九覧亭といふに行きけり。↘

六日

晴，曇，今日は少しく寒し。午後，久顕散歩。長谷通を行き，長谷に行きしに，久顕行儀悪く，便を催したれば，何処ぞよき処をと思ひしが，なし。極楽寺へぬける切通しの半ば，成就院の前より石段の高く登りて上に墓場ありしかば，其処へ登りしが，上には畑地少しありて，女一人草取り居りければ，尚昇り，久顕，墓場奥の草むらの奥にて野糞し来る。それより成就院に行きしも，面白きものなし。極楽寺に行き，七里ヶ浜に出る。有嶋氏の別荘より折れて帰り来。帰り，成就院の側より上り，稲村ヶ崎の涯（崖）べりをとっつきまで行く。眺め相当よし。長谷道を戻りて夕方家に帰る。

〔欄外に記す〕
［成就院ノ墓場ヤ友ノ長野糞
友行儀悪シク野糞ヲキメシ成就院］

↘此処は寺の境内なれど，所謂名勝気分にて俗っぽきかぎりを見せたる藁葺屋あり。お

なかさんの「一つ説明して上げておくれよ」と声かけて，先に立つまゝ従ひて，木戸口の賽銭受けの如き木箱に一人前金三銭を投げて石段を昇りつめければ，八景一望と云ふ九覧亭なりけり。成る程，一望全景を見下して遺憾なけれど，昨夜点々と燈火を映ぜし海は，悉皆水干て泥田の如きぞ，惜しくもありけり。さあれ全景春雨にけぶりて，まだ人出もしげからずければ，しっとりと落着きし趣こそはありけれ。

〔欄外に記す〕
［三銭ニハチト過ギシ眺メヤ九覧亭
一望八景説明モ添ヘテ金三銭］

間もなく四十を越えしばばの，後より登り来にけり。これはお寺の坊主のおかみさんなるそうにて，いかつくも俗臭を越えて卑しきぞうたてかりける。先づ〳〵と茶屋より三脚の望遠鏡を持て出でければ，のぞき見たれど，墨色に霞める遠景の確とは見えぬ上に，眼界いたくせばまりて面白くなし。おなかさんの「おばさんたら，人があさりを取ってれば，すっかり此のめがねで見てしまふんだものよ」と云へば，「そうよ，おなかさんたら，あさり取るって，□□□□（おまんこ）まで潮にひたしてるだもの，夜になって痒ゆくなるといけねえと思って呼んでやったに」と，ばば，口へらず答ふるに，此のばばの亭主もさこそなまぐさ坊主ならめと思はれけり。やがて，絵葉書一組持ち出でて八景を説明しけるが，終れば直きに一組持って帰らなくては話の種にならないからお買ひよと押渡しけり。

絵葉書を売る程の徳や八勝景

小泉の夜雨，乙艫の帰帆，内川の暮雪，平潟の落雁，野島の夕照，州ノ崎の晴嵐，瀬戸の秋月，称名寺の晩鐘を八勝となん云ふなる。

昔巨勢ノ金岡が景をうつさんとて筆をとりしに，景に見とれて思はず筆を落ししといふ。巨勢の金岡筆捨の松といふがありけれど，今は枯れて木（ぼく）のみありとばばの云へば，金岡とは古し，金岡ならば間違ひもなからんとからかへば，さようです。金岡と云ふ方は日本の絵師の始めの方でと，ばばなか〳〵物知りなり。幾度か辟易してここに□□□（到りけ）□□（れば）至りければ，早々茶代を置きて一安堵せり。

春雨のかぎれる中や八勝地
八景を抱いてけぶるや春の雨
小泉の夜雨は宿で寝て聞いてけり（小泉夜雨）
近寄れば乙艫の帰帆つぎだらけ（乙艫帰帆）
平潟の落雁はしじみかせぎなり（平潟落雁）

しじみ取りゆもじのあかのそれぞれに
内川の暮雪はなくて春おぼろ（内川暮雪）
名勝の夕照の下や飛行場（野島夕照）
塩取り
□□□塩汲みや名勝となりて晴嵐（州ノ崎晴嵐）
名勝の必ず一つ秋の月（瀬戸秋月）
名勝の一つは見えぬ鐘の音（称名寺晩鐘）
鐘の音にかくれて見えぬ称名寺

九覧亭を下りて，おなかさんとも縁を切りけり。それより金沢文庫[169]にゆきぬ。やうやく名勝の一つに名をのみ止むる迄にいたく衰へにたれど，流石に由緒深き所なれば，何処とはなくおちつきさびて親しかりけり。雨こそ止みたれ，いまだ雲も薄らがねば，今日の祭日にも道に人出もなく，静かなるままに思ひも深く，此処にして金沢まで入りし甲斐はありけり。寺中只二人の紳士に逢へりけり。一人はお堂の裏にまっすぐいりて，向ふ向きて放尿せしが，其のまま飄然と立去りけり。

〔欄外に記す抹消〕イバリ
［旅人ニ尿モユルス称名寺[170]］
〔欄外に記す〕
［旅人ニ尿モサルル称名寺］

今一人は其の道の好事と見えて，鐘楼に入り，銅鐘の四面に丁寧に薄紙をめぐらし，濡手拭ひにて楽しげにおさへつけて搨本をとるに，側目にも，一人悦に入る道はありけりと奥床かしく見えけり。それより，寺の裏山のはげ山なるを此の上はよからん，登りも手頃なればとよぢのぼりけるに，山肌急にして見かけよりはきびしかりけり。頂は広きにあらねど，遮るものもなくて，四囲一望にあり。八景を横より眺め，横浜街道を裏手にうね〳〵と見下して，九覧亭よりは，なか〳〵に劣らざりけり。山を下りて渇きしままに，とある店先にてラムネ一本づつ飲みて元来し道を戻りけり。昨夜より「あらぬ屋」に物足らざりしより，思ひは兎角「ちよもと」に傾きければ，昼食など此処に落着かんと「ちよもと」に行きけり。此処のばばのいたく太りて昔々せるが，物ごし〔仰〕業々しくて，総べて芝居がかりなるを，如何にも旅宿らしくておもしろく思ひけり。

〔欄外に記す〕
［宿ノババノ芝居モドキヤ瀬戸ノ雨］

此のあたり毎日風のはげしくて吹きつくるを，今日は天気も悪く客足もなければ，雨戸もくらずてありけるを開けさせて，海近く見晴し広々しき一室に招じぬ。六畳の小じんまりせる室にして，床には花は無けれど，乾漆のめづらしき花鉢をすゑ，塗物のまがひにはあれど，紫檀色のどっしりとせし卓を置き，簾屏風など備へたり。ばばの〔仰〕業々し

く芝居がかりの挨拶の末，上手に誂へ物をとりて立ち去れば，おなかさんとはちがひて，小綺麗なる姐さんのお茶を入れてお菓子をすすめけるが，あらゐ屋の後なればにや，兎角に行きとどきて思はれけり。少しばかりビールを飲みて御飯を終りける間に，潮足早く上げきて，遠くあさりをとりし女子等の影も見えずなりて，一面の海となりければ，ようやく腹もふくれし思ひなりけり。↘

七日

晴。午後，久顕と天園に行き，帰り頼朝，大江広元，嶌津忠久等の墓所をまはりて帰る。山本氏が来られ，昌生叔父様も夕方帰って来られる。八幡様はじめ所々の桜見頃なり。

↘暫らく休みて心より落ちつきて，大儀にさへなりけるを，かくてもあられねばやがて立出でてけり。先程山登りしていたく靴のよごれけるを，少しの間にぴか〳〵と磨き立ててあるにぞ，立ぎわまで気持よく思はれける。六浦までぶら〳〵引戻りて鎌倉道にかかりしが，道標のある毎に鎌倉に至るとありて，其の下に朝比奈の峠ありとことわりければ，さこそ難所ならめと思ひつゝ行きけるに，暫しして，やうやうつまさき上りに登り道とはなれり。此のあたりより人家もなくなりて，峠と云ふはさまで高きにはなかりけれど，岩坂の急にして行人も絶えてなかりければ，昔ならば山賊なも出でむ所よなど大声に無駄にききつゝ閑々（のどのど）に登りつめ，頂上に来ければ後見返りて，旅も終りの如く思ひけり。

〔欄外に記す〕
［昔ナラバ賊ナモ出デムト徒口（ムダグチ）ニキキツツ越ユル朝比奈ノ峠ヲ。］
〔欄外に記す〕
［朝比奈ノ峠ハアリケリ雨アガリノ峠岩道ユルユル登ル。］

此処に〔記〕紀念のいばりして，こたびは安々と下りけるが，其処の穴をのぞき，此処の井戸に寄りなどせるに，又々雨降り出でしが，いたくも降らず，春雨のけぶるばかりなれば，趣と云へば趣なりけり。峠を下りし処，道標には鎌倉駅へ二十六町とありけるが，此の道思ひの外にながかりけり。昨日より時々偏平足の痛みを訴へける久顕の，今は堪えがたしと云へど休むべき所もなきまま，痛し痛しと云ひこぼちつゝ，いよ〳〵鎌倉に入りにけり。

〔欄外に記す〕
［モウ歩ケヌト弟弱シ春ノ雨］
〔欄外に記す〕
［春雨ノ朝比奈峠二人越エケル　昔ナラバ賊ナモ出デムアヤシキ峠ヲ］

翌日何心なく新聞を見けるに，昨夕朝比奈峠に三人組のおひはぎ現れて，峠越えの兄妹三人を襲へる由見えけり，我等いかつき男の二人なりければ，彼の山賊も見て見ずて過

ごししならめと，さにこそ朝比奈の峠なりけり，あやしかりし旅にしありけり。

八日　日曜日

晴。

✓腹ふくれて春うららかのしみわたる

九日

花曇り。午後，久顕東京に帰る。駅まで久顕を送り，それより散歩がてら寿福寺，英勝寺を通って海蔵寺まで行き。引かへして佐助谷の方へぬけるトンネルまで行ってくる。

受信，三沢寛。

十日

終日雨。昌道，明日出京。明後日入寮するので，荷造りやら何やら。

十五日

十一日の昼，昌道をつれて出京。今日帰ってくる。

✓十一日の日には，昌道をつれて学習院の寄宿舎に入寮に就いての話を聞きにゆき，夕方中野にゆく。翌朝八時，昌道を入寮させ，入学式，〔始〕試業式をすませ，午後三時まで寮についてゐて帰る。

十三日はぶら〳〵してしまふ。午後三時過ぎ，神田に出て本屋を見。夕方，田中銀之助[171]氏を訪ねて，南洋行をたのんでくる。帰り三沢を訪ねる。

十四日　朝，金子九平次君を訪ね。午後上野に出て中展と仏展を見る。

今日は日曜なので，十時頃から久顕と博物館に御物上代染織の特別陳列を見に行き，久顕とわかれて二時四十分の汽車で鎌倉に帰ってくる。

十六日

曇。

十七日

晴。昨日今日ひよ〳〵としみったれて寒い。

十八日

晴。大変な風。

十九日
晴。終日大変な風。

二十日
終日雨。

二十三日
二十一日，曇って居たが，英子と約束して居たので，朝九時の汽車で東京に出る。梅子叔母様も昌道の事で石丸さんに行かれるので，一緒の汽車でゆく。
二十二日は雨で寒かったが，小石川へ行ってくる。今日は朝，一寸四谷の与志チャンの処をたづねたが，留守だったので，十二時四十五分の汽車で鎌倉に帰って来る。曇り。

二十四日
晴れたが，風が烈しくて冬のように寒い。

二十五日
晴。風冷たく烈し。
受信　上原寿造氏。

二十六日
晴。暖くはなったが，風はやまない。昼前，叔母様は昌道をつれて石丸さんに出られ，百合子は遠足で夕方帰って来たので，昼間は大変静かだった。午後，湯地の処を尋ねたが，留守。
発信　上原寿造氏

二十七日
晴。風も止んで暖かい。叔父様の用で一寸東京に出，安田銀行まで行ってくる。

二十八日
晴。おだやか。午後，叔父様帰って来られる。

✓玉梓ノ老翁（ヲヂ）ガ文見レバ悲シキロカモ　北国ノ盛岡ノ里ハ卯月吹雪（フブ）ケモ
✓吾ガ庭ノ奥手八重桜散リノ繁シモ　北国ノ盛岡ノ野ベモ春サレモコソ

八幡前

✓宮ヲ迄葉桜並木二並ニ並ミヲ　斯ガ下ヲ紅躑躅モ並ミヲ宮ヲヲ迄モ

✓鎌倉ニ人ヲヲ離ケテ月長ク有リ来シ　亡キ人ヲ偲ビツツ来シ人ユ隔レテ

✓春サレド木ニダニ□□及カズ妹モ背モアレド　隔レ居テ恋フニアラズバ無キニ及カズケリ

二十九日　日曜日　天長節

晴。

午前中，綾子をつれて，秋庭サンに，今日皆サンで夕御飯に来て頂くようにお招ぎに行く。

夕方皆サンで来られ，十時頃帰られる。

✓子ノ鯉ガ浮イテ参居リ静ニ見座セ，音モ為バ蓋シクヤ逃ゲム静カニハ見座セ

三十日

晴。夕方から風立ち，夜に入って烈し。

✓日ヲ続ギテ風立ツカラニ庭ノ一八　イチ早ク散ラマクヲ惜ミ□□□□□□君待チガテヌ

五月

一日

✓大凧ノ吟リ勤シモ朝床ユ其ヲ聞ク五月ノ朝凧上グラシモ　朝床ニ其ヲ聞ク

曇晴。漸ク雲厚く。夜に入りて雨。

✓大凧ノ吟リ勤シモヨ朝床ヨ聞ケバ五月ノ朝凧上グラシモ　床ヨソヲ聞ク

二日

雨降りてたちまち寒し。夕方雨はつかに止む。

三日

晴。夕方ヨリ雨。朝，所要〔ママ〕で東京に出，十五銀行〔行脱カ〕き。上野にまはって国展を見る。金子九平次君に合〔ママ〕って，昼食を御馳走になり，一緒に春陽会も一寸見て，別れて帰る。上野の駅の処で山口の宇多チャンに逢ふ。ひどく曇って今にも降りそうなので，早々銀座に出て買物をし，三時四十分の汽車で鎌倉に帰って来る。家についたら雨になる。

四日

晴。

五日

晴。午後，昌生叔父様お帰りになる。お節句なので，晩御飯に川上の叔父様をお招ぎする。午後，昌道も帰って来る。

発信。山口宇多子。中井良三郎。

✓鯉幟（ノボリ）立て雛（ヒナ）人形ヲシ飾リ五月五日（サツキイツカ）ヲ，親御等（オヤゴラ）ガ幸（サチ）ハヘト祝フ児等（コラ）ハ幸（サキ）クアレ

六日　日曜日

晴。叔父様ハ演習ニ出ラレルノデ，午前中ニオ帰リニナル。夕方，何年振リデ池田ノオ津代叔母様ガ須磨カラ出テ来ラレ，今夜ハ此処ニオ宿リニナル。

✓春来（サ）レバ樹々（キギ）ノ稚枝（ミヅエ）ハ宜（ウベ）モ宜（ヨロ）シ　雨降リテシミミニ濡（ヌ）レバ況（マ）シテ善（ヨ）ラシナ

七日

晴，後曇，午後，湯地を訪ねる。

受信。江波知彰，尾上義雄

八日

曇。午後より小雨。夜に入って大雨。

叔母様，道隆をつれて出京。夜遅く帰られる。

発信。金子九平次氏。江波知彰。

（江波よりの便に，女の子産れたる由）

✓浅緑青葉ウララケキ野ニ艶（ニホ）フ　フサフサ藤ノ花ノ如キ児ヤ

九日

朝ノウチマデ雨少シ降リシモ止ミテ，曇。

十一日

曇。時々小雨。夜ニ入ッテ雨。

発信，三沢寛。

十二日

雨。午後，昌道帰〔ママ〕って来ル。

日暮前霽レテ，秋ノヨウナ澄ンダ空ニ白イ雲ガ飛ンデ若葉ガ美イ

夕方，昌生叔父様帰ッテ来ラレル。

発信，倉沢量世。

✓稚(ワカ)葉陰シホホニ沾(ヌ)レテ雨ノ中ユ呼ビカヒモ居ル雀ガ羨(トモ)シ

十三日　日曜日

曇，小雨。午後，英子が忠久，忠直ヲツレテ来ル。夕方晴レル。

十四日

晴，日中曇リ，夕方晴。稍風烈シクナル。

十五日

晴，曇相半。めっきり暑くなって，初夏のにほひがする。

受信　倉沢量世。中井良三郎。

✓小夜更(サヨクダ)チ大夜更(オホヨクダ)チテ寝ラエヌ故(カラ)ニ，鬱悒(イブセ)クモ聞キ過ギニニシ春ノ過雨(ムラサメ)

✓大夜過ギテ此ノ山寺ニ痛(イタ)モ痛(イタ)クニ　聞キツルヨ来ニテ過ギニシ春ノ過雨(ムラサメ)

十六日

晴，雲多ク時々曇。此ノ四五日，梅雨時ノヨウニ鬱陶シイ。

十七日

晴，曇。雲厚ク気重シ，夕方小雨。

✓懐(フトコロ)デナクテ我ガ床(トコ)ニ入リニケレバモ，二十〔日脱カ〕鼠捕ヘハセレド生カシテ飼フモ

十八日

曇，晴。鬱陶シ。

久顕君。

✓音モ沙汰モ此頃ナキハ蓋シクハ春ヲウララトダレニケムカモ。

十九日

晴。今日ハ大掃除ナリシカバ二階ヲ片ツケシガ，昌道ノ行李ノ底ヨリ二十日鼠ノ子二匹〔ママ〕を得タリ，夕方，金網ヲ買ヒ来リテ籠ヲ造リテ入レシガ，余リニ小サキ鼠ノ遂ヒニ一□尾□匹ハ網ノ目ヨリ逃ゲ去レリ。残ル一匹ハ，更ニ網ヲ二枚ニアハセテ□鉢植木鉢ノ上下ヲ塞ギテ入レシガ，僅カノ間ニ，今度ハ百合子ガ不注意ニ開ケテ，是レモ逃ガシテシマヒシフウナリ。一昨日ノ一匹ハ，綾子ガ入物ヲイヂリテ，是レモ逃ガシオホセタリ。

夕方，昌生叔父様〔ママ〕お帰リニナリシガ，夕食ヲスマセテ少シ休ミケルニ，突然，久顕来タリ，九時過ギテ昌道モ帰リ来タリ。

✓三匹ノ二〔日脱〕十鼠ハ今ハノガレテオノガジジ元（モト）ノ隅処（クマド）ヲ弥広（イヤヒロ）トスラム

二十日　日曜日

晴，風稍烈シ。

二十一日

晴。

二十二日

晴，午前中，川上ノ叔父様ガ来ラレル。午後，荒木サンノアバサンガ見エル。

二十三日

晴，後曇リ。夜ニ入リテ白雨。

二十四日

ショボショボ雨。

発信，尾上義雄。

受信，金子九平次。

二十五日

晴。

発信，金子九平次，

二十六日

晴，時々曇ル。師範デ海軍ノ軍楽隊ガ来ルト云フノデ，綾子ヲツレテ行ク。久留嶌氏ノオ話ガアッテ，四時頃マデ音楽ガアル。晩，秋庭サンガ千代チャンヲツレテ来ラレル。叔父様，昌道帰ル。

二十七日　日曜日

今日ハ海軍記念日ナノデ，叔父様ハ昌道ヲツレテ一番デ横須賀ニ行カレル。後，百合子と綾子〔ママ〕ノオ供デ九時四分ノ汽車デ横須賀ニ行キ，海兵団ノ運動会ニ行ク。会場デ叔父様ト一緒ニナリ，二時頃，水交社デオ弁当ヲ食ベテ帰ル。

二十八日

晴。夕食後，百合子，綾子ヲツレテ散歩。

二十九日

晴。夕食後，八幡様ノ方ヲ散歩。

✓古杉ノ杜ヲ茂ミト夏鳥ノ枝間漏(ク)キ鳴ク聞ク夕べカモ

三十日

曇，後晴。

三十一日

晴，霞ンデボンヤリシテ居テ蒸シ〳〵暑イ，夕方，散歩。

✓夏五月寺ノ青葉ノ鳴ル夜哉

六月

一日

晴，後曇。夜ニ入リテ小雨。

二日

雨。昌道ノ方の父兄懇話会だったので，十時三十八分ノ汽車で東京に出る。目白ノ学習院にゆき，会後，六時頃，鎌倉に帰って来る。昌道も帰って来てゐる。叔父様も晩になって帰って来られる。

三日

晴，後曇。夜ニ入ッテ雨。日曜日。

四日

曇，時々晴レ。

五日

晴レテハ居タガ雲ガ多クテ重苦シイ，茅ヶ崎ニオ墓詣リニ行キ，オ末様ノ所ニヨッテ来ル。

六日

曇，後晴，午後，倉沢ガ訪ネテクレル，一緒ニ小坪ノ方ヲ一マハリマハッテ帰リ，一緒ニ夕食ヲ食ベテ，九時ノ汽車デ倉沢ハ帰ル。

小坪ノ漁夫村ハ，イツ行ッテモイイ，帰リ光明寺[172]ノ裏ノ紀州サンノ墓地？ノ後ノ横穴ヲノゾイテ見タラ，面白イ薄彫リガアッタ，等身大以上ノ大キサデ，何カ水神カ何カノツモリダロウ，舟形ノ上ニ女神ガ片手ヲ頬ニシテ座ッテ居ルモノデ，極メテ簡単ナ道具デ彫ンダラシク，素人ラシイ面白イモノダッタガ，ソノ下手ニハ，是レモ大キナ徳利形ガ無様ニ彫ンデアッテ，中ニ「六十六翁喜楽坊安心造之」ト書イテ有ル，上手ニハ「南無〇仏〇死出ノ山路ノ花明リ」ト書イテアル，何時頃ノドンナ人ガ彫ンダモノカワカラナイガ，兎モ角喜楽坊安心者ラシイ出来ダ，

七日

晴，夕食後，百合子，綾子ヲツレテ松葉谷ノ法国論寺ノ方ヲ散歩シテ来ル。

発信，兄上。

八日

晴。

九日

晴。朝ノウチドンヨリ曇ッテ居タガ，午後ニナッテ晴レル，午後，昌道帰ル，晩ニナ

ッテ叔父様モ帰ッテ来ラレル。

十日　日曜日

晴。午後，子供達三人ノオトモデ，片瀬ノ竜口園[173]ニ遊ビニ行ク。

十三日

記ス，十一日ハ，雲ハアッタケレドモ，静カナイイ晴日ダッタ，昌生叔父様ノ艦ガ点呼ノ為，横浜ヘマハルト云フノデ，朝十一時五十分ノ定期デ山城ニ行ク，青年団ノ人々ヤ家〔ママ〕属ノ人々デ大変ナ人ダッタ，副長室デ中食ヲスマスト，間モナク一時半ニ艦ハ動キダシテ居タ，デッキデハ軍楽隊ガブカブカヤルシ，飛行機ノ音ガスルノデデッキニ出テ見タラ，二台ノ飛行機ガ艦ノ上デ競争デ由〔宙カ〕返リヲヤッテ居タ，更ニ二台ノ飛行機ガ飛ビ出シ，艦ヲメグッテ縦横ニ飛ビマハッテ居ルウチニ，飛行機射撃ノマネゴトヲヤッタリ，其ノウチニ向フノ方カラ二隻ノ駆逐艦ガ出テ来テ，大砲ノ撃チッコノマネゴトガアッタリ，色ンナコトヲヤリナガラ，アマリニ静カ過ギル海ヲ艦ハスベルヨウニ走ッテ行ク。イヨイヨ横浜ニ入ル前ニハ，艦カラ樽ヲ投ゲ，艦尾ノ救助浮滞ヲ投ゲテ置イテ，艦足ヲユルメ，カッターヲオロシテ救助ノマネゴトヲヤッタリシテ，又々賑ヤカナ楽隊ト共ニ横浜ニ入ル，三時半頃ダッタロウ，四時四十五分ノ水雷艇デ上陸。桜木町カラ電車デ東京ニ出ル。

十二日ハ，怪シゲニ曇ッテ居タガ，降リモシナカッタ，午後，上野ニ報知新聞社主催ノ浮世絵展覧会ヲ見ニユク。大変大ゲサナモノデ，開会中ヲ四回ニクギッテ掛換ヲスルノダソウデ，今ハ其第二回デ，版画ハ清長ト歌麿ノ二人ダッタ，肉筆浮世絵ト共ニ見キレナイ程沢山ダッタガ，写楽ヤ，春信ガ見ラレナカッタノハ心残リダッタ，

十三日　今日ハ朝カラヒドク曇ッテ居タガ，直グニハ降リソウモナカッタノデ，十時半頃中沢サンヲ辞シ，昼頃玉川ノ中井サンノ処ヲ訪ネタガ，召集中デ留守ダッタ，中食ヲ御馳走ニナッテ，三時過ギマデ園子サント話シテ居タ，中井サンノ処ヲ辞スルト，雨ニナッタ，玉川カラ溝ノ口ニ出，南〔武〕部鉄道デ川崎ニ出，京浜デ横浜ニ出，五時十七分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。鎌倉ニツイタラ大変ナ雨ニナッタ，梅子叔母様モ東京ニ出ラレテ，同ジ汽車デ帰ッテ来ラレ，百合子ハ女中ト傘ヲモッテ迎ヘニ来テ居タガ，傘ガ役ニ立タナイ程ノ吹降リナノデ，皆デ車ニノッテ帰ッテ来ル。

十四日

終日風雨。

受信　荒居徳亮。

十五日

曇ッテ真暗ダッタガ，午後雨ニナル。

受信，三沢寛。

発信，荒居徳亮，三沢寛。

徳サンノ手紙ニ「三沢君トオ互ノ雁首ヲ作リ合ッテ居マス，モデル台ノ上ニ乗ルト約束シタ様ニボートヲ漕ギマス」トアリケレバ

✓モデル台デボートヲヨケイオ漕ギノ由　鎌倉ニ来テ腕フルヒ給へ。

仝ジ徳サンノ手紙ニ「今年ノ夏ヲ御地デ暮シ度イ」トアリケレバ，

✓鎌倉ハ夏ハカモカモ遊ブニハヨイトコ　是非ニモオイデ　遊ブニハヨイトコ。

三沢ニ，

✓君ガ顔マタナマジロクナリニケム　マタ海ニ来テ焼クベカルラシ。
✓君ガ顔コノゴロ見ネバ　イカガアラム　無性〔精〕ヒゲデモ盖シ伸ビツラムカ。

十六日

曇。糠ノヨウナ小雨。朝，徳サンカラタノマレタ貸家サガシニ長谷ノ方ヲブラブラ歩キ，長谷ノ川路サンノ所ニ寄ッテ来ル。昌道帰ッテ来ル。

叔父様ハ帰ッテ来ラレナイ。

十七日　日曜日

朝曇ッテ居タガ，ヂキニ晴レテ久々ニイイ天気ニナッタ，百合子ヲツレテ百八櫓[174]ヲ見ニ行ク，九時頃家ヲ出，師範ノ裏カラ，来迎寺，八坂社ヲ過ギテ山路ニ入ル，路ト云ッテモ，雨水ノ流レガ自然ニ作リ上ゲタモノヲ，山人ガ踏ミツケタト云フヨウナモノデ，ナカナカスベリガイイ，百八櫓ノ石像ノ数々ハ，大キサガ手頃ナノデ，ドレモドレモ首ダケ欠イテ持ッテ行カレタト見エテ，一ツモ首ノツイテ居ルモノガナイ，山頂ヲ右ノ方ニ廻ッテ，鎖大師ヲ経テ覚園寺[175]ニ降リテ来ル。覚園寺ハヒドク荒廃シテ居ルガ，昔ハ相当立派ナモノダッタノダロウ，草葺ノ五間四面ノ荒廃其物ノヨウナ堂宇ノ中ニ，立派ナ木彫像ガ沢山ニ埃ニウヅマッテ居ル，少シハナレテ，是レモ草葺ノヤット八畳一間位ヒノオ堂ニモ，地蔵菩薩カ何カノ室一パイノ大キナ木像ガアッタガ，コレモ相当立派ナモノダッタ，

他ノ一棟ハ，震災後タテナホシタモノラシク，沢消ノ硝子張リカ何カダッタノデノゾイテモ見ナカッタ，鎖大師ト覚園寺ノ間ノ不動明王ノ跡ノ涯〔崖〕ニ，岩タバコガ一面ニ紫ノ花ヲツケテ居タノデ，沢山トッテ来テ植エタガ，ウマクツクカシラン。十二時頃帰ッテ来ル。

十八日

晴，曇，

受信，兄上。

十九日

晴，曇，夕刻ヨリ小雨。

朝，妙隆寺マデ貸家ヲ見ニ行ク，帰ッテ来タラ，下デ川上ノ叔父様ニオ逢ヒシテ，叔父様ノ処デ一時間程モ話シコンデ帰ッタガ，留守ノ間ニ徳サンガ姉サンヲツレテ来タソーデ，午後来ルカラ待ッテ居テクレトノコトダッタ，午後ヂキニ徳サン達ガ来タノデ，海浜院ノ辺カラヅット長谷ノ坂ノ下ノ方マデ貸家ヲ見テ歩キ，徳サン達ハ四時五十分ノ汽車デ東京ニ帰ル。

二十日

雨降ッタリ止ンダリ，午後，風ガ大変荒レタガ，晩遅ク止ンデ本降リノ雨ニナル。

二十一日

朝マデ降ッテ居タ雨ガ止ンデ，午後カラハ日ガ照ッタガ，ダンダン曇リ，夜中ニハ又，雨ニナル。

二十二日

雨。

二十三日

晴。時々雲ガ出タガ，晴レルト遉ニ初夏ラシイ，午後三時頃カラ川上ノ叔父様ト，七里ヶ浜ノ方ヘ散歩ニ出ル。昌道帰ッテ来ル，叔父様遅ク帰ラレル。

二十七日

二十四日ノ日曜日ニ，朝九時ノ汽車デ東京ニ出ル。久顕ハ，青田サンニ行ッテ留守ダッタ，夕方，三沢ヲ誘ッテ築地ニ行ク。築地デハカイザーノ「二人ノオフリエル」[176] ダッタ，ナカナカ面白カッタ，朝晴レテ居タガヂキニ曇リ，夕方カラ小雨。二十五日ハ，

午後，浮世絵展覧会ニ行ッタ，伊藤ノキサチャン夫妻ニ場内デ会ッタ，出テ来タラ，溝口三郎[177]ニ会ッタ，夕方，大森ノ兄ノ処ヲ尋ネタガ，夜中ノ十二時迄マッテモカヘラズ，一時半頃ニナッテヘベレケニ酔ッテ，社ノ人ヲ一人ツレテ，ト云フヨリモ，ツレラレテ帰ッテ来タ，三時半頃迄モ起コサレテヤット寝タ，二十六日ハ，朝カラ晩マデ雨ガ降ッタリ止ンダリシテ，蔭気ダッタ，兄ハ今日，社ヲ休ンデシマッタノデ，ズル〳〵居テ寝ガ足リナイデボンヤリシテ居タガ，夕方ピアノノオ弟子サンガ二人――イツカクリスマスノ頃逢ッタ井上サント森口サント云フ二人ノオ嬢サンダ――来タノデ，トランプナドシテ遊ンダ，夕食後二人ハ帰ッテ行ッタ，今日ハ朝ノウチ雨ガ止ンデ居タノデ，朝早ク鎌倉ニ帰ッテ来ル，又雨ニナル，

受信　中井良三郎，荒居徳亮，

発信　中井良三郎，荒居徳亮，英子。

二十八日

曇。小雨。

二十九日

終日雨。夜，叔父様帰ラレル。

受信　英子，上原寿造氏

発信　英子，

三十日

雨。よく〔ママ〕降ル雨。イヤニナッタ雨。

叔父様帰ッテ来ラレル。

昌道，石丸サンカラ引上ゲテ帰ッテ来ル。

✓梅雨（ツユ）ノ雨降ル降ルナベニ庭ノアンズノ木，アンズノ木ノ木末ニスコシ□□（赤ノ）実ノアカラメリ

受信　三沢寛

七月

一日　日曜日

晴。久シブリノ晴。気持ヨク暑クナッタ晴。

二日
晴。アブナッカシイ晴レダガ。
夕方，久シブリニ町ヲ散歩シテイイ気持ニナル。
受信　英子，
発信　上原寿造氏，

三日
晴。

四日
曇，午後雷鳴シテ雨トナル。

五日
母上ノ一年忌ニ当ルノデ，叔母様ト子供達ヲツレテ，九時八分ノ汽車デ茅ヶ崎ニユク，汽車デ中沢サンノ人達ト一緒ニナリ，墓前ニ行ク，兄上モ少シ遅レテ来ラレル。
十時半，神官ノ用意モ出来テ式ヲ上ゲ，十二時半ノ汽車デ皆々東京ニ出ル，丸ビルノ精養軒ニ御霊ヲ安置シテ皆ノ来ラレルノヲ待ツ，小城ノオバサン，千代子〔本田〕オバサン，青田様，出科サン，田辺ノ英サンナドガ来ラレ，三時過ギカラ霊前デ御茶ヲ飲ム，
五時十五分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル，イイ塩梅ニ天気ガヨカッタノデ，何モカモ滞りナクユク。
受信，三沢寛，

六日
曇，晴，
受信　上原寿造氏，
発信　本田伊萬子[178]様，

七日
曇，晴。
今日カラ八雲神社[179]ノオ祭リナノデ，下ノ街ハ昼間カラ賑ッテ居ル。夜，昌道ニ引張リ出サレテオ御輿ヲ見ニユク，夜，十時過ギテ，久顕ヤッテ来ル。
発信　上原寿造氏，英子，

八日
晴，曇。午後，久顕ト佐助ケ谷ノ方カラ海岸ノ方ヲ散歩，夜，雨ニナル。

九日
曇。午前中, 小雨。久顕三時過ギノ汽車デ東京ニ帰ル。昌道ニ引張リ出サレテ海ニ行ク, 水ガツメタクテ, 砂ガヌレテ居テ温マルコトモ出来ナイデ, ヂキ上ッテ帰ル。

十日
曇ッテ鬱陶シイ, 夕食後, 散歩,
受信　金子九平次君, 英子,

十一日
曇。午後, 昌道ニ引張リ出サレテ海ニ行ク, 寒クテ入ル気モシナイノデ, ボートヲ漕グ。
発信　金子九平次君,

十二日
晴, 後曇リ。午後, 海へ行ク。

十三日
晴, 午後, 昌道ト海へ行ク, 夜, 叔父様帰ラレル。

十四日
晴。午後, 昌道, 百合子, 綾子ヲツレテ海ニ行ク。

十五日　日曜日
晴, 昨日留守ノ間ニ, 東郷吉太郎伯父様ガオ尋ネ下サッタノデ, 今朝七時七分ノ汽車デ大船ニ行キ, 伯父様ノ所ヲオ尋ネスル, 色々南洋ノ事ヲ伺ッタリシテ, 十時半ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。
午後, 海へ行ク。

十六日
曇, 晴, 風烈シ,
受信　金子九平次君
金子君ノ手紙ハ, 意外ニモ奥サンノ死去ノシラセダッタ,

✓玉梓ノ我ガ友ノ文ハ妻ノ君ノイタマシ死出ノ知ラセナリケリ

夕食後プラ〳〵八幡様ノ方ヲ散歩スル,

✓八幡ノ蓮ノ葉見事ナレド花マダシ
✓此ノ池ノ蓮ノ葉見事ナレドアス咲カム蕾スクナキマダ早キニカ

十七日
晴。風甚ダ烈シ。
午後，子供達ニ引張ラレテ海辺ニ出タガ，潮風ガハゲシクテ眼鏡ガ曇ッテシマッテ不愉快ダッタ。

十八日
雨。
受信　英子
発信　英子

十九日
風ハ止ミタレド小雨降ッタリ止ンダリ，ヒヨヒヨト涼シ，夜，叔父様帰ラレル。
受信　久顕

二十日
終日小雨降ッタリ止ンダリ，
昨日ノ久顕ノ葉書，富士見ノ高原療養所発ニテ，終ヒニ

✓八ツヶ岳，南アルプスヲ見テモ歌心動カズサビシキロカモトアリケレバ，
……八ツヶ岳，南アルプスヲ見テモ歌心動カヌハ，半バハ玄人気質ニ染ミシ故ナラズヤト存ゼラレ候，歌ナンテモノハ，詠ミッパナシテ詠ミッパナシテ百首ニ一首意ニカナヘバ結構ノモノニ候，

✓軽井沢ニ過ゴシシ夏ノ思ヒ出ヲ揺リ起コサレツ君ガ便リニ[180]。
✓葦切ノ叫ビニ覚メテココロヨカリシ軽井沢ノ夏ノ朝シ思ホユ。
✓信濃ナル高原ノ夏ノ朝ノ爽ケサヲ相模ノ浜ユ恋ヒ居リワレハ。
✓霖雨（ナガアメ）ノシキテ降レレバ浅間山ハ雲ニサヤリテ見エズカモアラム。
✓棚霞ミ浅間山ハアレド雲ノ影ユユニ山肌ヲ這ッテ見ズケン雨ノ降レレバ。
〔欄外に記す〕
［旋頭歌］
✓朝毎ニかっこうヲ聞キテ目サメナバヨカラム山ノ病院ノ朝ハ。
✓かっこうハ聞クニヨカレドりすコソハ土産ニモッテ帰ルニヨケレゾ。
✓ワガ飼ヘル鼠スコヤカニ育チ居リ夜ナ夜ナアバレ昼ハツツマシク。

マアコンナ塩梅ニ候，草々雑々。

発信　久顕

二十一日

雨。夕方叔父様帰ラレル。晩，難波氏，小熊氏酔ッテ来ラレル。

二十二日　曇。日曜日

午後，散歩ニ出，秋庭サンノ所ヲオ尋ネスル。

二十三日

曇。昨日，秋庭サンカラ星ヶ岡陶窯[181]ノ参観券ヲ頂イテ居タノデ，午後，川上ノオヂサマヲオ誘ヒシテ見ニユク，駅前カラ自動車デ北鎌倉駅ノ少シ先キ，村役場ノ手前マデ行ッテ，アト左ヘ田舎道ヲ歩イテ行クト，四五丁ダッタ，山ヲ切通シニ開イタ道デ，其ノ道ガナカナカイイ，星ヶ岡デハ，北大路氏[182]ハ留守デ，荒川サン[183]ト云フ人ガ案内ヲシテクレタ，北大路氏ノ作モナカ〳〵コッタモノダガ，同室ノ朝鮮鶏龍山ノ窯跡カラ掘リ出シタト云フ数々ノ破片モ，ナカ〳〵面白イモノダッタ，更ニ少シハナレタ参考館ニハ，茶式古陶磁器ガ一通リ（七百点）揃ッテ居テ，大イニ見ゴタヘノアルモノダッタ，支那，朝鮮ノ青磁各種，小木米，ションズヰ等ノ集品，定窯，均窯等モサリナガラ，三州物ノ下手物ノ茶釜敷ニハ，デュッフイノ水彩ハダシノ様ナ達者ナモノガアリ，青呉須ノ下手物ノ渋イ藍，ソレカラ珍ラシイモノデハ，アンナン物ノニクイヨウナ味，色，焼，等ハイクラ見テモ飽キナイモノダッタ，トテモ見キレナイウチニ労レテシマッタノデ，再来ヲ期シテ帰ッタ，

二十四日

晴，夕方カラ横須賀ノ水交社デオーケストラガアルノデ，川上ノオヂサマヲオ誘ヒシテ，子供達ヲツレテ行ク，夕飯ヲ水交社デ御馳走ニナッテ，音楽会ヲキイテ，九時五十分ノ汽車デ昌生叔父様モ一緒ニ帰ラレル。

受信　金子九平次，上原寿造氏，

二十五日

晴，メッキリ暑クナル。午後，皆デ海ヘ行ク。

受信　清美サン。

発信　上原寿造氏，江波知彰，

二十六日

晴。午後，海へ行ク。

二十七日

晴。昌道，級会ノ旅行ニ出カケル。午後，女ノ子達ヲツレテ海ニユク。
発信、上原寿造氏、
□□□□□□□□

二十八日

晴。午後，女ノ子達ヲツレテ海ニ行ッタラ驟雨ニ降ラレ，帰ッタラスッカリ晴レテ，夜ハ月ガ美シイ。叔父様帰ラレ，昌道モ八時ノ汽車デ帰ッテ来ル。

二十九日　日曜日

晴。雲多シ。午過ギパラ〳〵驟雨アリ。夕食後，昌道ニ引出サレテ，海浜博覧会ニ行ク。

三十日

終日雨風。

三十一日

終日雨。

発信　三沢寛，荒居徳亮，倉橋弥一，一瀬直行，都築益世

八月

一日

終日雨。日暮前，一寸晴レタガ，夜ニ入ッテ再ビ益々降ル。

二日

終日雨。

三日

曇，暫らく日も照った。午後，西尾サンの女の子が来たので，子供達皆で海辺に貝をひろひに行った。海は連日の風雨の後にも似ず大変しづかで，さしていい天気でもないのに，なか〳〵の人出で賑ってゐた。

受信　久顕

四日

日ガ照ッタリ曇ッタリ，カト思フト雨ガ降ッタリ止ンダリ，何トモトリトメノナイ天気。

夕方，叔父様帰ラレル。

五日　日曜日

曇リ，時々雨ガ降ッテ時々日ガ照ッテ……午後三時頃カラ，材木座ノ浜ニ行ッテ見ル。パラパラ雨位ヒクルツモリデ行ッタノダガ，材木座マデ行カナイウチニ雨ニナッタ。ダガ又浜ニハ沢山ノ人ガ出テ居テ，海ニ入ッテ居タ。滑川〔ママ〕の方ヲマハッテ帰ッテクル。

六日

晴レタリ曇ッタリ，小雨ガ降ッタリ。ツクヅクイヤニナッタ天気。午後，星君ノ処ヲ訪ネタガ留守，川路サンノ処モ留守ダッタノデ，海ニ一寸入ッテ来ル。

発信　久顕，

受信　荒居徳亮。

七日

曇。時々晴，午後，皆デ海ニ行ク。海デ波多野サンノ人々ニ逢フ。

八日

曇。終日重ク曇ッテ居テ，九月ノヨウニ涼シクテ，九月ノヨウニ淋シイ。立秋ダ。トウトウ此ノ夏ハ夏ニナラナイデ，秋ニナッテシマフノダ。気持ノイイ暑イ日ガ来ナイデシマッテ，秋ニナルナンテアンマリヒドイ。

午後，子供達ト道隆ヲツレテ浜ニ行ク。西尾サンノ人達ガミンナデ来テ居イテ，網ヲ打ッテ居タノデ，滑川ノ川べリデ一時間程モ遊ンデ帰ッテクル。

受信　三沢寛，　金子九平次。

九日

曇。時ニ照リ，時ニ小雨。午後，一人デ材木座ノ海ニ行ク。夜ニ入ッテ雨本降リ。

十日

朝マデ雨ガ降ッテ居タガ止ミ，午マデニハ珍ラシク青空ニナル。午後海へ行ク。

十一日

雨降ッタリ止ンダリ。

十二日　日曜日

久々ノ好天。荒居ノ徳サンガ午前ニ来ル，直グ海ニ行キ，ボートニノッタリ，イカダニ行ッタリシテ，夕方帰ル。徳サンハ九時ノ汽車デ東京ニ帰ル。

受信　英子。久顕。
〔欄外に記す〕
［発信　久顕］

十四日

大変イイ天気。朝カラオ弁当持チデ海ニ行ク。二時過ギマデ子供達ヲ遊バセテ一足先ニ帰リ。四時ノ汽車デ出京，夜ニ入ッテ急ニ下痢数回。夜，佑サン帰省。

十五日

朝ノウチ曇リ，午後雷雨。下痢止マズ。終日ウトウトシテ居ル。

発信　荒居徳亮。

十六日

曇，時々雨パラパラ。下痢全クヤム。

✓行水ノ元気モナクテ下痢ノアト
✓下痢腹ニ夕立過ギシ空ノ色
✓琴ポツポツ蝉ヨリハ暑クナカリケリ

夜九時前，佑サン帰ッテ居ル。

受信　荒居徳亮。　　発信　荒居徳亮。

十七日

朝ノウチ晴，午後引切リナシニ驟雨来ル。

朝，田辺サンニ行ク。田辺サンハ留守デ，昼前ニハ帰ルト云フノデ，神田ニ本ヲ買ヒニ行キ，昼前再ビ田辺サンニ行ク。田辺サン帰ッテ居ラレ，共ニ昼食ヲ御馳走ニナリ，四時近クマデ雨ノヤムノヲ待チナガラ話シテ居タ。新宿ニ出テ買物，三沢ノ所ヲ尋ネ，玄関デ立バナシ。日暮，高円寺ニ帰ル。

十八日

朝ノウチ驟雨ジミタ雨。後止ンデ終日曇リ，ムシムシ。朝，銀座ニ出テ，タノマレ物ヲ取リ，九時二十分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。午後遅ク海ニ行ク。波多野サンノ人々ト捷チャンニ逢フ。波多野サンノ人達ガ帰ッテカラ，捷チャント一寸海ニ入リ。帰リ，

イソミニ行ッテ捷チャントビールヲ飲ンデ話シコミ，八時頃帰ッテクル。

十九日

雨。雨量ナカナカ多シ。

二十日

朝迄雨ガ降ッテ居タガ止ンデ，ズット曇リ，夕方一寸日ガ出ル。

川上ノオヂサマニ誘ハレテ，午後片瀬ニ行ク。帰リ由比ケ浜ニ出テ海バタヲ歩イテ帰ル。

受信　久顕。

発信　英子。

二十一日

晴。ヨクヨクモ降ッタ雨ガ本当ニ止ンダラシク，青空ニ□雲一ツナイ。

夕食後，長谷ノ方ヲ散歩。

受信　英子，久顕。

二十二日

晴，午後雲多シ。午後，海へ行ク。川路柳虹氏ニ逢ヒ，川路氏ノ家ニ行ッテ暫ラクスル。

二十三日

晴。午後，百合子，綾子ヲツレテ海ニ行ク。

（朝十時頃，叔父様，昌道，百合子ヲツレテ大阪ヨリ帰ラレル）夜，雨トナル。

二十四日

小雨，ヤンダリ降ッタリ。午前，田辺サンガコラレル。田辺サント零時五十分ノ定期デ山城ニ叔父様ヲタヅネ，艦見物，後，航空母艦カガヲ見テ三笠ニ行ク。遅カッタノデ外カラ見テ，五時五十五分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。田辺サン宿ル。

二十五日

雨降ッタリ止ンダリ。午後四時ノ汽車で田辺サンガ帰ラレルノデ，子供達ヲツレテ駅マデ送リ，帰リ八幡様ノ池ノマハリヲマハッテ来ル。

二十六日

晴。午後，百合子，綾子ヲツレテ海へ。

受信　上原寿造氏。金子九平次氏,
発信　上原寿造氏,

二十七日
小雨。□□□□

二十八日
朝一寸雨。後晴，午後，百合子，綾子ヲツレテ海へ。
受信　湯地孝。
新聞デ見タラ，佐伯祐三君ハ巴里デ客死シタ。奥サンハ随分コマッテ居ルダロウ。ソー云ヘバ，先達ノ新聞ニハ，川崎寛名ガ自動車デ涯〔崖〕カラ落チテ死ンダ。ミンナ新聞ニ出ルヨウナ人ニナッテ居ルカラワカルヨウナモノノ――ソレヨリモ近頃ハ，誰ソレガ死ンダト聞イテモ，別段ノ感モ受ケナクナッテシマッタ自分ダ。青木ガ死ンダ時，岡村ガ死ンダ時，木下ガ死ンダ時ハ，実ニ変ナ気ガシタ。原瀬ガ死ンダ時，中嶋ガ死ンダ時ニハ，既に□〔後〕五島ノ萬千代サンガ死ンダ時ヨリモ何トモナカッタ。ソレカラ先達，南日恒太郎先生ガナクナラレタ（溺死）時――アノ時ハモウ麻痺シテ居タ。年ヲトッタノカシラン。ソレトモ父モ母モナクナスト，コンナ風ニナルノカシラン。夜遅クナッテ雨ガ降リ出ス。
今夜，縁ノ下デコホロギガ鳴キ出シタ。

二十九日
朝雨止ミ，天気ヨクナル。午後四時頃カラ，百合子ヲツレテ材木座ノ浜へ散歩。昨日カラ海ハ浪ガ出テ居ル。貝ナドヒロッテ暗クナル頃帰ッテ来ル。帰ル頃，真円ナ月ガ大キク明ラケク出テ来ル。ダガ十一時頃見タ月ノ囲リニハ，虹ノヨウナ月ノ輪ガカカッテ居ル。明日ハ雨カモシレナイ。浜ニ行ッテ居タ頃モ，遠雷ガ鳴ッテ真黒ナ雲ガ出タガ，ポツポツト滴ヲ降ラシタダケデ過ギタ。

三十日
雨降ッタリ止ンダリ。日モ照ッタリ昃ッタリ。

三十一日
晴〔ママ〕ケテ暑クナル。今ニナッテ夏ノヤウニ暑クナル。ダガ風ガ烈シイ程ナノデ，ソレ程モ□〔夏〕暑クナイ。喉ガ痛クテ熱ガ三十八度カラアッテ，体ノ骨々ガダルクテ，終日ダラ〳〵ダラケテ居ル。
受信　田辺保男氏,

九月

一日

晴レテ大変ニ暑イ。夕刊デ見ルト八十九度[184]デ，今年中デノ最高ダ。シカモ七月ノ何日カニ八十七度[185]ト云フノガ一日アッテ，二三日前ニ八十六度[186]ト云フノガ一日アルダケナノダカラ，飛ビヌケタ暑サダト云ッテモイイ。

二日　日曜日

晴。昼前，三沢，荒居ガ揃ッテ，徳サンノ甥ノK・Oボーイヲツレテ来ル。

ヂキニ海ニ行ッテ，夕方迄タップリツカッテクタビレテ帰ル。ソレカラ皆デイソミニ夕食ヲ食ベニ行キ，皆ハ九時ノ汽車デ東京ニ帰ル。

受信　久顕。

三日

晴。暑イケレドモ空ガ高クテ，日ガギラ〳〵強クテ，風ガアッテ気持ガイイ。

四日

晴。昨日カラ二階デ書画ノ虫乾シヲヤリ出シタ。十五幅ヅツホスノダガ，ナカナカ面倒臭イ。面倒臭イケレドモ，気ガカハッテイイ。

　無銘，溪蓀対幅

✓新月ニ蝙蝠飛ブヤアヤメ咲ク

　王嬴筆　鐘鬼像

✓散ル花ニ何ノ怒リゾ鐘鬼様

　伝周信筆　猿猴図

✓ブラリトサガッテ中ブラリンノ小猿哉

✓猿ニ似テ真似モ真似タリ牧溪猿（此ノ猿ノ筆式牧溪ニ似タリ）

　黄宝元筆　鴉図

✓支那梅ニ二羽ノ鴉ノオノガジジ〔ママ〕

　探元筆　柳図

✓老イ柳ソトモ動カヌ白サ哉

五日

晴，午後，百合子，綾子ヲツレテ材木座ノ浜ニ行ク。

受信　久顕。

　無銘　猿廻シ図
✓猿舞フヤ鳥羽絵メキタル人垣ニ
　松雲筆　若竹図
✓若竹ノ只三本ニ風起ル
　相阿弥筆　鷺之図
✓真相ノ鷺ヤ無想ノ欠伸哉

六日

晴。日ギラ〳〵光リ風アリ。気爽カニ食進ム。夕食後，散歩一時間余。

梅痴筆　猿廻シ図
✓太鼓ナルヤ猿サカシマニ棒ノ上
✓猿ツカフ人ノ得意ヤ梅痴君
✓ツカフ人ツカハルル猿描ク梅痴

七日

晴。雲多ク，時々――殊ニ朝ノウチハ曇リガチダッタ。夕食前，散歩ガテラ八幡様ノ国宝館ヲ見テクル。

　探元筆　壽皇
✓壽考トハ滅法長キ頭(アタマ)哉
　周信筆　壽皇
✓亀千年壽皇万年イイ気カナ
　立原任筆　赤壁山水
✓舟ノ人皆々一賦ホシゲナリ

八日

晴。朝ノウチニ大船ノ東郷(吉太郎)サンノオヂサマヲオ訪ネスル。南洋カラハ何ノ返事モ来テ居ナイ。
午後，百合子，綾子，道隆ヲツレテ材木座ノ海ニ行ク。
夕方，叔父様帰ラレル。

九日

晴。日曜日。十時前，川上ノオヂサマ来ラレ，十二時前，島村ノオバサマ来ラレ，三時前マデ賑カニ話シテ行カレル。ソレカラ百合子，綾子ヲツレテ，材木座ノ海ニ行ク。

帰ッテ来タラ，久顕ガ来テ居タ。

十日

晴。午前ヨリ曇リ，小雨。後又晴レル。

午後三時過ギ，皆デ道哉サンノオハカニ行キ，久顕ト自分ハ前ノ五本松ニ登ッテ見ル。ソレカラ町ヲ散歩。

十一日

晴，午後，久顕ト海ニ行ッテ一浴ビシ，四時ノ汽車デ茅ヶ崎ヘオ墓詣リニ行ク。

茅ヶ崎カラ，久顕ト一緒ニ東京ニ出ル。

十二日

晴，雲多ク，一時パラ〳〵雨。午後，久顕ト三越ニ行キ，神田ニ出テ本屋ヲ歩キ，新宿ニ寄リ，夕方帰ル。

十三日

晴，朝，博物館ニ行ク。出テ来テ美術学校ニ行キ，三沢ヲ訪ネル。荒居ノ徳サンニモ逢フ。三沢ト山下カラ本郷ノ方ヘ歩キ，新宿ヘ出，新宿デ別レテ帰ル。

十四日

朝ノウチ院展，二科ヲ見テ来ル。

発信　江波知彰

夕食後，久顕ト新井ノ方ヲ散歩。

十五日

晴。朝ノウチニ鎌倉ニ帰ッテ来ル。

十六日　日曜日

晴。

十七日

終日小雨，降ッタリ止ンダリ。急ニ寒イ

発信　江波知彰。

十八日

小雨，降ッタリ止ンダリ。十一月ノヨウナ寒サ

受信　江波知彰。

十九日

朝マデ曇ッテ居タガ，ヂキニ晴レテ，秋モ深クナッタ静カナ日。

✓今日ハ晴レ精出シテ鳴ケ秋ノ蝉

日暮前八幡様ノ方ヲ散歩。

二十日

晴，午前，川上ノ叔父様ガ来ラレ，午後，釣ニ行カウト云ハレルノデ，午後二時過ギカラ一緒ニ滑川ニ釣ニ行ク。チットモ引カナイ。一匹モトレナイデ，夕方帰ッテ来ル。

✓ナメリ(滑川)ガハニ　ツリ(釣緒)ノヲ垂レ　ポツネムト　ウキ(泛子)ヲ見居レバ
ヒク(引)ヨトシ　ヒクニモアラズ　ヒカヌカト　見レバ引クラシ
トマレヨト　竿ハネシカバ　コハコハ(此者此者)　コヨビ(季指)ニモ足ラヌ
チ(小)ヒサケキ　シマダヒ(縞鯛)ノ子ガ　シカスガニ　イキ(生)ノ強ケミ
ピチピチト　ハネテ(跳)サガレリ　□□□□□□(秋日ヲウララ)天麗秋ノ空青シ

返

✓秋空ニ小魚ピチピチト釣レテケルカモ

二十一日

朝マデ降ッテ居タ雨ガ止ミ，暫ら〔ママ〕ク晴レタガ，ヂキニ曇リ，午後雷鳴豪雨アリ。夕方止ム。日暮前，上原〔ママ〕のおばさまガ見エル。

二十二日

曇。朝，大船ノ東郷吉太郎叔父様ヲオ尋ネスル。書ヲ書イテ戴ク。オヂサマハ十時頃出カケテラレタガ，自分ハオ昼御飯ヲ御馳走ニナッテ，東郷サンノ名紙〔刺〕ヲ頂イテ，小坂小学校ニ大橋氏ヲ訪ネル。空ガ暗クテ，霧ガ濃クテ，風ガナクテ，イヤニ気持ノ悪イ日。鎌倉ニ帰ル頃カラ，漸ク雲ガ薄ライデ日ガ照ル。

二十三日　日曜日　秋季皇霊祭

朝ノウチ曇リ，一寸雨降リ，後晴レテ空高シ。

二十四日

雨

受信　久顕

二十五日

晴レル。夜ニ入ッテ雨。

受信　上原寿造氏

発信　久顕，大橋氏

二十六日

雨。湿ッポクテ寒クテ不快。

久顕ヨり電報

〔欄外に記す〕
［コハ，英子ノ所ニ男ノ子ガ生レシシシラセナリ］

ウキネスル　ナミマノカモノユラユラニ　タマサゲモチテ　オノコウマレケリ・ヒサアキ

二十七日

晴。雲一ツナキ秋ノ空，少シノ風肌ニ冷タシ。川上ノオヂサマニ誘ハレテ，午後，逗子ニ行ク，海岸ニ出，一廻リシテ見ルモノモナケレバ，鎌倉ニ帰リ，長谷ノ方ニ出テ見ル。帰リノ電車デ本田ノ伊萬子叔母様ニオ逢ヒスル。

晩ハ月美シ。

✓望月ニ立チノヒソケサヤ彼岸花

〔欄外に記す〕
［受信　上原寿造氏，久顕］

二十八日

晴。十五夜。午後，名越ノ奥マデ行ッテ，七草ヲトッテ来ル。

✓秋澄ンデ深ム静ケサヤ百舌鳥ノ啼ク

✓ココラアタリソコニモココニモ彼岸花独リヲ行キテ見レバ□□□□イ惜シサ

✓持テル程ノ彼岸花摘ミシ子ノ二人

〔欄外に記す〕
［英子三男誕生。］

発信　英子。

✓真玉ナス　玉サゲモチテ　生(ア)レ□□□□イデヌ　ウマシ御(オ)子ニハ
何シカモ　祝ギ献(マタ)サメ
ミツミツシ　瑞玉盃(ミツタマウキ)ニ
石(イハ)立タス　少名御神ノ
神寿ギニ　寿ギ狂ホシ醸ミシ御酒
豊御酒　コヲコソ献(マタ)セ
八ッノ緒(ヲ)ノ　琴カキナラシ
豊寿ギニ　寿ギ□□□モトホシ　歌ハン歌
祝ギ歌　ソヲコソ添ヘテ――

二十九日
曇，晴。夜ハ雲アレド薄ク月ヨシ。

三十日　日曜日
雨。寒クテ暗クテ。
受信　江波知彰。久顕。

十月

一日
晴。

二日
晴，叔母様，道隆ヲツレテ東京ニ出ラレル。

三日
曇。夕方カラ雨ニナル。

四日
終日小雨ガ降ッテ寒イ。

五日

終日小雨。陰気デ寒クテ。

六日

晴。午後，百合子ヲツレテ佐々目谷ノ方ニ出，佐助稲荷ニ行キ，裏山ニマデ登リ，引返テ銭洗弁財天ニ行キ，山ヲ越エテ仮装〔化粧〕坂ノ切通ヲ下リ，海蔵寺道ヲ廻ッテ帰ッテ来ル。

✓山道ヤ薄高クシテ眺メナキ

七日　日曜日

終日雨。陰気，不愉快，真暗，シミッタレタ寒サ。

発信　江波知彰。

八日

雨。時ヲ置イテ豪雨。夜ニ入ッテ風南ニ変リ，ムウ〳〵ト蒸暑ク，二階ニ居ルト磯ノ香ガ強ク匂ッテ来ル。夜更ケテ風益々ツノリ嵐模様トナル。

九日

嵐過ギテ晴。青空に風。久々に暖か。

十日

晴。

四五日前，新聞に横浜に貝塚[187]が発見され，□□三千年程も前のもので，アイヌ派らしいと出て居たので，貝塚といふものを見ようと思って行って来た。

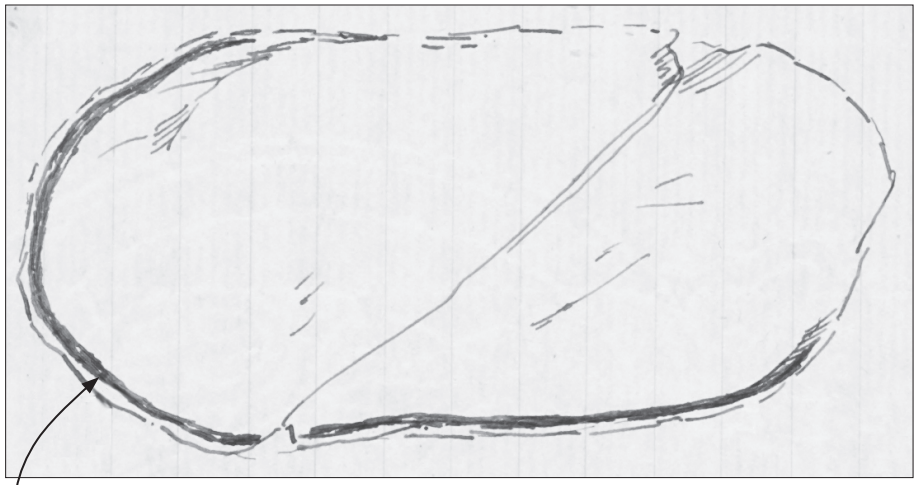
場所は，横浜市中区元町一丁目，元増徳院境内，金比羅神社の裏，

成る程，貝が沢山あるが，そこいらをかきまはしたのでは何一つない。折角来たのだから，何か小さなかけら一つでも見つけ度いと思って，別な処をステッキでこつ〳〵堀〔掘〕って見るが，夥い貝殻の中からはさて何も出て来ない。うんじゃりする頃に，やっと小さな土器のかけらと，他の石ころとちがって，少しばかり細工をしたらしい石とが見つかったので，これでいい事にして帰って来る。兎も角始めて貝塚といふものを見たのだから，それだけでもまあ，仕方がないと云ふものの，帰って来ると欲が出て，も少し掘って見たらよかった様な気がする。尤もスコップでも持って行かなくては，あれ以上掘るのは容易ではない。それに涯〔崖〕の中途で足場がないから，靴なんかはいてゐたのでは何うせ大した事は出来やしない。

石は石質が何だか一切解らないのだから，点で話にならないが——まあこれは後で誰

かに聞いてもいいが，少し位石の本でも読まなくては貝塚に行く資格もなささうだ。

処で此の石，頗るあやしいが形だけは何うにかなってゐる。少し形が小さいが，石包丁の一種かも知れない。



実物大，打製

此ノ線の部分が刃になって居る。

斯ういふ形と大きさのもので，此の向で前面が稍平たく，後面が稍円みを帯びてゐる。右手でものを切るやうに握って見ると，なか〳〵持ち具合がいい。それから，図のように一方だけづっと刃がまはって居るから，之を縦に持って見ると，これも悪くない。

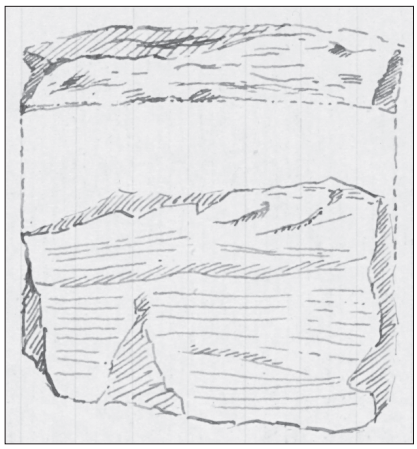
なんて一生懸命になって見ても，其道の人が来て，こりゃ君只の石のかけらだよと云はれれば，左様ですかと云ふより仕方がない。といふのは，是れが磨製なら素人目にも確かだらうが，相〔生〕憎打製なのだ。だから是れは，石質でもわかるまではとって置きの代物だ。兎も角，貝塚から出たのでなければ，有難くもない代物かも知れない。だから石はこれ位にして，土器のかけらに移ることにする。

〔欄外に記す〕
［受信　上原寿造氏］

土器の方は誰が見たって土器で，石のように形のあるものを，只形をいくらかつくりかへたのとはちがって，形のないものから形に仕上げたのだから，何処かに人間の手が働いた跡がはっきり見える。だが如何にも小さなカケラなので，素人の自分には何ともはっきりしたことは云へない。カケラは二つだが，土質は両方共黒手だ。もう一箇赤手

の小さなカケラを見たのだが，側に置いて夢中になって掘ってゐる間に貝殻に埋まってしまって，捜しても見つからなかった。

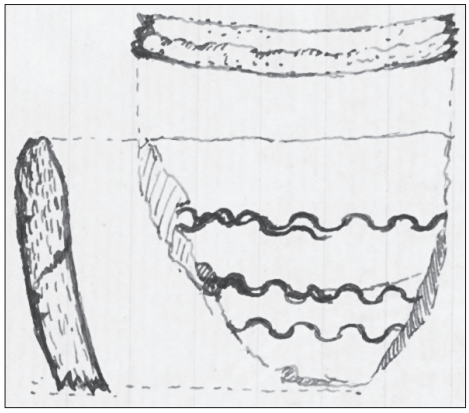
約実物大



一つは，斯んなたわいもないカケラで，何一つ掴み処もないものだが，幾らか此の図で前面の方に湾曲してゐる。外面即ち図の後面は，かなり滑らかに平らにしてあるが，右のはしの方が指頭大程ゆるく窪んでゐるから，此の程度の凸凹は全体にあったものだらう。内面は図のやうにかすかに線が入ってゐるが，平行線で間隔も正しいから，貝殻か何かでそいだものらしく，線は極く浅くて我々彫刻家がよく使ふ， こんな様な篦の跡と寸分違はない。焼きは石の様に固くて厚手だ。

も一つのものは，土質が粗で焼は極，脆い。欠け口の処など爪で少し強くこすると欠ける位ひ，湾曲の具合で見ると，円にして直径十五糎から十七八糎位の碗の頭部らしい。そして外面に図の様な模様が入ってゐるが，これは明らかに押しつけたものである事がわかる。丁度帆立貝の様な貝のぎざ〳〵を縦に押しつけたもののやうで，第一第二線に見るやうに，模様のつなぎ目が明らかに喰ひちがってゐる。そうして，此の方はどちらかと云へば，薄手だ。

約実物大



さて是れだけでは，私にはアイヌ派のものだとは云はれない。それから貝塚なるものを見て，是れを人間の食ひ捨てたものとは如何とも考へられない。これは松岡静雄[188]氏が，元禄十五年の高橋村大字平井から頼野村大字日川へかけての□□例，其他を挙げて説明するやうな（日本古俗誌八一頁）自然現象とする方が無理がないように思はれる。そして海岸の砂からあれだけの貝殻を篩ひ上げたら，あの程度に人間の遺物が含まれてゐのも〔る脱カ〕□□〔当然〕，少しも無理がないと思はれる。但し，外の貝塚を知らないのだから，貝塚のどれもが皆此の自然現象から生じたのだと主張するのでは勿論ない。

だがそれは何うでもいいとして，貝塚といふものは，其処に含まれてゐるこんなカケラに（何しろ海に近いとは云へ，あんな高い丘の上にあるのだから）はっきりと時代の幽玄を着せてくれるだけでも，一寸親しめるやうな気がする。

十一日

秋霞。

十二日

晴。

✓裏山ニ登レバ秋ガ暑キナリ

✓秋晴ヤ足袋ハイテ戻リヌグベカリ

十三日

半曇半晴。百合子の方の運動会だったので，綾子をつれて朝から見に行く。昼前に自分だけ帰り，二時二十分の汽車で北鎌倉に行き，小坂小学校に大橋氏を訪ねたが，明日運動会なさうで，忙がしく立働いて居られたので，直ぐに辞し，円覚寺や建長寺や，そこらの名もないようなお社などをのぞきながら，ぶら〳〵歩いて帰ってくる。

十四日　日曜日

晴。午後三時頃からぶら〳〵出で，百八櫓，弘法硯水から覚円寺の方にぬけて，夕方帰って来る。

受信　三沢寛。

十五日

曇，寒イ。

十六日

曇晴。夕食後，片瀬に行き，大橋氏の処を訪ねる。

発信　上原寿造氏，三沢寛，久顕

十七日

晴，曇，午後雨。　新嘗祭

十八日

□□□□□一日雨ガ降ッテ寒ク，午後ニハ風サヘ烈シクナル。演習休暇デ叔父様モ家ニ居□□□ラレタノデ，午後叔母様ト三人デ久々デ花ヲヒイテ遊ブ。（られた）

発信　久顕

十九日

晴。夜，秋庭サンの所を訪ねたが，御留守だったので，□□□上（玄関迄）らずに帰ってくる。

受信　田辺保男氏

二十日

曇，晴。午前中，大船にゆき東郷さんにお逢ひして来る。

発信　田辺保男氏

二十一日　日曜日

雨。冬のやうに寒い。

受信　久顕

二十八日　日曜日

二十三日ノ日ニ曇ッテ居タガ，午後東京ニ出ル

二十四日　曇。小雨アリ。朝，〔土方与志〕久敬ノ処ヲ訪ネ，オ昼御飯ヲ馳走ニナッテ，午後小石川ニ行ッタガ，叔母様ハオ留守ダッタノデ，田辺サンニ行ク。晩ノ御飯ヲ馳走ニナリ，帰リニ国サント靖国神社ノオ祭ヲ久々デノゾイテ見ル。

二十□（四）五日　晩，久顕ト築地小劇場ニ国性爺合戦[189]ヲ見ニ行ク。曇。

二十□（五）六日　朝，久顕ト帝展ヲ見ニ行ッタガ，トテモ見キレズ，午過ギニ帰ッテ来タラ，惣チャンカラ葉書ガ来テ居テ，山口サンノ連中ガ明日三里塚ニ遠足スルカラ招待スル由，朝ガ早イカラ山口サンニ天気ニ拘ラズ宿リニ来ルヨウニト云フ事ナノデ，夕食後笹塚ニ行ク。処ガ明日ハ宇多チャンノ都合デ三里塚ニハ行カレナイ事ニナリ，惣チャンノ所ニ電話ヲカケテ，明日ハ笹塚ニ来て貰フ事ニスル。水村サンニ行ッテ十二時近クマデ話シ

コンデ……マダ明日行ク処ハハッキリキマラナイガ，兎モ角午頃カラデナケレバ出ラレナイノデ，鎌倉アタリニ行ク事ト一先ヅキメル。

二十七日

イイ塩梅ニ晴レル。惣チャンモ九時ニハ来ル。宇多チャンモ十時ニハ帰ッテ来ル。デ水村ノ園チャント五人デ十一時三十七分ノ汽車デ鎌倉ニ出，大田和サンニヨッテ暫時シ，ソレカラ天園ニ登リ，夕方稲村ヶ崎ニ出，月ノ出ル迄七里ヶ浜ヲ歩ク，鎌倉カラ七時何分ノ汽車デ横浜ニ出，チャン町ニ自動車ヲ飛バシ，金陵デ支那料理ヲ御馳走ニナリ，十一時過ギ新宿デ皆ニ別レテ中野ニ帰ル。

久々デ皆ニ逢ッタ。
久々デよたノ多イピクニックヲシタ。
久々デチャン料理ヲタベタ。
久々デサワイデ久々デ労レタ。
昇サンニ活動写真ニ撮ッテモラッタガ，ウマク撮レタカシラン。
二十八日，今日ハ又スッカリ曇ル。朝，鎌倉ニ帰ッテクル。午後，荒木サンノオバサマガ久々デ子供達ヲツレテ見エル。

二十九日

曇。小雨。夜ニ入ッテ本降リ。

三十日

小雨，叔母様，小サイ子供達ヲツレテ東京ニ出ラレル。

三十一日

晴。

✓活ケシ菊ニ虻飛ンデ来テトマリケリ

発信　山口宇多子

十一月

一日

晴。

二日
雨。ヒドク寒ク，夜ニ入ッテ暴風雨トナル。

三日
晴。午後，百合子，綾子ヲツレテ扇州園ニ行ッテ来ル。

四日
曇，晴。久元伯父様の十年忌に当るので，九時の汽車で出京，小石川へ行く。兄も弟も後から来る。
晩八時半，鎌倉に帰ってくる。

五日
晴。午後，海辺に行って一時間ばかり寝転んでくる。

✓活ケシ菊ニノウノウトキルアブラムシ賢シラ知ラヌ鈍(オゾ)キシ善キモ

六日
晴。
✓蟷螂の蜻蛉とり食(く)ふや菊の上

受信　三沢寛

七日
小雨。夕方晴レル。
受信　山口宇多子

八日
雨，後南風となり，ぬくぬくと蒸して来る。夜は嵐のようになる。
発信　英子。

九日
小雨，後晴ル。暖カ。夕食前，逗子道ノ方ヲ散歩。

十日　御大礼。
晴。雲多シ。午後，川上の叔父様と，綾子をつれて八幡様で万歳。

十一日　日曜日

曇，晴。午後ブラット家ヲ出，逗子道ヲトンネルヲヌケテ小坪ヘ出，海岸ニ出テ，材木座ノハナヲ廻ッテ鎌倉ニ入リ，裏道カラ山ヲ越エテ文化村ノ上ニ出，山ヲオリテ逗子道カラ帰ッテ来ル。

十二日

曇。ヒドク寒イ。午後，叔母様，道隆をおいて東京に出られたので，晩までお守り。

十三日

曇，後雨。本物の寒さ。居間に火鉢を入れる。

受信　中井惣之助。

十四日

晴。暖カシ。ヌクヌクト暖カシ。

十五日

雨。朝暖カク昼寒ク，夜ニ入ッテ再ビヌクヌクト暖カイ。綾子，道隆ノ七五三ノ御祝ヲスルノデ，川上ノ叔父様ヲ晩飯ニオ招ギスル。昌生叔父様モ夕方帰ラレタノデ，賑カナ食事ガ出来ル。

十六日

曇。暖。夕食前一時間程，八幡様から御用邸[190]の方を廻ってくる。風がひどい。

十七日

曇。寒。夕食前一時間程散歩。晩，叔父様帰って来られる。

十八日　日曜日

雨。午前中，川上のオヂサマが見える。午後，叔父様，叔母様と花を引く。

受信　英子。

十九日

雨。真暗で不愉快な日，

二十日

晴レテ気味ノ悪イ程暖カイ。昭子ガ四五日前カラ病気デ寝テ居ルノデ，オモチャヲ買

ヒニ長谷ノ方マデ出タノデ，ブラブラ大仏ノ裏道ヲ浅間社マデ行ッテ来ル。

二十一日

晴。

二十二日

晴，暖，午後四時頃から川上のおぢさまに誘はれて北鎌倉まで古道具家を見に行く。
〔欄外に記す〕
［大橋氏訪問］

二十三日

晴，一時曇。寒シ，夕食前散歩。

二十四日

晴，一時曇。

二十五日　日曜日

晴，暖。

午後，ぶら〳〵出て歩く。壽福寺に行って実朝，政子の墓を訪ね，一たん降りて，阿仏尼の墓の所から源氏山に登り，仮〔化〕粧坂の切通を佐助谷に降りて帰ってくる。

夜遅く山本氏が来られる。

二十六日

晴，暖。夕方，川上ノオヂサマト北鎌倉ニ行ク。

二十七日

晴。風寒シ。

過日雑々。

✓白壁ノ南日(ヒナタ)ヤ菊ト赤トンボ

✓赤蜻蛉此頃飛バズ菊不出来ナリ

✓薄ワケテ行ク山道ニ人逢ヒヌ

✓山茶花ニ暮ルル冬日ヤ寺古キ

✓竹ニカランデ高々ト延(ハ)ヘシ烏瓜カナ竹ニツレテユルクユレテ居ル烏瓜カナ

✓頂ヨ一目ヤ合ヒノ山モミヂ

✓ウネウネト山ヨリニ添ヒテクダリケリ冬ニナル日ノ

✓頂ノ眺ヤ倚リシ石寒キ

✓コホロギノ声ノマヅシキ遅夜カナ

✓案山子モ今ハ要(イ)ラズト首落チタリ

✓鶺鴒ノ浮カレ叩キ居リ今朝霜ノ屋根

✓山道ノ急(キフ)ヤ落葉ノ乾キニ辷リオリヌ

✓梢透(ウレス)キシ(ケヤキ)欅(モミヂ)ノ黄葉今朝ハ和(ナギ)

✓明(アカ)ルケド影ソコ寒シ秋ノ水

✓水輪チサク過ギテ枯田ニ影カヘリヌ

✓秋ノ水タニシノ跡ニ入日哉

二十八日

曇。ヒドク寒イ。

二十九日

曇。ヒドク寒イ。

✓寒々ト聞イテヰル寺ノ鐘冬二楷

✓山茶花ヤ暮レテユク寺ノ冬日哉

三十日

晴レテ暖カイ。

昭子ガマダ直リキラナイノニ，晩方ニナッテ道隆ガ熱ヲ出シ，上野サンニ診テ貰フ，

十時過吐瀉二回。

心アリテ詠メル

✓鵯サヘニ冬山トヨメネ鳴クゾニ吾(アレ)ハモダ居リテ有リガテヌカモ

✓木枯冬日暮ルルナベ家雀イ鳴クシ聞ケバマ悲ミカモ

✓大空ヲイ渡ル冬ノ月スラニ有(ア)リ有(サ)ルモノヲ独リヲ離(カ)レテ

十二月

一日

晴レ。暖。

晩，久顕ガ来ル。

二日　日曜日

朝七時四十九分ノ汽車で久顕ト，秋庭サンノ武チャン，千代チャンヲツレテ横浜ニ行キ，観艦式ノ予行ヲ見ニ，九時ノランチデ山城ニユク。ドンヨリ曇ッテコゴエル様ニ寒イ。午食後ニ里見弴[191]氏ガ来テ居ラレタノデ，一緒ニ皆デ艦内ヲ見，四時十二分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。久顕トハ横浜デ別レ，夕方ニナッタノデ一寸秋庭サンマデ子供達ヲ送ッテユク。

晩，雨ニナル。ヒドク寒イ。

十日　記ス。

三日の日，どうにか雨が止んだので，夕方，東京に出る。

四日の日，昼前，四谷の敬チャンの処を尋ね，一緒に銀座まで出，銀座で別れて，神田の本屋を見，小石川へ行ったが，叔母様お留守なので，帰り，三沢の処に寄る。

五日，英子の処の荷造など手伝ひ，夕方，久顕と築地に行く。ひどく寒い。

六日，□(朝)午後，三沢の処に荷物を送り出して置いて，日本橋の十五銀行までゆき，夕方，三沢の処に行く。一緒に新宿に出，久々で夕飯を一所(緒)に食べる。

七日，久顕の荷物を出して，一緒に夕方鎌倉に帰ってくる。久顕も今日から鎌倉に住むことになる。

八日

九日，久顕ト茅ヶ崎ニオ墓詣リニ行ク。

十日，今日，昌生叔父様，神威[192]の新艦長でアメリカに発たれる。十一時三十分の汽車で北鎌倉に大橋氏を訪ねる。

十一日

曇。夜小雨。

九時八分の汽車で東京に出。内閣に行って南洋庁出張所に伏田官房主事を訪ねたが，今度パラオ支庁長にかはられたさうで，出京されなかった由。四谷に出，与志チャンの処に行く。夕方，小石川に一寸行き。五時半に銀座の彩華に行く。佑サン夫妻が呉に〔赴〕附任して今夜発つので，佑サンのお招きなのだ。久顕も来た，兄上も来た。それから，お玉様と百合も来た。九時二十五分の汽車で発つのを見送り。久顕と十時八分の汽車で鎌倉に帰ってくる。

十二日

曇，寒。午，北鎌倉に行き，大橋氏に面談。

十三日

曇，寒。

十六日　記ス

十四日　晴レタノデ東京ニ出ル。与志チャンヲ訪ネ，夕方一緒ニ小石川ニ行ク。一緒ニ銀座ニ出。食事シテ別レ，大森ノ兄ノ処ニ行ク。保チャンガ来テ居ル。雨ニナル。

十五日　雨ニ降ラレテ籠城，

十六日　晴レタノデ，午過ギ，保チャント一緒ニ出。鎌倉ニ帰ッテ来ル。保チャンハ菊名ニ行ク。

十七日

午前中ハ晴レテ暖カカッタガ，午後ハタチマチ曇ッテタチマチ寒イ，夕方雲ハ薄ライダガ，寒サハ益々寒イ。

発信　愛子叔母様，土方与志，三沢寛，譲二叔父様。

十八日

晴，夜ニ入ッテ烈風。

受信　三沢寛。

二十一日　記ス

十九日　風ツメタクヒドケレド出京，四谷ニ行キシガ，久敬留守。小石川ニ行ク，叔母様御留守ナノデ，三時頃，彫刻ヲ二ツ持ッテ上野ノ第一会陽館ニ中井ノ惣チャンヲ訪ネ，日暮方小石川ニ帰ル。宿ル。

二十日　十時半頃，四谷ニ行ク。暫ラクシテ薄田研二君，高松君ガ来ル。与志チャント一緒ニ小石川ニ行ッテ本ヲ見ル筈ダッタガ，駄目ニナリ，自分ダケ四時頃，小石川ニ行ク。叔母様ニオ逢ヒシテ一時間余シテ，二三ノ彫刻ヲモッテ玉川ノ中井ノ良サンノ処ニ行ク。宿ル。

二十一日　晴，寒イケレドモ静カナ日ニナル。十時過ギニ青木茂君ガ遊ビニ来ル。青木君ガ花ヲ造ッテ居ル事ハ知ラナカッタ。一緒ニ賑ヤカニ昼飯ヲ食ベテ青木君ハ帰ッタ。三時頃カラ，良サン，園子サン三人デ裏ノ山ノ方ヲ一廻リシテクル。夕方オ暇スル。良サン，園子サンガ一緒ニ玉川ノ堤ヲ停車場マデ送ッテクレル。溝ノ口カラ川崎ニ電車デ出テ，七時過ギ鎌倉ニ帰ッテクル。

二十二日

晴，寒。午後，久顕ト子供達ヲツレテ，カラコ屋マデ行ク。

二十三日

晴。風烈シケレド暖シ。

二十四日

晴，夕方ヨリ雨。ヒドイ雨ニナル。

二十五日

曇，後晴。道隆又悪クナル。

二十六日

曇後晴。発信　中沢佑。

受信　上原寿造氏。

二十七日

晴，午後，久顕ト昌道ト長谷ノ方ニ出ル。

発信　上原寿造氏，

二十八日

晴，時々曇リ。

二十九日

朝雨。ヂキヤミ，晴レル。

三十日
晴，雲アリテ時々曇ル。受信　英子。

三十一日
晴，時々曇リ，夜ニ入ッテ雨。年賀状六十枚程出ス。

昭和四年

元日
叔父様もお留守，川上のおぢさま〔親　恒〕と嶌村のをばさま〔米子〕が午後見えただけのお正月。梅子叔母様と久顕と三人で花を引いて遊び，夜は子供達を相手にすごろく，投球盤，朝，八幡様へお参り，万歳もお猿もおししも来ない。

二日
晴，風冷タク烈シ。

三日
晴，九時五十五分ノ汽車デ東京ニ出ル。四谷デ乗〔ママ〕リ，与志チャンノ処ヲ訪ネル。午後，敬太チャンヲツレテ小石川ニ行ク。宿ル。

四日
晴，後曇リ，寒サハゲシ。十一時二十五分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。

五日
晴，午後曇，

六日　〔欄外に記す〕［日曜日］
晴。風烈シケレド冷タカラズ。午後，孝雄〔上原〕サンガ来ル。

七日
晴。午後，小城ノヲバサンガ通チャンヲツレテ来ル。

八日
晴，寒

九日
晴。朝，横須賀ノ歯医者ニ行ク。
受信　江波知彰。

十日
晴。朝, 歯医者。夕方, 島村ノ捷〔捷三郎〕チャンガ来ル。一緒ニ御飯ヲ食ベテ, 九時頃帰ッテユク。
発信　土方与志，大橋慶竜氏。

十一日
晴，　受信　三沢寛。

十二日
晴。歯医者。　受信　三沢寛。江波知彰。

十三日　［日曜日］〔欄外に記す〕
晴。午後風烈シクナル。寒クハナイ。歯医者。

十四日
晴。午後カラ夜ヘ，ヒドイ風トナッタガ，暖カイ。歯医者。

十五日
晴。ヒドイ南風デ，馬鹿ノヨウニ暖カイ。歯医者

十六日
晴。ヒドク寒クナル。歯医者。

十七日
晴。トンデモナク寒クナル。午後，曇ッテ来テナホ寒クナル。歯医者。

十八日
曇，晴。歯医者

十九日
曇。午後オ祝物ヲモッテ古〔小〕城サンマデ居〔ママ〕ッテクル。

二十日　日曜日
晴。午後，竪山サンガ見エ四時頃マデ遊ンデ帰ラレル。

二十一日
曇。寒イ。昌道風邪，就床。午後，歯医者。

二十二日
晴，一時曇。歯医者。

二十三日
晴。受信　上原寿造氏。

二十四日
晴。歯医者。
午後四時ヨリ，内々ニテ祖父様〔柴山矢八〕ノ五年祭。
倉沢ヨリ転居通知。

二十五日
晴。午後，歯医者。今日デ歯医者終ル。
発信　上原寿造氏。
《上原氏ヨリノ便リニ，「寒気酷烈当地ハ零下二十度位……鶏卵ハ其ママノアイスクリームナドハシャレテ居マス。小供等ハスキーニスケートニ，老人ハストーブニ齧リツイテ……」》

✓道ノ奥ノ盛岡ノマ冬ハ一度逢ハムガネ，卵子スラコゴルトフ冬ハ一度逢ハムガネ

マ卵子ハ卵子ノママニコゴルトフトコゾ，人サヘハ人ナリナリニコゴルトハセズカスダマスム盛岡ノ里ノ冬ノ冬ゴモリ，スキースト子等ハ盛(サカ)レド翁(ヲヂ)ガ冬ゴモリ

二十六日
晴。午後風荒レタレド寒カラズ。
受信　金子九平次。

二十七日　〔欄外に記す〕［日曜］
晴。夕方雲多シ。午後，師範学校ノ絵ノ展覧会ニ百合子ヲツレテ行ク。

二十八日

曇，午後雪，夕方止ム。

二十九日

曇。昼間チラチラ雪ガミエタガ，ヂキ止ム。

二月

十日記ス。先月末三十日午後東京ニ出ル。天気都合ヨク，十日程ノ間一日モ雨ニ合ハナイ。簡単ニ思ヒ出シテ歩イタ処ヲ記ス

✓三十日　午後二時二十分ノ汽車デ東京ニ出ル。先ヅ四谷ニ行キ，翌朝訪ネル様云ヒ置イテ，落合ニ倉沢ヲ訪ネル。倉沢病気，玄関デ辞シ東京駅ニ忘レモノシタノデ取リニ行ク。大森ニ六時半頃行ク宿ル。オ玉様ガ来テ居ル。十時頃東久世ノ忠チャンガ来ル。十二時頃兄ガ帰ッテ来ル。

✓三十一日　九時過ギ，兄ト一緒ニ出ル。大井町デ下車，橋口ノ謙チャンヲ訪ネ，兄ト別レテ四谷ニ行ク。午頃，田辺サンニ行キ，晩九時半頃笹塚ニ行キ，山口サンニ宿ル。

✓一日　午後，倉沢ヲタヅネル。上田サント云フモデルガ来テ世話シテクレテ居タノデ，倉沢モ大変イイ。夜，モデルサンヲ駅マデ見送リナガラ出ル。倉沢ノ処ニ泊ル。

✓二日　午後五時頃，小石川ニ行キ宿ル。叔母様，久保田サンノオ通夜デ疲レテ休ンデ居ラレル。

✓三日　約束ダッタノデ，十一時頃，梅〔土方梅子〕サンガ敬太チャン，与平チャンを〔ママ〕ツレテ来ル。宿ル。久保田ノ安チャンガ加減ガ悪クテ来テ就床。

✓四日　夕方，田辺サンニ行キ宿ル。

✓五日　朝一寸四谷ニ行キ，小石川ニ行ク。久保田ノ安チャン帰ル。宿ル。

✓六日　朝，□□□〔小石川〕四谷ニ行キ，翌々日小石川ニ来テ貰フ約束ヲシテ多摩川ニ行キ，良サンヲ訪ネル。多摩川カラ奥沢ニ金子君ヲ訪ネ，夕方良サンノ所ニ帰ル。宿ル。

✓七日　夕方，田辺サンニ行キ，宿ル。

✓八日　小石川ニ行ク。電話ガ来テ朝十時ノ約束ガ晩七時ニナッタノデ，本郷ニ出，郁文堂ニヨリ，翌朝来テ貰フ様ニシテ，江波ノ留守宅ヲ訪ネル。シバラクシテ知治サンガ帰ッテ来，シバラクシテ小沢君ガ遊ビニクル。夕方マデビールヲ御馳走ニナッテ，小石川ヘ行ク。敬チャン夫妻来テ居ル。一時近ク，与志チャン達帰ル。宿ル。

✓九日　朝十時過ギ郁文堂来ル。午後，築地ニ行ク。与志チャン稽古デ合〔会〕ヘナイノデ，小山内氏ノ追悼口演会ヲキイテ待チ，夕方一寸敬チャンニ会ッテ，五時五十七分ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテクル。叔父様帰ッテ来テ居ラレル。

受信　倉沢量世，三沢寛，木内五郎。

今日,天気ヨケレド時々曇ル。午頃,急ニ曇リ,雪降ル。ヂキニ止ム,後再ビ暫ラク降雪,ヂキ止ム。

発信　倉沢量世，三沢寛，中沢佑，兄，与志。

十一日　紀元節

晴，時々曇。

十四日　記ス。

十二日　九品仏ニ川上ノオヂサマ〔親恒〕ヲ訪ネル，御留守ダッタノデ晩マデマチ，宿ル。曇。夜ヒドイ風。

十三日　朝，四谷ニ与志チャンヲ訪ネ，郵船会社ニ行ッテ，水谷ノ仲チャンニ逢ヒ，牧氏ニ紹介サレル。ソレカラ倉沢ヲ訪ネル。倉沢トオ別レニ浅草ニ出，酒ヲ飲ム，倉沢ノ所ニ宿ル。

十四日　晴。朝，与志チャンヲ訪ネ，田辺サンニ行ッテ印ヲ借り，日本橋ノ川崎第百銀行ニ行ク，田辺サンニ帰リ，三時半ノ汽車デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。

十五日

晴，寒。発信　川上親恒,

十六日

晴，昼，小坂小学校ニ大橋氏ヲ訪ネル。ポツポツ荷物ヲツクリニカカル。

十七日

晴，後曇。

十九日

十七日ノ夜カラ雨ニナッテ，昨日昼スギマデ降ッタ，雨仕度デ昼頃九品仏ニ川上ノオヂサマヲ訪ネ，川上ノオヂサマト二時半頃小石川ニユク，与志チャン夫妻モ来テ居タ，カタヅケ物ヲシテ晩御飯ヲ御馳走ニナッテ，晩九時過ギ，九品仏ニ帰リ宿ル。今日ハヨク晴レタガ大変ナ風デ，空ハ埃色ヲシテ居ル，昼前鎌倉ニ帰ッテクル。鎌倉ハ風ガ吹カナイ。

二十二日

二十日，朝九時八分デ上京。四谷ニ与志チャンヲ尋ネル。午スギ田辺サンニ行ク。トマル，発信，川上親恒。

二十一日，朝十時二十分ノ汽車デ市川ニ，青田サンヲオ尋ネスル。二時二十分デ帰リ，小石川ニ行ク，トマル。

今日晴レテ馬鹿ニ暖カイ。午頃，郵船会社ニ行キ，水谷君ニ逢ヒ，十二時四十五分デ鎌倉ニ帰ッテ来ル。

発信　金子九平次，江波知彰，三沢寛，荒居徳亮。

二十三日

晴，ヒドク暖カケレド風烈シ。

二十四日　日曜日

曇。風烈シ。十時頃，荒居ノ徳サント三沢ノ寛チャンガ来テクレル。イソミデ昼食，ブラ〳〵銭洗ノ弁天マデ行ッテ一廻リシテ帰ッテクル。ドンヨリ曇ッテ居ル上ニ風ガヒドイノデ，ウスラ寒クテ散歩ニハムカナイ，帰ッテカラ火鉢ヲカカヘテ花ヲヒク。夕食後，九時ノ汽車デ二人カヘル。

受信　川上親恒様

秋庭様ガ来テ下サッテ，オ餞別トシテ金拾円下サル。「コレハハンケチダヨ」トノ事，○秋庭様カラコンナニシテ頂イテ只々恐縮デアル。

二十五日

受信　金子九平次。上原寿造氏。

発信　東郷吉太郎氏。田辺氏。与志。兄。水谷仲吉。譲二叔父様。青田幸吾氏。三角泰。中沢夫妻。上原寿造氏。

晴，風烈シク，寒シ。

二十六日

発信　大橋慶竜氏。小石川ヲバ様。川上親恒様。

晴。風稍烈シ。午後三時過ギ。島村ノ伯母様ノ処ニオ暇乞ニ行キ，帰リ秋庭サンニ御礼乍ラ行ッテ来ル。

○方々カラノ心ヅクシ

与志チャン，旅費及ビ当座ノ生活費トシテ金参百円。

田辺サン，アンチピリン錠剤二瓶，煆製マグネシア一鑵，ゲンチアナ根一瓶，タオル半ダースニ添ヘテ金五円。

嶋村ノオバサマヨリオ餞別トシテ金十円。

青田サンノオヂサマヨリオ餞別トシテ金十五円。

誠ニ有難キ次第，誠ニ有難キ次第。

二十七日

受信　英子。三沢寛。

発信　三沢寛。東郷吉太郎様。倉沢量世。荒居徳亮。

晴。暖カ。

南洋行キ次第[193]。

×

小サイ時ハ暑ガリデモナカッタガ，寒ガリデモナカッタ。夏デモ裸ニナル事少ナク，冬デモ厚着ハシナイ方ダッタ。（コレハ今デモソウデアリ，或ハ小サイ時ヨリモ極端ナ位ヒデ，夏デモ肌ジュバンヲ脱イデ素肌ニ着物ヲ着ル様ナ事ナク，冬デモズボン下《ハク時ハ薄イモノニ限ル》ヲハイタリ，袖ノアルシャツヲ着タリ《大概ハ薄イ半袖ノメリヤスヲ一枚，或ハ二枚着テ居ル》スル様ナ事ハナイ）

ソレガ中学ヲ終ヘル頃カラダンダン寒ガリニナッテ来テ，今デハ一番嫌ヒナモノト聞カレル時ハ，誰ニダッテ言下ニ答ヘル。曰ク，寒イコト，曇リ日ト雨ト（但シ夏ノ夕立ト嵐トハ此ノ限リニアラズ，却テバリバリト来ル雷雨ナドハ好キナ方ノ一ツデアル）

寒サガ嫌ヒニナルト反対ニ，暑サガ段々好キニナッテ来タ。今デハ一年中ノ一番気持ノイイ時ト聞カレルナラバ，躊躇ナク七月半カラ九月半迄ト答ヘル。勿論梅雨時ノ様ナ暑サハイケナイ。

デ，少シフザケテ云フト，東京デハ一年ノウチ半分ハ確カニ私ニハ寒過ギル。ダカラ南洋ノ一年ハ私ニハ東京ノ二年分ニ相当スルトハ言ヘナイダローカ。ソレカラ，東京デハ一年ノウチ確カニ半分ハ曇ッテ居ルカ雨ガ降ッテ居ル。デ，合計スルト南洋ノ一年ハ少シ計算ガ変カモシレナイガ，私ニハ東京ノ四年ニ当ルコトニナルノデアル。

二十八日

曇。午頃カラ小雨降ッタリ止ンダリ。

発信　上原寿造氏。英子。

受信　小石川オバサマ。

南洋行キ次第[194]

×

始メテ南洋ニ行カウト思ヒツイタノハ，何時ノ事ダカ思ヒ出セナイ。ゴーガンノ「ノアノア」ヲ読ンダノハ余程古イコトダガ，最初ニ何ウシテ「ノアノア」ヲ買ッタノカ覚エテ居ナイ。誰カニソンナ本ノアル事ヲ聞イタカ，或ハ当時番町ノ家カラヨク神田ニ出

テハ古本屋ヲ訳モナク歩イテ居ルウチニ目ニツイタノカ。後ノ方ダトスレバ，ゴーガン著ト云フノデ買ッタニチガヒナイ。ゴーガンノ絵ハ好キダッタカラ，今デモ何ダカ好キダカラ。ダガ何故好キナノカハ一寸ワカラナイ。或ハ多分アマリニ自分カラ遠イカラカモシレナイ。実際ゴーガンヤルソーノ幻想？ト来テハ，私ニハトンデモナク遠クテ真似モ出来ナイシ，シヨウトモ思ヘナイ。兎モ角最初ノ「ノアノア」ハ地震ノ時ニ焼ケテシマッタ。其後又私ハ「ノアノア」ヲ買ッテ今デモ持ッテ居ルガ，二度目ニ買ッタ時ハ，私ノ中ニ多分「南洋」ガアッタラシイ。ソレニシテモ其後マタ別人ノ訳デ装釘〔丁〕ノ違ッタ「ノアノア」ガ出タ時又買ッタノハ，確ニ中ニ入ッテ居ル版画ガ欲シカッタコトヲ覚エテ居ル。コンナ訳デ「ノアノア」ハ私ニ「南洋」ト「土人」トヲ教ヘハシタカモ知レナイガ，私ヲ「南洋」ヘ引ッ張ッタノハ，全然別ノモノダッタ。何故ト云ッテゴーガンノ南洋ト土人トハ，私ニハ不向キナ夢ノ様ナソレラダカラ。

前後シテ私ニ親シクナッテ来タノハ，日本ノ古代文化ダッタ。先史考古学，先史文化史（勿論学ト云フ様ナ専門的ナモノデハナク，興味本意ナモノデアル）ヲアサッテ行クウチニ，私ハ又「土人」ニブツカッタノデアル。今度ハ夢ノヨウナ土人デナクテ，モットキタナラシイ本当ノ土人ダッタ。古代シベリヤ民ノ遺族達，南方支那ノアボリジンス，マレヨーポリネシア，インドネシアンス等々デアル。ソノ中デドレモ同ジ様ナ興味ノアルナカデ，南洋ノ土人ガトッツキ易ク思ッタノハ，全ク只々私ガ暑イノガ好キダカラデアル。

×

サテ，私ガ何モシラズニ美術学校ニ入ッタ時分ニハ，人並ニ卒業後ハ一度ヨーロッパニ行ッテナドト一寸思ッタ。ダガ卒業スル頃ニハ，ソンナ気ハマルデナクナッテ居タ。コレニ就イテハ云フト長クナルカラ，簡単ニシテ置クトシテ——私ノ個展ノ頃ニイクツカ変ナ展覧会ノ序トモナルベキモノヲ書イテ居ル。ソコデモ大分遠慮シテ書イテハアルガ，ドレモニ一寸ヅツハホノメカシテアル——兎モ角フランスニ行ク位ヒナラバ，南洋ノ土人達ノ島々ヲ一マハリスルカ，メキシコカペルーノ遺跡遺物ヲデモ見テ来ル方ガ面白イ位ニナッテキタ。

ホンキニナッテ南洋ニ行ク気ニナッタノハ，一昨年千九百二十七年ノ二月ノ末，私ノ個人展覧会ノ前日ニ母ノゼンソクノ最初ノヒドイ発作ガ起ッテ，暫ラク危険ナ状体〔態〕ガ続イタ時——ヒドイ雪ガ二度モ続ケザマニ降ッテ，私ト弟トデ変リ合ッテ徹夜シテハ寒暖計ノ下ラナイ様ニトストーヴヲタイタリ，母ノ寝息ニ心ヲツカッタリシタ——以後ダ。母ガ一先ヅ直ッタ時，私ハ真面目デ其ノ話ヲシタ。私ハ少シモ金ヲ儲ケナイデ，反対ニ使ッテバカリ居ル。私ト云フ人間ハ，東京ニ居テハ決シテ自分デ働ク気ニハナラナイ。ダカラ兎モ角モ南洋ニヤッテクレ。間違ッテモ南洋ナラ大丈夫ダ。ソコデ私ガ居ナクナッタラ，女中デモ置イテ楽隠居ヲナサラナケレバイケナイ。母ハ心臓病デ，腎臓病デ，働く事ガ何ヨリ禁物ダッタノデアル。

母ハナカ〳〵本気ニハ承知シテクレナカッタ。ト云フノガ，兄ガ人並ハヅレテ母ヲ母トモシナカッタカラ，私ガ居ナイトナルト何トモ心細カッタノニチガヒナイ。ケレドモトウ〳〵折レテ，何カ当テガアッタラ行ッテモイイト云フコトニナッタ。サテ当テト云ッテハ何モナカッタ。

×

私ハ表南洋[195]デモ裏南洋[196]デモカマハナイカラ，誰カ知ッテ居ル人ガ無イカトサガシ出シタガ，ソンナ人モナカッタ。ト忽チ母ガ亡クナッテ，私ハ鎌倉ニ来タ。

ポツポツ私ニ職ヲ世話シヨウトスル人ガアッタ。ケレドモ私ハ，モウ決シテ人ノ云フコトヲキカナカッタ。ソレコソ何カアテガアルナラバ表南洋デモイイ。ガ，タイシタアテガナイナラバ裏南洋ガイイ。殊ニ私ノ「先史」ヘノ興味カラ云ヘバ，何トシテモ裏南洋ガイイ。其ノ土俗ト其ノ伝説トハ，其ノ歴史ト其ノ文化トハ，キット私ニ尽キナイ興味ノ泉トナリ，飽キナイ研究ノ対象トナッテクレルニチガヒナイ。其上裏南洋ナラバ，最初ノ言葉ノ困難ヲスラ感ジナイデスム。私ハスッカリ裏南洋トキメタ。

×

最初ニ秋庭サンノオヂサマガ，石橋氏ヘ，ソレカラ東郷サンノオヂサマガ横田長官ヘ，ソレカラ大橋氏ガ伏田官房主事ヘト，照会〔紹介〕シテ下サッタ。

石橋氏カラハ三ヶ月目頃ニ返事ガアッテ，土木課ニ履歴書ヲ出シテ置イタガ欠員ガナイ。

横田長官ノ所ハアマリニ大処ナノデ，ウヤムヤニナッテシマフ。

東郷サンカラ大橋氏ニ紹介サレ，大橋氏カラ伏田氏ヘノ紹介ヲ得テ，内閣内ノ南洋庁出張所ニ行ッタ処，伏田氏ハ官房主事ヲヤメテ，パラウノ支庁長ニナッテ居タ。

話ガ馬鹿ニ遠イ。一度話ヲスルニ二ヶ月タップリカカル。コレデハ待チキレナイ。ソレカラ又紹介ト云フ奴ガ，取リツイデクレルノハ履歴書ダケダ。ソシテ私ノ履歴書ト来タラ，零ドコロカマイナスナノダカラ仕方ガナイ。公立学習院中等科卒業，官立東京美術学校卒業ト云フノダカラ，給仕ニハ使ヘズ，サリトテ何一ツ仕事ハ出来ナイト云フノダカラ，屑ヨリモヒドイ。

デ履歴書ハ全然止メニシテ，兎モ角モ出カケテ行ッテ膝ヅメニ談判スルコトトシ，破調ノ時ハ土人ノ仲間ニ入レテ貰ハウト云フ寸方〔法〕ニシタノデアル。其レ所デハナイ。実ヲ云ヘバ此ノ最後ノ土人ノ仲間入リト云フノガ，私の〔ママ〕最初ノ希望ナノダ。只ソンナコトヲ，アケスケ云ッタラ誰ダッテ本気ニナッテ止メルノダカラ，ウカ〳〵ト口走レナイノデアルガ，譬ヘ暫クハ何カ職ガアッタトシテモ，様子ガ呑ミ込メタ暁ニハ，我カラ引込ンデ土人ニナラウト云フノガ，モト〳〵ノ腹ナノダ。

処デモウ面倒臭クナッタカラヤメル。

三月

三日

一日　天気ヨク気味ガ悪イ程暖カイ，朝出京，田園調布ニ本田サンノオバサマ〔伊萬子〕ヲオ訪ネシタガ，御留守，祐天寺ニ廻リ小城サンニ行ク，午後，東大久保ニ出，千代子〔本田〕オバサマノ処ニ行キ，夕方中野ニ出，上原サンニ行ク，一泊，

二日，雨，ダンダン寒ク，夕方雨止ミ，風凍ル如ク冷タシ，朝，四谷ニ与志チャン夫妻ヲ訪ネタガ，二人トモ留守，郵船会社ニ行ッタガ，水谷君ガ来テ居ナイノデ東京駅ニ行キ，久顕ヲ待ツ，久顕来ズ，二時過ギ郵船会社ニカヘル，久顕間モナク告知板ヲ見テ郵船ニ来ル，二人デ丸ビルノ中ヲグルグルマハッテ買物シ，夕方郵船会社ニ三度行キ，切符ヲ受取ッテ京橋ニ出，銀座ヲ歩キ，久顕ト上海亭ニ行キ夕食，久顕九時ノ汽車デ鎌倉ニ帰ル，別レテ小石川ニ行ク，一泊，

三日，晴，寒サ酷シ，朝，四谷ニ行キシガ留守，大森ニ兄ヲ訪ネ，三時過ギ鎌倉ニ帰ッテクル。

受信　荒居徳亮，中沢英子，金子九平次，田辺保男，東郷春子，三角泰

○御餞別

千代子オバサマヨリ　金拾円

中沢サンヨリ　金拾円

小石川オバサマヨリ　金壱五円

昌生叔父様ヨリ　金五拾円，其他コマゴマシタ出発用意一切，梅子叔母様ガ心配シテ下サル。

誠ニ有リガタキ次第。

四日

晴。昼，小坂小学校ニ大橋氏ヲ訪ネ，紹介状ヲ貰ッテ来ル。

受信　東郷吉太郎様，譲二叔父様

発信　英子，金子九平次。

五日

曇天。

受信　佑サン。

六日

曇。朝，桜木町迄荷物ヲ出シテオイテ，午後三時十二分ノ汽車デ東京ニ出，郵船会社ニ水谷君ヲ訪ネル。兄上ガ来ラレル。三人デ夕方横浜ニ出，浜名屋ニテ九時頃ヨリ酒，

一時過ギ，水谷君ハ帰リ，三時頃マデ兄トノンデ居テ，スッカリマイッテシマフ。

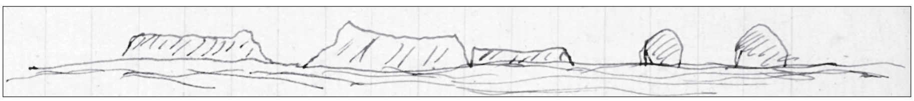
七日

九時過ギ，寝ムイ目ヲコスッテ乗船。曇。頭ガビン〱痛イ。来テクレタ人，兄，久顕，金子九平次。三沢寛。倉沢ノ代リトシテ木村君。

十時出航。昼食ヲ終ッテ後，二時頃カラ昼寝トスル。三時半ニ起コサレテオ茶。窓ノ外ニ伊豆七島ガ見エル。又ウツ〱寝ル。相カハラズ頭ガイタイ。

夕方，窓カラ大島ダロウカ，ソノ傍ニモ一ツ可成大キナ島ガ見エル。夕方アタリカラ大分ユレガヒドクナッテ来ル。食欲ナシ。夕食ヲ止メテ，八時過ギオ茶ヲ入レテ貰フ。夕方一時雨。大分シケテヰル。

四時頃入浴。



八日

朝ノコーヒー。ウマシ。

朝食マヅシ，一パイデヤメ。

島ナシ。アホードリ三四羽船ニツイテ飛ブ。

昼食，食堂ニ出ナイデパンダケ貰フ。マダ胃ノ腑ガジブ〱シテ居テ元気ガナイ。

午後，風ハ向ヒ風デヒドク当テルガ，天気ガヨクナッテ気持ガイイノデ，でっきニ出テ居ル。

晴レタガ雲ガ一面ニアル。東京デハ夏ガ近クナラナイト出ナイ雲ダ。

三時半オ茶。

六時半マデ船ノ人達ト麻雀ヲシテ遊ブ。胃ガ悪イノデ夕食ハ食ベナイ。

八時頃オ茶ヲモッテ来テ貰ッテ，ヂキ寝ル。

九日

晴。日ノ光ハドン〱強クナッテ五月ノヨウ。

元気ヨク腹具合モ直リ，朝カラ食事ガウマイ。昼前デッキ・ゴルフヲヤル。

午頃遥カニ小笠原島ガ見エ，三時半デッキデオ茶ヲ飲ンデ居タ頃ニハ，父島ハハルカニ過ギ，母島ガ真横ニ見エル。夕方再ビ島カゲナシ。

夕食後，全船ノサイパン[197]へ行ク沖縄ノ移民達ガ踊ヲ踊ッテサワイデ居タノデ，皆

デ見ニ行ク。

真暗ナ階段ヲ降リルト，船底ノ三等船室ノ臭気ガプント鼻ヲツク。薄暗イ電燈ノ下ニ，十五畳位ヒノ畳敷キノ低イ台ガアッテ，オ酒モリノ場所ニ当テラレテ居ル。男バカリ十五六人ガ台ノ三方ニ廻ッテアグラヲカイテ居リ，各ノ前ニハ湯呑ニ冷酒ガ置イテアッテ，時々手ニシテハ，肴ナシニ酒ヲ呑ンデ居ル。一人ガ琉球特有ノ蛇味線ヲヒキ，他ノ一人ガ片皮ノ小太鼓ヲウッテ拍子ヲトル。スルト別ノ一人ガ踊ル。他ノ連座ノモノハ歌ヲ唄ヒナガラ手ヲ拍ッテ調子ヲトリ，景気ヲツケル。

他ノ廓ハ二段ノ升座敷ニナッテ居テ，女達ハ此ノ升座敷カラ見物シ，小声デ唄ナドヲ合ハセテ居ル。女モ踊ルソーデアルガ，男ノ方ガ多ク踊ルラシイ。私達ガ見タ時ハ男バカリデ，女ハ踊ラナカッタ。

男達ハ誰デモ踊レルラシク，カハル〳〵ニ蛇味線ヤ太鼓モ持チマハシ，踊手モ相変リアッタ[198]。

十日　日曜日

晴，雲ハ多イケレドモ，日ガ昃ル程デハナク，六月ノヨウナ日ノ光ニ海ノ色ハ見タ事モナイ様ナ——チューブカラ出シタバカリノウルトラマリーン？ニナル。

午前，デッキゴルフ。

消防演習。

午後又，デッキゴルフ。

夜，麻雀，又，沖縄ノ踊ヲ見ニユク。

彼等ハ事ニツケテ踊ルラシイガ，特別ノ踊ノ期節〔ママ〕ハ五月四日五日ト旧ノ八月十五日——十五夜ノ晩ダソーダ。五月四日ニハ一村（漁村）挙ッテ盛ナ競舟ガアル。［コレハ，〔欄外に記す追記カ〕ベーロンデアロオ。パラオニモ，カベーケルノ競漕ガアル。］此ノ競舟ガ，何カノ神事儀式ニ起ッタモノデアルカドーカハ詳カデナイガ——私ニ話シタ若者ハ笑ヒナガラ，勝ッタモノニハ賞品ガアルノダト云ッタダケダッタ。——此ノ競舟ノ後，翌日ハ終日男女群集シテ海岸等デ踊ガアル。踊ハ一同揃ッテ盆踊或ハ歌垣ナドノ様ニ踊ルノデハナクテ，衆人ノ歌囃ノ中ニ一人一人出テ踊ルノダソーダ。踊リタイモノハ，四五日前カラ年上ノモノニ踊ヲ教ヘテモラッテ盛ニ練習スル。デ彼等ノ踊ハ色々アルガ可成リ技巧的デ，感興次第デ即興的ニ演ゼラレルモノデハナイ。彼等ハ全ク踊リガウマイ。私ガ最初ニ見タ踊ハ，支那楽ノヨウナ幾分哀調ノアル歌——シカシテンポハトテモ早イ。——ニ，賑ヤカナ囃ガ囃シタテ，踊手ハ長イ間ヲ初メカラ終ヒマデ軽イスタカトデスパニッシュ・ダンスノ或モノ，或ハ感興ノ権化ノヨウナ噪急ナジプシーノ踊ヲ思ハセルヨウナ踊ヲ踊ル。クライマックスガ来ル度ニ囃手ノ中カラ一□〔声〕斉ニピ，ピ，ピ，ピ，ピョピョピョピョト口笛ガソソリ立テル様ニナル。其レハ実ニ効果的デ，踊手ハ快クウカレテ，一段ト踊ニ

精気ガ加ハルノデアル。（コノ口笛ハ一本ノマゲタ指ヲ口ニクワヘテ吹キ鳴ラスアレデ，三人位ヒガ一斉ニヤルト随分苛立タシイ位ヒダ）

ソレカラ一人ノ男ハ女ニ扮シテ，或ル結髪ノヨウニ頭ニ布ヲ巻キツケ，余リヲ長ク後ニタレテ，シナヤカナ踊ヲ上手ニ踊ッタノヲ見タ。私ハ是レハ女ノ踊ヲ男ガ踊ッタノカト聞イテミタガ，ソレハ全ク男ノ踊リナノデ，女ハコレヲ踊ラナイトノ事ダッタ。コレハ面白イ事ダト思ッタ。

ソレカラ男ト女（扮シタモノ）トノ二人ノ踊リモアッタガ，コレハ男ガ女ノ所ニ忍ンデユク処ダト説明サレタ。ソレカラ或踊ハ荒々シイシグサデ，恐ロシイ顔ツキデ踊ラレタガ，コレハ仇敵チヲ踊ッタノダソーダ。

一般ニ彼等ノ踊リハ長イ叙事詩□□□□（ニツレテ）的ナ唄ニツレテ，其文句ノ内容ヲ踊リニ表ハシテ居ルヨウダガ，説明以上ニ叙情的ダ。コレハ□□□□□（日本ノイイ）内地ノイイ踊ト共通ナ点ヲモッテ居ル。彼等ノ踊リニハシッカリシタ型ガアル。ケレドモ彼等ハ型以上ニ情熱デ踊ル。彼等ハ実ニ踊ル時ハ一生懸命ダ。

ソレカラ一種変ッタモノトシテハ，歌ナシノ囃ダケニ合ハセテ，拳闘或ハ「カラ手」ノ型ヲ踊ルノガアル。日本ノ剣舞ノヨウデモアルガ，全然物語ハ含マレズ，力ト型トヲ叙実ニ表ハシタモノデ，色々ノ型ガアルラシク，三人程ノ人ガ変ル〳〵ヤッタガ，皆ソレ〳〵ニ違ッタ型デ，ドレモ皆真剣ナ恐ロシイヨウニ真面目ナモノダッタ。是レハ確ニ護身術ヲ覚エル為ノ「武器踊リ」トカ「喧嘩踊リ」トカニ属スルモノダ。

ソレカラ楽器，蛇味線ハ「ザイバ」ト云フ。太鼓ハ「テイク」。

十一日

曇，晴，曇，夜，小驟雨。

曇ッテ居ルノデ蒸シ〳〵ト暑イ，又夜ハ沖縄踊リ。今日カラ船員一同白服ニ着カヘル。

十二日

↘朝，サイパン着。上陸[199]，香取山ニ登ル。下リテカラガラパン（○○○○）ノ街ヲ一廻リシ，椰子ノ実ヲトラセテ飲ム。六時過ギ帰船。

〔欄外に記す〕
［発信　梅子叔母様，久顕，小石川叔母様，与志チャン，英子，田辺サン］

十三日

九時半上陸

東郷吉春様ノ御墓ニ詣ル。

瀏氏宅ニテ昼飯ノ御馳走ニナル。

海岸ノ日中，

カナカ[200] ノヨシジョー，椰子ノ水

マリア・アダノ家ニ三時半ニ行キ，四時ヨリ夕飯ヲ馳走ニナリ，五時ノランチデ帰船。

↖〇昨日ノ朝サイパンニ着イテ，十時頃ダッタロウカ，上陸シタ。大橋氏カラ紹介状ヲ貰ッテ居タノデ，手紙ヲ出シ乍ラ郵便局ニ瀏氏ヲ訪ネタガ，郵便物ガ沢山入ッタノデ非常ニ忙ガシクシテ居ラレタノデ，街ノ菓子屋デ簡単ニ弁当ヲ食ベテ，香取山ニ登ル事ニシタ。香取神社ト云フニ，敬意ヲ表シテカラ裏ノ山ニ登ッタノダガ，ドウヤラ道ヲトリ違ヘタラシク，散々登ッタ上句ウマイ処ニ達シ得ズニ，琉球人ノ貧弱ナ炭焼小屋ニ到ッタ。実ハ裏ノ海マデ見晴ラセル筈ダッタノガ，結局琉球人ニ案内シテ貰ッテ，背丈ヨリ高イカヤヲ分ケテ，漸ク一峯ノ頂上ニ出テガラパン街カラ築港ノ方ヲ一目ニ見下スコトガ出来タ。

暑サハ暑シ，モウ道ヲカヘテマデ登リツメテ，向ノ海ヲ見ル勇気モナクテ……アノ山マデ行ケバコーヒー畑ガアッテ，向フノ海マデ見エルトカ。此ノ裏ニハ，カナカノ土人達ガ鶏ヤ豚ヲ飼ッテ居ルトカ聞キナガラ下リ道ニカカッタ。下リキッテ再ビ街ニ出タ時ニハ，何トモ咽ガカワイテタマラナイ。カト云ッテ水ハ悪イシ腐ッタサイダーナドハナホイケナイ。土人ノ子供ガ二人腰ニ刀（シャルト云フノダソウダ）ヲサゲテ居ルノヲツカマヘテ，椰子ノ実ヲ取ッテクレトタノンデミタ。畑マデ行ケバアルト云フノデ，ガラパンノ街ハヅレマデツイテ行ッテ，椰子ノ実ニヤットアリツイタ。子供ハドン〳〵椰子ノ木ニ昇ッテ実ヲモギリ取ッテ下ニナゲ，今度ハ下リテ来テ飲メル様ニキヅツケテクレタ。何シロ咽ガカワイテ居タカラウマカッタ事。スッカリ椰子水党ニナル。

街ニ帰ッテ郵船ノ出張所デ，ランチノ出ル時間ヲキイタラ五時ト云フ。マダ一時間余モアルノデ，今度ハアベコベニ北ガラパン街ノハヅレマデ行ッテ，青草ノ蔭ニ一休ミ。

帰ッテ来タラ海浜ノ木ノ蔭デ，大キナ立派ナチャモロ人[201]ガカヌーヲ造ッテ居タノデ，行ッテ色ンナ事ヲ話シテ見タ。大変人ノヨサソーナ老人ダッタシ，女房モ優シソーナ人ダッタノデ，明日デモ昼食ヲチャモロノオ料理デ食ベタイト思フガ何ウダロウト相談シテ見タ処。ソレハ出来ルケレドモ，今ハ内ニ病人ガアル，私ノ母ガ病気デ寝テ居ルカラ一寸困ルト云フ事ダッタノデ，甚ダ残念ダッタガアキラメテ帰ッテ来ル。↘

十四日

朝，船ガ動キ出シタノデ目ガ覚メタラ五時半ダッタ，七時半ニハチュニアン[202]ニ碇ヲ下シタ。九時半ランチデ上陸。コレハ又途轍モナク暑クテ，今マデ何年カ無人島ダッタ処，此ノ一両年来又人ガ入リ出シタ所トテ，土人ハ居ズ，新開地気分デ一向面白クナク，牧場ガアルソーダガ，二里トキイテハ此ノ暑サニ堪エズ，巨石文化ノ遺跡ダケヲ写真ニオサメテ，ランチノ迎ヘニ来ルノヲ浜デ昼寝シテ待チ，二時過ギ帰船。

〔欄外に記す〕
［発信　瀏氏　東郷吉太郎様］

〔欄外に記す〕
［十三日］

↘翌日ハ，又朝上陸。一寸本願寺マデ行ッテ，東郷吉春様ノオ墓ニオ詣リシテ，南ガラパンノ街ニ降リテ来ル。前日，南ガラパンニ落チツイタ沖縄移民カラ聞イテ居タ，此ノ辺ノチャモロノ金持ノ家ノ前ヲ通ッタラ，ヴェランダニフィリッピン式ノ衣服［〔欄外に記す〕アノ蝉ノ羽ノヨオナ薄モノノ］ヲツケタ女ガ三人出テ居タノデ，下カラ声ヲカケテ，東京カラ昨日始メテ来タモノダガ，貴方ガタノ料理ヲ是非食ベタイト思フガ，食ベサセテ貰ヘナイダロウカトキイテ見タラ，オ昼ハ間ニ合ハナイカラ，午後四時ニ来テクレトノ事，有ガタイ！［〔欄外に記す〕松岡氏ノチャモロ語ノ研究ヲ読ンデイタノダガ，コレワトテモ役ニタタナカッタ。ソレヨリモ，若イ者ワドオニカ日本語ガ通ジタシ，年輩者デモカタコトノ日本語ヲ何トカ］　始メハパンノ実ヲ焼イテ貰ヒ度イト思ッタノダガ，少シ時期ガ早クテマダパンノ実ハ充分大キクナラナイカラ，オ芋デヨケレバ拵ヘヨウト云フ。聊カ悲観シタガ，宜シク願フト云ッタラ，オカヅハ何ガイイカト云フ。ソレコソ貴方ガタノ食ベルモノナラ何デモイイ，只ナルベク貴方ガタ本来ノ料理ヲ食ベタイノダカラト，四時ニ再ビ訪ネル様ニ約シテ，郵便局ニ行ッテ瀏氏ニ逢ッタラ，是非昼飯ヲ一緒ニ食ベタイカラトノ事，有ガタクオ受ケシテ小使サンニ案内サレテ，一足先キニ瀏氏ノ家ニ行ク。奥サンニ始メテ合ッテ，ビールトオ寿司ヲ御馳走ニナッテ居ルト，間モナク瀏氏モ帰ッテ来ラレ，色々ナ話ナド聞キ乍ラ，二時□□（過キ）頃マデオ邪魔シテ辞シテ，随分暑カッタケレドモ，オ腹ヲ少シヘラサナイト，アトニチャモロ料理ガ控ヘテ居ルト云フノデ，海岸ヲ照リツケラレ乍ラ歩イテユク。

舟庫ガアル。舟庫ガアル毎ニカナカガ五六人寝コロンダリ話シタリシテ居ル。一寸休ンデユク。例ノカヌー（ワ）ガ大小幾ツカアル。三ツメ位ヒノ舟庫デ休ンダ時，日本語ノ上手ナカナカガ居タ。名前ヲ尋ネタラ，病院ノ院長サンガ吉丈（ヨシジョー）トツケテクレタ。ヨシジョート云ヘバ，此ノ辺誰ニデモ知ラレテ居ルト。大正十四年，上野ニ博覧会ガアッタ時，東京ニ見物ニ行ッタソーデ，一番コワカッタノハ汽車ニノッテ山ノ下ノ穴ヲ通ル時ダッタソーダ。

暫クシテ，椰子ノ実ヲトッテ貰ヒニ畑マデ行ッタ。一ツハ畑デ飲ミ，一ツヅツオ土産ニモッテクル。吉丈ニワカレテカラ，三時半頃，朝約束シタチャモロノ家ニ行ク。マリア・アダト云フ人。［〔欄外に記す。追記カ〕コノ人ワ，チャモロノ一番ノ家柄デアリ，金持デモアリ，インテリデモアッタコトヲ，アトニナッテ知ッタ。］

四時カラ食事。唐モロコシノパン。□□□□（タピオカ）唐モロコシノ汁ニコプラヲシボリコンダクズ湯ノ様ナ飲物。オカズハ肉ノ煮コミ。牛ノ肝臓ノ煮タモノ。牛ノ心臓ノ焼イタモノ。三尺バナナト鶏肉ノ煮タノ。トマト魚ノ油煮。魚ノ椰子油上げ。三尺バナナノ煮タノ。オ芋ノフカシタノ。ソレト御飯。

大変ナオ料理ダッタガ，調味料ガ少ナイ為カ，ドレモコレモ淡味デ変化ニトモシイ。□□□□（タピオカ）モロコシ汁ハ何バイデモ飲メルヨウニポットニ沢山トッテアル[203]。コレハ何ト

モナイモノダガウマカッタ。モロコシノパンハ少シカタクテ食ベニクイ。ベイキング・パウダーデモ入レテ，少シフクラシタラオイシク食ベラレルダロー。二ツノ魚料理ト牛ノ心臓トハ中デウマイモノダッタ。此ノチャモロ家ノ趣味ハ一寸変ッタ，何トモ云ヘナイ趣味ダッタガ，コレハ又別ノ時書クコトニスル。満腹シテ辞シ，五時半ノランチデ船ニカヘッテクル。

十五日

晴。荷上ゲノ都合デ船ガ出ナイ。午食後，牧場マデ入ルツモリデ上陸シタガ，興発会社[204]デハ，ヤレ野牛ガ出テ危険ダノ，ヤレ時間ニ遅クテ駄目ダノ，ヤレ何ダノカンダノ，結局オ止メニナッタ方ガイイト，ドウシテモ牛車ヲ出シテクレナイ。トウ〳〵予定ヲカヘテ，嶌ノ南端トッ先キマデ行クコトニシテ，一本道ヲ一時間半バカリ歩イテ，ヤットトッ端マデ出タ。途中ハ道ハイイガ，両側只密林デ何一ツ望メモナイ。一人ノ山男ガ木材ニ山豚ノ死ンダノヲシバリツケテ来タノニ逢ッタキリ。道々ヒョイ〳〵野鼠ガトビ出シタキリ。野鼠ハ人ガ居テモイクラモ逃ゲヨウトハシナイノデ，棒デブッタラ，コロリト死ンダ。巨石文化ノ遺跡ハ小サイモノダガ，道ノ両側ニ幾ツカアッタ。小鳥ハ林ノ中ドコニデモチチ〳〵鳴イテ居ル。五時半ノランチデ帰船。

〔ママ〕
十五日

晴，荷上ゲノ都合デ今一日チニアンニ泊ッテ居ル事ニナッタノデ，午後上陸，牧場ニ行クツモリダッタガ，興発会社デ何トカカトカ云ッテ牛車ヲ出シテクレナイノデヤメ。南ノ突端迄遠足。

十六日

十二時出航，

十七日

晴。午後三時半頃，近〔江〕海丸トスレ違フ。

十八日

晴。午前十一時，ヤップ[205]着。

上陸。プェバイヲ見ニ行ク。支庁長訪問。二時半ノ小蒸気デ帰船。三時出航。

〔欄外に記す〕
［プェバイハ山ニアルモノノ由，私ガ行ッタ海岸ノハファルト云フモノノ由。］

甲板客乗リコム。海ノ色テル・ヴェルト。

十九日

晴，後曇。午後二時パラウ[206]入港。

高松氏ヲ郵船社宅ニ訪ネ，夕方，邦人会ノ旅館部ニ紹介シテ頂ク。

二十日

晴。夕方驟雨。

昼前外出，鎌倉ニ安着ノ電報。

タッタ一軒アル素人写真屋ニフィルムノ現像ヲタノム。

十一時頃，外ノ喫茶店デコーヒートカステラノ中食ガ四十五銭ダッテ，馬鹿馬鹿シイ[207]。

昼，パラウ支庁[208]ニ伏田支庁長ヲ訪ネタガ，ウマイ話ナシ。一時頃マデブラ〳〵歩イテ宿ニ帰リ，写生帖ニ色ヲツケタリシテ日ヲ暮ス。

二十一日

驟雨小サク四五回。

朝，郵便局ノ舎宅ニ伊藤氏[209]ヲ訪ネ，高松氏ヲ訪ネ，一軒家ヲ借リル。家賃三十円。之ヨリ暫ラク自炊生活ノ予定，午後，自炊用器具並ニ米，味〔噌〕素ノ類ヲ買ヒ歩キ，夕方邦人会ヲ引上ゲテ新居ニ入ル。

〔欄外に記す〕
[家30円]

二十二日

○発信　本田正震，金子九平次，倉沢量世，三沢寛，上原寿造氏，久顕

□□□□□

今日ハ昼前頃，南洋庁[210]カラ使ガ来テ，支庁長〔伏田〕ガ会ヒ度イカラ暇ナ時来ルヨウニトノ事ダッタノデ，直チニ行ッテ見ル。別段ノ話モナカッタガ，本庁ノ書記官長ニ紹介サレ色々オ話シテ来ル。

二十三日

今日カラア・バイ[211]ノ絵ヲウツシニ行ク，午前モ午後モ行ッタケレドモ，ヤッテ見ルトナカ〳〵面倒デ少シモハカドラナイ，

夜，此ノ頃月ガイイノデ，コリヨル[212]ノ突堤マデブラ〳〵散歩スル。南洋ノ月夜ハ実ニ明ルイ。コンナダカラ，土人ガ夜ヲ徹シテ踊リ度クナルノモ無理ハナイ。ダガ可哀サウニ，此ノ頃デハ踊ル事ハ一切止メラレテ居ルノデ，彼等ハ黙々トシテ居ル。突堤ハ海ノ中ニ長く長く突出テ，凉ミニハモッテ来イダ。月ノ光デ浅イ海ノ底マデ見エル。向フ岸ニハ本島[213]ガハッキリ影絵ノ様ニ浮イテ静マリカヘッテ居ル。

十時頃帰ッテ来タラ，織本氏ガ一寸遊ビニ来タ。

二十四日　日曜日

朝，邦人会ニ行ッテ，上陸居住届ヲ書イテ貰ッテ，支庁ニ出シニ出カケタガ，日曜ダッタ事ニ気ヅイテ，郵便局ノ舎宅ニ伊藤氏ヲ訪ネ，昼前マデゴロ〳〵シテ来ル。午後午睡。三時半頃カラバイノ絵ヲウツシニ行ク。夕方，伊藤，織本氏一寸来ル。

二十□四五日

午前，南貿[214]ノ波〔止〕土場ヘ行ッテ木偶ヲスケッチシテ来ル。午後ハボートハウスヘ行ッテ，木偶ヲスケッチシテ来ル。

夜，オバックガボーイヲツレテ来ル。

〇発信　水谷仲吉。

二十□五六日

午前，突堤寄リノ他ノボートハウスニ行ク。

午後，邦人会ノ前ノ道ヲ真直グ向フ側ノ海マデ行ッテミル。何モナシ。引カヘシテ，ア・バイニ行ク。

晩，病院ニすげま氏ヲ見舞ニ行ク。

二十七日

何処デ間違ヘタノカワカラナイガ，今日ハ二十七日ダソーダ。新聞ヲ見ル事モナケレバ，務メモ約束モナイカラ，全ク閑カニナッテシマフ。

午前，ア・バイ。午後モ行カウト思ッテ居タラ，高松サンノ処カラ使ヒデ，今日山城ノ船長サン達ガ上ラレルカラ，遊ビニ来ナイカトノ事ダッタノデ，三時半頃出カケル。船長，機関長，事務長三人来テ見エテ居タ。オ風呂ヲ浴ビサセテ貰ッテ，皆デ賑カニ夕食ヲ御馳走ニナッテ，九時過ギ帰ッテ来ル。

マンゴステントト云フモノヲ始メテ御馳走ニナル。

二十八日

午前，バイ，午後，少シ早クア・バイニ行キ，四時ニ帰リ，ソレカラ今見昇氏ヲオ訪ネシテ，六時頃パパイヤヲオミヤゲニ頂イテ帰ッテクル。夜ハ，織本氏ガ来テ十一時近クマデ話シテ行ク。

二十九日

午前，午後，バイ。夜，高松氏ノ処ニオ風呂ヲ浴ビニ行キ，帰リニ佐久間氏[215]ヲオ

訪ネスル。丁度今見氏モ来ラレ，九時頃マデ居テ帰ッタラ，織本氏トオバックトガ遊ビニ来テ居タ。

三十日

午後四時頃，昌南倶楽部[216]ニ展覧会ガアルト云フノデ行ッテ見ル。三人シカ出品者ガナイガ，素人バナレガシテ居ル。今見氏ガ居ラレ，松尾氏，平島氏ニ紹介サレル。

今日ハバイハ止メニシテ，家デ絵具ヲツケタリナドスル。晩ハ『ミクロネシヤ民俗誌』[217]ヲ出シテ，パラオノ部ヲポツ〳〵シラベタリスル。

三十一日　日曜日。

十時頃カラ高松氏ノ処ニ行キ，オ昼前マデ喋リコンデシマフ。午後，ア・バイ。

四月

一日

此の節，乾燥期ニ入ッタソウデ，先日来，日ニ二三度ハ雨ガ来テモ，パラ〳〵ト降ッテ二三分モスルト止ンデシマッタガ，今朝ハ一時間余モ豪雨ガアッテ，タンクノ水ガ忽チアフレル。

二日

朝ノウチ一寸ア・バイニ行キ，オ昼前ニ支庁長ヲ訪ネ，就職口ヲオ願ヒシテ来ル。ドウモマルデウマイモノガナイラシイ。ウマイ口ドコロカ，何ニモナイラシイ。長官ガ帰ッタラ，何トカト云フノモ――兎モ角，六月デナケレバ，長官ハ帰ラナイノダソーダカラ，トテモ待チキレヤシナイ。□□□□□

四時半頃，佐久間氏ヲ訪ネ，本島行キノ日取ヤ用意等ヲ尋ネ，高松氏ノ処ヘ行ッテ，オ風呂ヲ御馳走ニナリ，夕食マデ御馳走ニナル。

七時頃カヘリ，直グニ公学校[218]ノ寄宿舎ニ平島氏ヲ訪ネル。寄宿舎ヲ見セテ貰ッタガ，丁度復習時間ガ終ッテ，アト二十分程デ八時ニ消燈ナソーデ，大キナ板敷キノ部屋ノ周囲ニ一枚ヅツアンペラ[219]ヲギッシリヒキナラベテ，毛布ヲ一枚ヅツ用意シテ，寝ル用意ヲシテ居ル，小サナ小供達ガテンデンニカイバクル[220]ヲ持チコンデ，騒イダリフザケタリシテ居ルガ，コレデケガヲシタリスルモノガ全クナイノハ不思議ナ程ダト，平島サンハ云ッテ居タ。

女子ノ方ハ数モ少ナイガ，ズットシヅカデ，アンペラノ上ニ横ニナッテ本ヲ見テ居ルモノモアレバ，日本ノオ手玉ヲシテ遊ンデ居ルモノモアル。明後日ハ，朝カラ授業ヲ見セテ貰フヨウニ約シテ，九時頃帰ッテクル。

三日

神武天皇祭。雨二三回，雨量相当アリ。

朝ノウチ平島サンガ見エテ，オ昼マデ話シテ行カレル。午後ハ本島行ノ用意ノ為，荷物ヲアケタリシメタリ，夕方，郵便局裏ノタンクニ湯ヲ浴ビニ行ク。伊藤氏又下痢デ寝テ居ル。晩，オバックガバナナヲモッテ来テクレル。後カラパラオモ来テ十時頃マデ居ル。

四日

朝，公学校ヲ参観ニ行ク。

本科三年ノ国語，本科二年ノ修身，補習科一年ノ読方ヲ見テ十時ニ帰リ，昼前支庁長ヲ訪ネ，金井氏ヘノ紹介状ヲ貰ヒ，履歴書ヲ出シテ来ル。

午前一寸ア・バイニ行キ，三時過ギ平島氏ガ生徒達ヲ四人寄越シテクレタノデ，本ヲモッテ平島ノ処ニ行ク，驟雨。止ミ間ニ帰ル。

夕方ヨリ豪雨，夜マデ止ンダリ降ッタリシテ居ル。晩，杉浦[221]ト云フ大工サンガ訪ネテ来テ，十一時頃マデ話シテ行ク。何デモ彫刻ガ好キデ好キデ仕方ガナイカラ，弟子入リサセテクレト云フノデアル。私ダッテ木彫ハ少シモ習ッタワケデハナシ，マア一緒ニ研究シヨウト云ッテヤル。

大工サンノ話シハナカ〳〵尽キナイ。

大工サンノ親方ノ話。親方ハエライ人ダッタ事。村デノソノ一人者ヲ呼ビステデ呼ブ年トッタ木鼻彫リノ名人ガ居タ事。

大工サンハ，年期ガアケルト南洋ニ飛ビ出シテ，大工ハソッチノケニシテ金儲ケニカカッタ，多少ノ成功モアッタガ，同ジ以上ノ失敗モアリ，表南洋マデ出カケテ見タガ，結局仝ジ事ダッタ事。

金儲ト云フモノハ，アクセクシテユトリノナイモノデ，儲ケレバ更ニ儲ケヲ望ムヨウニナリ，間違ヘバ元ニカヘッテシマフ。ソレダケノ経験ガ残ルト云フガ，ソンナモノハ時代ガ一緒ニモッテ行ッテシマフカラ，仝ジ事ヲクリカヘシテモ駄目ダ。ソコデ金儲ケハキッパリ止メニシタ。芸術ナラバ後マデ残ル。決シテ，ヤッタラバヤッタダケデ元ヘハカヘラナイ。コレカラハ，一生ノ仕事トシテ彫刻ヲヤル気ヲ，シッカリト決メタ処ダ。マダ遅クハナイ。

モウ南洋ニ来テカラ十二三年ニナルガ，其ノ間実ニ何デモヤッタ。田舎デハ何ト云ッテモ金ガヤカマシカッタノデ，金儲ケヲスル気デ随分悪イ事モシタ。密猟モ何年カヤッテ，罰金ダケ〔ママ〕モ二百五十円カラオサメタ。ダガ人ノ目ヲヌスンデヤル仕事ハ，決シテヨソカラ考ヘルヨウニ儲カルモノデハナイ。信用ハ落ス，真面目ナ仕事ニハ遠クナル。商売ト云フモノハ兎角人ニ悪マレル。尤モ全ク悪イ事モヤッタノダカラ仕方ガナイ。最近ニナッテ目ガ覚メタ。金儲ケハ止メタ。元ノ大工ニカヘッタ訳ダ。

十二三年モ親方ニ逢ハナンダガ，淋シクモ恋シクモナカッタ。処ガ此頃ニナッテ，親

方ガナクナラレタ。ナクナッテ見ルト，自分ガ本当ニ頼ミニシテ居タノハ親方ダッタノダト云フ事ガワカッタ。コッチニ来テ，云ハバ出鱈目ヲヤッテ居ラレタノハ，何時何時デモイヨ〳〵ノ時ハ親方ノ処ニ帰レルト云フ安心ガアッタカラダッタノダ。親方ガナクナッテ見ルト，片腕ソガレタ様デ妙ニ懐シクテイケナイ。　［〔追記カ〕腕ヲモオチタヨウ］

大工サンノ話シハナカ〳〵尽キナイ。

五日

終日雨ガ降ッタリ止ンダリシテ居ル。時ニハ流ス様ニザン〳〵降ル。昼前一寸支庁長ノ所ニ行ッテクル。五時頃雨ガ降ッタガ，本ヲモッテ平島サンノ処ニ行ッタガ，夕食ヲ御馳走ニナッテバスマデ浴ビテ，八時頃帰ッテ来ル。

唐モロコシノユデタノ。ソレカラ，クダモノトケイノ上々。ソレカラ，御飯ノ時ハ鳩ノオ吸物。

サイパンニ上陸シテ以来，第一印象ノ消エナイ，何処ニデモアル真紅ナ花ハ仏桑華ト云フ由。

幹ト直角ニ枝ヲ張リ，枯枝ニパラ〳〵青イ実ヲブル下ゲテ居ルノガ，□□□樹綿ノ樹ノ由。
［〔欄外に記す〕カボック（キワタ）］

六日

終日雨降ッタリ止ンダリ。但シ豪雨ナシ。

タイクツダッタノデ，夕食前傘ヲサシテ一時間程歩イテクル。晩ハオバックニパラオ，暫ラクシテ三浦君，松本氏ガ遊ビニ来ル。

七日［〔欄外に記す〕日曜］

雲多ク時々パラ〳〵雨。朝八時半頃カラオバックト一緒ニアラカベサン[222]ニ行ク。波止場デオレアイ[223]嶌人ノセイリングボートヲツカマヘテ乗セテ貰フ。潮ガ引キカケテ居ルノデ，向岸マデ着ク事ガ出来ズ，一人々々オブサッテ渡シテモラウ。向フ側マデ歩イテソンソル人[224]達ノ部落ニ入リ，海岸デ椰子ノ実ヲトッテモラッテパンヲ食ベル。久シク休ンデ旧ノ道ヲカヘリ，途中カラ左ニ折レテ山ヲ登リ，山ヲ下ッテコロールノモノノ居ル辺ニ出，潮ガスッカリ引イテ居タノデ靴ヲヌギ，ズボンヲマクッテ五六町程モ海ヲ渡ッテ，病院ノ下カラ上ッテ帰ッテ来ル。

三時頃ダッタロウ。一寸昼寝シテ早メニ夕食。平嶌氏ガスケッチノ帰リトテ一寸寄ラレル。

晩，平嶌氏ノ処ヲ訪ネ，九時半頃帰ッテクル。

✓ゴムノ樹ノヨウナ葉ノ大木ガタマナノ樹ノ由。

仏桑華ノ土名ハカラマル。

八日

天気ヨクナル。雨，両三度。

午前中ブラ〳〵，午後モブラ〳〵，

夕方散歩，一時間程グル〳〵歩キ，木工学校[225]ノ裏ヲマングローブ林ノ中ニ下リ，貝一ツ二ツ拾ッテクル。

夕食後，浜武君ニ頼ンデ荷物ヲ高松氏ノ処ニ運ンデ了フ。寝ヨウカナド云ッテ居ル処ヘ十時頃，杉浦大工サンガヤッテクル。十一時半，消燈後三十分余モ話シテ居テ，十二時過ギテカヘル。

大工サンノ話ハ縷々トシテ，デハナクテ，ポツ〳〵トシテナカナカ尽キナイ。

タトヘバコンナ風ダ。

此ノ小ッポケナ南洋ト云フ処ニハ，儲ケル様ナ□事業ハナイ。ソリヤ金ヲタメルコトハココデハタ易ク出来ル。タメルト云フヤツハ，取ルモノヲ取ッテ使ハナイデ居レバイイノデワケハナイ。ソリヤ一万ヤ二万ノ金ヲココデジットタメルト云フ事ハ□(雑)造作モナイコトダ。ダガ，タメル迄シテ金ヲ持ツ位ヒナラ，金ナンカ持タナイデモ，ココデハ楽ニ食ッテ着テ住ンデユカレル。トコロデ儲ケトナルトチガフ。儲カレバソレモヨシ，儲カラナクテモ，事業ト云フモノニハ身ガ入ルモノダデ，愉快ニ事業ガヤレレバ儲カラナイデモ，結構五分五分ニハ思ヘルダ。ダガ全ク此ノ裏南洋ニハ儲ケルト云フモノハ無イ。ワシハコレデ此ノ十年余モ，商売モヤッテ見タ，開墾モヤッタ，真珠ノ培養モヤッタシ，会社ニツトメテモ見レバ，□□高瀬貝ノ密漁マデヤッタガ，全ク十年間ト云フモノ，腹一杯ノ事業ヲヤッテ見タガ，儲ケルト云モノハナイ。メナード[226]迄モ出カケテ見タガ仝ジコトダ。

ソレカラ十年前ノ土人ノ有様ヲ思ヒ出シテハ，シキリト昔ノ閑カサヲ懐シガッタ。十年前ニハ行キアタリバッタリニ，ドコノ土人ノ家ニ行ッテモ，有ル程ノ御馳走ヲ出シテ，新ラシイアンペラニ新ラシイ枕デ寝カシテクレタ。今デモ本島アタリデコチラカラ行ケバ，ソレダケノ事ハスルガ，ドウモ今ノモノニハズルサガアッテ，昔ノヨウニシンカラト云フ処ガナイ。ダガソウハ云ッテモ，今デモ島民達ノ生活(クラシ)ニハ，何処ニモユタカナ処ガアッテイイ，例ヘバ食物ニシテモダガ，ソレハ日本人ノハウマイ，ソレハ日本人ノハウマクシテ食フト云フ事ヲ心ガケテ居ルノダカラ仕方ガナイ，ソコヘ行クト，嶌民ノハ食ヘルヨウニシタト云フダケダカラ，決シテウマクハナイ。ケレドモ，ソレダケニ食物其物ニモ，ソレヲ食ウ心持ニモユウナ処ガアッテ，実ニユタカナ気持ダ，云ハバ其ノユタカナ気持ガウマイノダ。ワシ等ハ仝ジ金デヨバレルトシタラ，嶌民ノ料理ノ方ヘ行クヨ。例ヘバガ嶌民ノ処デハ，パパイヤナドニシテモ山ノ様ニ出ス。熟シタ柔ラカイノガ食ベタケレバヨリドリダシ，生ナヤツガヨケレバソレモ勝手ダシ，ツユダケ吸ッテ残ソ

ート，何ウシヨウト何トモ思ハナイ。［〔欄外に記す〕ゴーガン風ニ云ヘバ，コレハ『古代ノ野蛮人達ガ持ツアル贅沢サ』デハナイカ。］日本人ノ処デハ，イクラウマイモノデモガ小皿ニ盛リキリ，カヘル事ガ出来タニシタ所デ，程度ガシレテ居ル。何処ニモユトリト云フモノガナイ。ソノ上イケナイ事ニハ，ソレヲ食フ人達ノ心持ニ又チットモユトリガナイ事ダ。コレハ何ウシヨウモナイ，ヤッパリ小サイ時カラ何事ニツケテモ，ヤカマシイ処ニ育ッテ来タカラダロウガ，何一ツスルニシテモ，ワシニハ内地ノ人達ハウルサクテシカタガナイ。

ソレカラ，ソレカラ，大工サンノ話[227]ハナカ〳〵尽キナイ。

女房ヲ帰シタ話，

後カラ来タ男ノ話，

九日

朝カラカラット晴レテ居ル。真青ナ空ニ白イ綿雲ガポカポカ浮イテ居ル。サイパン，チニアン以来ノ日ノ光ダ。□□昼前伊藤氏ノ処ニタピオカヲ焚イテ持ッテユク。午マデ話シテ帰リ，午食後一時間程昼寝。三時半頃カラ散歩，日ノ光ガガン〳〵照ッテ居ルガ，風ガアッテカラットシテ居ル。散歩ガ，チト遠足ニナリ，産業試験所ノ先ヲ何処迄モ入ッテユク。試験所カラ先ニナルトダン〳〵禿山ニナッテ，道ハ焼ケタ様ナ赤土ニナル。禿山ト云ッテモ，手前ノ方ハ草ガ青々ト生ヘテ居テ綺麗ダ。赤土ノ道ハ島ノ頂ヲ通ッテ居ルノデ，両側ニ海ヲ見下シテ日ニギラギラ照ラサレテ，ナカ〳〵気持ガイイ。先キノ方ノ禿山モ草ハ生ヘテ居ルガ，余程薄クテ処々赤土ガ透イテ居ル。コンナ処ニハモウ木モ何モ生ヘナイ。ヤセタ蛸ノ木[228]ガ点々ト，併シ何処迄デモ生エテ居ルダケダ。下ノ方ニハ椰子ヤ雑木ノ林ガ茂ッテ居リ，其ノ先キニハマングロープノ林ガトリマイテ居ル。右手ニハ湖水ノ様ナ海ニパラオ入港ノ時，珍ラシク眺メタ南洋松島[229]——小サナ島ガ幾ツカ浮ンデ居ル。［〔欄外に記す〕此ノ島ハ石灰質ナノデ水ニツカル所ガエグラレテ，ドレモドレモ松茸形ニナッテ居ル。］ 左手ノ海ハ静カナ沖ニ，本嶌ノ一部ガ長クハビコッテ居ル。道ガ左右ニ別レル右手ノ方ハ，空ヲ切ッテ居ル禿山ヲウネ〳〵行ッテ向フノ側ニ降リルラシイ。左ノ方ハ禿山ガ間モナク終ッテ，谷ノ向フガコチラヲ向イテ絶壁ニナッテ居ルガ，木蔦ノ□〔数〕類ガモク〳〵ト茂ッテ居ル。其ノ□□左手ノ方ニ一軒小サナ小屋ガ見エルシ，其ノ中央ノ処ハ下弦ノ月形ニ白イ岩ガアラハニ見エテ居ル。モシカシテ鍾乳石デモアリハシナイカト云フ様ナボンヤリシタ——或ハ近カッタカラカモシレナイ——気持デ左ノ道ヲ撰ンデシマッタ。ガ，禿山ノ裏マデマハッテ見ルト，下ノ谷ニハ太郎芋[230]ガ植ッテ居ル，泥田ニチガヒナイ，目ノ前ノ白い岩モソコマデハ登レソーニナイ，鍾乳石モアリソーニナイ。只モクモク茂ッタ青イ蔦ニ，夕陽ガ強クアタッテ蔭ガ深クキザマレ，其ノ上ノ方ニ痩セタ檳榔樹[231]ガヒョロ〳〵ト天ニカザシテ居ルノデ，如何ニモ珍ラシク，少シ遠カッタケレドモ写真ヲトッテ引キカヘス。引返シテ来ルト，此ノ赤土道ヲオート

バイデドライヴシテ来タ人ニ逢ッタノデ，右手ノ禿山ノ裏ガ何カヲ尋ネタラ，其処ニハアルミヅ[232] ト云フ部落ガアッテ，此ノ嶌ノ一端ニナッテ居ル由。余程行ッテ見ヨウカト思ッタガ，ヤメテ帰ッテクル。又行クベキデアル。帰ッテカラ体ヲ拭イテ和服ニカヘ，佐久間氏ノ処マデ行ッテクル。三四日シナイト本嶌ニ行カレソーニナイ。

十日

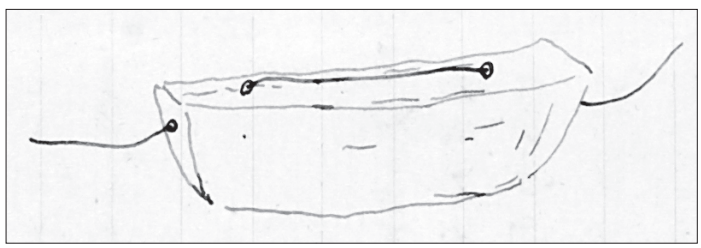
今日モ天気極上。炊事ヲ早ク切リ上ゲテ，九時半カラアルミヅニ出直ス。禿山ノ赭土道。昨日ハ夕方ダッタノデ，明ルイ中ニ何処カ暗サガアリ，蔭ガアッタ。ガ今日ハドウダ。アケッパナシノ明ルサダ。明ルイ真昼間ノ，蔭モナイ真昼間ノ静ケサダ。昨日ノ別レ路ヲ右ヘトッテ少シ行ッテ山ヲオリルト，小サナ小〔ママ〕蔭ガアッテ，其ノ下ニキタナクニゴッテハ居ルガ，珍ラシク水溜リガアッテ，木橋ガカカッテ居ル。其処ヲ過ギルト今度ハ又登リニナッテ，赭土ト石トノ凸凹道ガゴツ〳〵ト急ナ坂ニナッテ居ル。雨ノアトハ此ノ道添ヒニ泥水ガ非常ナ勢ヒデ流レルラシク，道ノ両側ハ段ノヨウニ深ク堀〔掘〕レ，凹ンデ居ル。上マデ登ッテフリカヘルト，高イ無線電柱ノ丘ヲ越エテ，向フニアラカベサン嶌ガ下マデスッカリ見エル。下ノ椰子林ノ上ヲ□□〔白鷺〕〔欄外に記す〕［a-duduh，俗称飛行機鳥］ガ三羽巴ニナッテ飛ンデ居ル。又道ガ下リニナル。今度ノ下リハナカ〳〵長イガ暫ラクスルト，例ノ石畳ノ道ニナッタノデ，村ハ近イト勢ヒツイタガ，此ノ石畳ガ又ナカ〳〵長クテダラ〳〵ト下リ坂ニナッテ居ル。家ガ一軒アッタ。二軒目ガアッタ。此家デ石畳ガ二ツニ別レテ居ル。後カラ爺サンガ私ヲ呼ビトメタ。日本語ガ全然ワカラナイクセニ，何カモゴ〳〵云ッテ居ル。私モコンナ鄙ビタ処ニ，ア・バイナドアロウトモ思ハナカッタガ，「勿ルケル，ア・バイ」トヤッテ見ル。スルト以外〔意〕ニモ爺サン左手ノ道ヲサシテ，「テヤン，ア・バイ」トヤル。私ハ又，右ノ道ヲサシテ，「勿ラケル，テヤン」トヤルト，爺サン「テヤン？」ト繰リカヘシテ，右手ト首トヲ横ニフッテ居ル。ソレカラ，爺サンガ「タバコ」ト云フ。ハハア，タバコガホシクテツイテ来タノダナト□思ワカル。二本ヤッテ，ソレカラ椰子ノ実ヲトッテクレト云フ，椰子ノ実？　ケゲンナ顔ヲシテ居ルノデ「アリウス！」ト云ッテヤルト，爺サン手マネデ，ア・バイ迄行ッテ，帰リニ此ノ家ニ寄レト□云フ。

左ノ道ヲ下リル。下リルト手前ニトタン葺キノ□日本建マガヒノ小屋ト，其ノ向フニボートハウスガ並ンデ居ル。手前ノ家ニ十五六ノ子供ガ居タノデ，日本語デヤッテミタラ□解ッタ。コノ小サナ日本建ガ此ノアルミヅノバイナノダソーダ。水道ガイヤニ細ク曲□リクネッテ入リ込ンデ居ルノデ海ガ見エナイ。端マデ行ケルト云フノデ行ッ□テ見タガ，先ノ方ハ

リーフノゴツ〳〵シタ怪シゲナ土手道ダッタノデ海ガ見エ，先キノ嶌ガカスカニ見エル処マデ行ッテ帰ッテクル。喉ガカワイタノデ，バイデ，持ッテ来タコーヒーヲ飲ンデ前ノ家ニ行ク。処ガ！ サッキノ元気ナ爺サンハ居ナイデ，ヨボ〳〵ノ爺サンガ入口ニモタレテボンヤリシテ居ル。他ノ口デ女ガ木綿［〔欄外に記す〕キワタ（カボック）］ノ実ヲムイテ綿ヲトッテ居ル。女ハ多少日本語ガワカッタ。ケレドモ，サッキノ爺サント椰子ノ実ノ事ハ，結□（果）局ヨクワカラナカッタ。椰子ノ実ノ話ニナルト，只「チサイ」「チサイ」ヲ繰リカヘシテバカリ居ル。其ノ内ニ爺サンガ煙草ガナイカト云ッテ居ルト云フ。二本ヤル。椰子ノ実ハダメ。イツデモ此ノ式ダカライヤニナル。ケレドモ，彼等ガソレホド横着ダトカズルイトカ考ヘテハアタラナイ。彼等ノ間ニハ，約束ノ履行ナドト云フ必要ハ全クナイノダ。少クトモ時間ノ観念ト来タラ，全ク問題ニナラナイノダカラ，私達ノヨウニ都会デ仕上ゲラレテ，時間デ動イテ居ル人間，イツデモ時計ト相談シテ□行動シテ居ル人間トハ，道徳的ニマルデ標準乃至見当ガ違ッテ居ルノダ。□（服）腹ガスイテ来タ。右ノ道ヲ行ッテ見ル元気モナクテ――行ッテ見レバヨカッタカモ知レナイ。ガ，ドウモ様子デハ，若イモノ達ハ皆漁ヘデモ行ッテ居ルラシク，年寄リカ□（子）女子供達ダケシカ残ッテ居ナイラシイ――引返ス。サキノ木蔭ノ水溜リ[233]ノ処迄来タラ，橋ニ二人ノ女ノ子十四五位ヒノガ腰カケテ，水デモ浴ビヨウトシテ居タノダロウ，肌ヲヌイデ居タノヲ，私ガ通リカカッタノデ，着物ヲトッテ腰カラ下ヲグル〳〵巻イテシマッタ。木蔭ニモ一人中年ノ女ガ休ンデ居タ。其ノ処ヲ通リコスト又□人一人逢ハナカッタ。十二時半頃帰ッテクル。昼飯ガウマイ。

午後，□昼寝。

三時半頃カラ又出カケル。試験場ノ手前，右ニ赭土ノ新ラシイ道ガアルノ〔デ〕テ入ッテ見タガ，タピオカノ畑ヲ通ッテポツ〳〵アル小屋ハ沖縄人ノ家ラシク，日本式ナノデヤメテ帰リ，今度ハ試験場ノ中途カラ左ヘ入ッテ見ル。試験場ノ裏カラ此ノ道ハ，例ノ石畳ニナッテダラ〳〵ト下リ，両側ニ島民ノ家ガ幾ツカアッテ，先キハ例ノ通リボートハウスニ終ッテ居ル。



夜，隣リノ島民ノ家ニ行ッテ，ア・ウドウド[234]ヲ見セテモラフ。婆サンガ□頸ニカケテ居ルカラ上ッテ見テクレト云フノデ，上ルト新ラシイアンペラヲ敷イテクレタ。

婆サンガ頸ニカケテ居ルノハ，パラウ第一番ニ値ウチガアルモノダソーデ，長サ二寸

五分位ヒノ灰色ニ古メカシクヨゴレテ居ルガ，不透明ナ□黄色ノ石デ，図ノ様ナ形ヲシテ居ル。コレナラ今デモ嶌民ノ家ナラ五六軒ハ買ヘル由。ソレカラ婆サンノ膝ニ寝テ居ル子供ノ頸ニハ，小サナ径五六分ノ玉ガ幾ツカアッタガ，中央ノ一ツハ不透明ナコバルト色ノ中ニ白ノ小サナ不規則ナ， 斯ンナ風ナフノ入ったモノデ，小サイモノノ中デ一番ヨイモノ。コレハカヌー一艘位ヒ買ヘル由。其ノ他ハ薄青ノビードロ或ハギヤマンノ様ナ幾分ニゴリノアル透明ナ硝子質ノ玉デ形ハ， 。コンナ風ナノガ普通ノ様デアル。同ジ大キサノモノデ石質ラシイ黄色ノ玉モアル。

十一日

ブラ〳〵シテ了フ。ナカ〳〵本嶌行ノ日取ガワカラナイノデ，少々イヤニナル。夕方，平嶌サンノ処ニ□バスニ入リニ行ッタノガ，御飯マデ御馳走ニナッテクル。今日ハ若鶏ヲシメテ，すき焼。□ト，もやしノ御馳走。

晩，三浦君ガ出テ来ル。

十二日

昼前，三浦君ガマダコロールヲマルデ知ラナイノデ，一緒ニア・バイ□カラ南貿ノ波止場，ボートハウス二ツヲグルット廻ッテ来ル。

午後，昼寝，四時頃ダッタカ平嶌サンガ見エテ，家ハ月五円デ借リラレタカラトノ話シ。実ニ有ガタイ。早速明日デモ引移ル心算。

夜，オバックガ来ル。皆デ散歩。

晩クナッテ，織本氏トスケマ氏ガ来ル。

十三日

晴。朝十一時頃カラ一時間程，三浦君ト木工学校ノ裏ノ方ヲ散歩。午後，引越シノ用意。所ガ午後三時半頃カ，佐久間氏カラノ使ガ来テ，明日朝九時ニ本嶌ニ行カレル由ダッタノデ，引越シハ取ヤメ。四時半頃，佐久間氏ノ所ニ行キ，高松氏ノ所ニ行ク。

夕食後，平島サンノ所ニ荷物ヲモッテ行ッテ，預ッテ頂ク。平□嶌サンハ留守ダッタノデ，奥サンニオ願ヒシテ来ル。

帰ッタラオバックガ来テ居タノデ，アカラツプノ叔父サンニ紹介状ヲ書イテ貰フ。

織本氏，スケマ氏来。

十四日　日曜日

朝カラ行クバカリニシテ待ッテ居ルノニ，佐久間氏ガ来ラレナイノデ，門ニ立チ〳〵シテ居タガ，十時過ギテ佐久間氏ガ来ラレ，一緒ニ南貿ノ波止場カラカヌーニ乗ル[235]。

〔欄外に記す〕
［アイライ］　十二時半頃，アイライ[236]ニ着キ駐在所ノ空家ニ入ル。佐久間氏ノオ弁当，

海苔巻キノオムスビヲ御馳走ニナリ，嶌民ニ椰子ノ実ヲ取ッテ貰ッテ飲ム。井戸端デ水行水ヲ使ヒ，ヴェランダニ寝台ヲ拡ゲテポカントスル。女ノ子達ガ珍ラシガッテ，遠クカラノゾイテハ，ハシャイデ居タガ，了ヒニハ二人ヅツ出テ来テハ，石畳ノ下ノ道ニ来テ，カラカフ様ニ一踊リ踊ッテハキャッ〳〵ト逃ゲテ行ク。二人ノ女ガ向ヒ合ッテ，自分達デ歌ヒナガラ踊ルノダガ，両脚ヲガリ股ニシテ前コゴミニナッテ体ヲ左右ニ捻り，両手デ内股ヲ叩キナガラ股ヲ開キ，外股ヲ叩イテハ膝ヲツケ，体ヲグネグネサセテ踊ッテ居ル□□□ウチニ，了ヒニ一方ノ女ガクルット後ヲ向イテ相手ノ女ニ尻ヲムケル。クヱイ，クヱイ，クヱイ，クヱイ，踊ガ終ルトキャッ〳〵ト騒イデ逃ゲテ行ク。又二人デヤッテ来テハ踊ル。

オコンレイ（子供）ヲ一人傭ッテ飯ヲ焚カセル。其間，佐久間氏ト村ヲ小サク一マハリシテクル。村ハヅレカラ先キハ大キナ禿山ニナッテ居テ，広々ト気持ガイイ。

五時ニハサルモンノ鑵詰ヲ開ケテ夕食。

ポ，ポ，ポ，ポポポポ……鳩ガ鳴ク。

薄闇マデ，思ヒ出シタ様ニ山鳩ガ鳴ク。

宿ノ側ニア・バイガ二ツアル，佐久間氏ガウト〳〵昼寝シテ居ル間ニ，少シバカリア・バイノ一ツヲ写ス。

六時頃，法螺貝ガポーポー鳴ル。コレカラハ炬火ヲツケナイデ歩クモノハ，カルボス――ノ上，十五円ノ罰金。其ノ者ノ豚ヲ殺シテ皆デ踊ノ宴ヲハル由，ボーイノ話。

成ル程，道ヲ通ルモノガ明々ト炬火ヲ持ッテ行ク。

其ノウチニ一人ノ青年ガ椰子ノ枯葉ヲ一握リ持ッテ，マッチヲ借リニ来ル。「炬火ヲツケナイデ歩クト，カルボスダソーダナ」「ハイ」「何故炬火ヲツケナクテハイケナイノダ」「若イモノガヨバヒニ行クカラデス」「フン，困ッタ規則ガ出来タモノダナ，若イモノ達ハイヤガッテ居ルダローナ」「ハイ」「若イ女達モコンナ規則ガ出来テ恨ンデ居ルダローナ」「ハイ，サア……」。パチ〳〵火ヲ灯シテ帰ッテ行ク。

梟ガ性急ニナク。南洋ノ梟ハ内地ノ様ニ，ホ，ホ，ト鳴カズニ，ホ，ホ，ホホホ……ト鳴ク。音モ幾ラカ高イ。

夜，佐久間氏ノ用デ村長ガ来タノデ，ア・バイノ絵ノ説明ヲ求メタガ，得ル所極メテ少ナイ。

此ノ村デ唯一ノ邦人，牧場ヲヤッテ居ル久富ト云フ人ガ来テ，十時頃迄色々ノ話シ。

ヤップカラコチラ，何処ニデモアルマングロープハ，最上ノ薪炭トナル由。

十五日

六時起床，八時半頃，久富サンノ所デ朝食ヲ御馳走ニナル。

佐久間氏ハ山ヲ歩イテカイシャル[237]ニ行カレル由。私ハ食料荷物ヲ持ッテセイリング・ボートデ先キニ行ッテ居ル事ニナル。［〔欄外に記す〕ガシュール入］　十時四十五分出発。風向ガ思ヒ

キリ悪クテ，マルデ平行線ノ様ナヂクザグヲ画イテ進ンデ行ク。十二時半，朝食ヲ久富氏ノ所デ御馳走ニナッタノデ，オコンレイノ焚イタ御飯ヲ釜ゴト持チコンデ居タノデ，又サルモンノ鑵詰デ御飯ヲ食ベル。風ガマルデ無クナッテ了ッテ，ボートハブカ〳〵漂ッテ更ニ進ム気ハヒモナイ。何ダカ心モトナイガ，マダ□昼ナノダカラ，今ニ風ガ出ルダロウナドト考ヘデ居ル。或ハ風デモ変ッテ案外早クツクカモ知レナイ。ダガ嶌民達ハテンデニボートノ上ニゴロ〳〵シテ了ッテ，夕方位ヒ着クダロウナドト閑カナ事ヲ言ッテ居ル。チト情ナカッタガ間モナク動キ出ス。但シ相変ラズノヂグザグデ一□（更）向ハカドラナイ。嶌ニ向ッテ居ル時ハマダイイガ，沖ノ方ニマルデ□（嶌）島ト直角ニ走ッテ居ル時トキタラ，当モナク突進シテ居ル様デ馬鹿馬鹿シイ気ガスル。一時四十五分，小蒸汽船「カモメ」トスレチガフ。「カモメ」ハ追風ノ上ニ機械デ走ッテ居ルノダカラ，訳モナクドン〳〵行ッテシマフ。斯ウナルト，益々癪ニ障ル。癪ニ障ルケレドモ，何トモ致シ方ガナイ。ソノウチニ，二時半ニハ空ガスッカリ曇ッテ了フ。愈々心細クナル。コレデドーットスコールデモヤッテクレバ，本当ノ弱リ目ニ憑（祟）リ目ダ。ダガドウヤラ降ラナイデモッタ。五時半過ギタ頃，サッキカラ後ノ方デ同ジ様ニヂグザグヤッテ来タボートガトウ〳〵追ヒツイテ来テ，暫ラクノ間ニ私達ノボートヲ越シテ先キニ行ッテ了フ。憎ラシイケレドモ，私達ノハ型ガ悪クテアレダケモ出ナイノダソウデ，下手ナノデハナイノダソーダカラ，是レモ仕方ガナイ。モウ何ウデモイイト云フ気ニナル。ダガ又，スグ兎モ角カイシャル迄ハ行ッテ呉レナクテハ，佐久間氏ニモ気ノ毒ダシ，私トシテモ変ナ所デ降ロサレテハ後ガコマル，ト思フ。六時ニナル。薄暗クナル。潮ノ具合ガ悪イカラカイシャルヘハ入レナイカラ，ガシュールデ降リテクレト嶌民達ガ云フ。愈々来タ。兎モ角，今晩遅クテモカイシャル迄入ラナケレバ，佐久間氏ガ寝モ食フモ出来ナイノダカラ，カヌーヲ出サセルカト云ヘバ，キット出サセルト云フカラ仕方ナシニ承知スル。七時半，マダ早イ月ガ雲ノキレ目カラ明ルク照ッテ来ル。月下ニ再ビ釜カラ□（飯）二度目ノ飯ヲ食フ。愈々ガシュールニ入ロウトスルト，ガリ〳〵トツッカケル。道ヲカヘテ入ロウトスルト，又ガリ〳〵トヤル。僅カナ月ノ光ニ嶌民達ガ水道ヲ見ツケ〳〵入ッテ行クノダカラ心細イ。ダガ嶌民達ハリーフニブツカルト一斉ニ警カイスルガ，リーフカラ外レルト又忽チ寝転ンダリ喋ッタリシテ居ル。馬鹿ノ様ニモ見エルシ，慣レキッテ居ル様ニモ見エル。無正意ノ様ニモ見エルシ，太ッ腹ノ様ニモ思ヘル。ダガキット慣レキッテ居ルカラニチガヒナイ。私モ平気デ飯ヲ食ッテ居ル。八時十五分，無事ニガシュールノ河口ニツク。上陸　村迄イヤナ道ガ一寸遠イ。ニパ椰子ノ茂リヲヌケテ，草ノアル処ニ出ルト，盛ンニ蟲ガ鳴イテ居ル。村長ガ会議デコロールニ出テ居ルノデ，二三軒キキ歩カナケレバナラナカッタガ，結局，一時間計リシテ潮ガ満チテ来タラカヌーヲ出ソウト云フ。念ヲ押シテタノミコム。［カイシャル入〔欄外に記す〕］

十時ニナッテヤットカヌーガ出ル。静カナマングローヴニカコマレタ，ウネ〳〵シタ水道ヲ通ッテ河ニ出，直グニ滑ラカナ，死ンダ様ナヒソケサノ海ニ出テ行ク。静ケサダ，

ヒソケサダ，黒イマングローヴト油ノヨウニ滑ラカナ海ダ。

私ハカヌーノ真中ニ荷物ニ凭レテ居リ，一人ノ嶌民ガ後ニ立ッテ，規則正シク棹ヲサシテ居ル。棹ヲサス音ガ規則正シクザブザブ，サラサラ，ト云フ。浮木ノヘサキガ浪ヲキッテチョロ〳〵，チョロ〳〵ト云フ。月ガ昃ル。浮木ノヘサキガキッテ行ク小サナウネリガ，チカ〳〵ト光ル。死ンダ様ナ海面ニ，時々夜光蟲ガキラット光ッテハ□消エル。余リノ静ケサダ。私モ黙ッテ居ル。嶌民モ黙□□（ッテ）黙トシテ棹ヲサス。僅カナ凉シサヲ，汗バンダ肌ガ貪ル様ニ新ラシク感ジツヅケル。私ハカヌーノ上デ荷物ノ上ニ凭レテウト〳〵ト眠クナッテ居ル。十一時半ニカイシャルニ入ル。ア・バイニ沢山ノ女達ガ居テ，単調ナ歌ヲ唱ッテ，単調ナ踊ヲイツマデモ，イツマデモ踊ッテ居タ。

舗道ノ急ナ坂道ヲ高ク登ッテ，今迄ノカヌーノ気持ハ何処ヘヤラ，フーフー云ッテ村長ノ家ニ入ル。村長ハ会議ニ出テ居テ不在。佐久間氏ハ来テ居ラレナイ。一寸面喰ッタガ，兎モ角時間ハ遅イシ，ココデ寝テヤレト思ッテ寝台ヲヒロゲル。ソレカラ用便シ度イト思ッテ便所ハナイカト聞イタラ，海岸ニアルノダケダトノ事，又々石道ヲ降リテ登ル勇気ハトテモ無イ。躊躇シテ居ルト嶌民ガ，便所ハ無イガ，用便出来ル所ニ案内シヨウト云フノデ，懐中電燈ヲモッテツイテ行ク。ヂキ近所ノ草ノ茂ッタ谷ニツイタラ，此ノ辺ナラ何処デモイイト云フ。ヤッテヤレト思ッテ場所ヲ見定メテ電燈ヲ消シ，大イニ暗闇ノツモリデ用便スル。サテ終ッテ帰ロウト電燈ヲツケルト，驚イタ。サキノ嶌民ガ一間バカリ隔レテツッ立ッテ居ル。他人ノ用便スル所デ待ッテ居ル奴ガアルモノカ。チトバツガ悪カッタガ，犬カ豚デモ居タツモリデ，黙々トシテ引上ゲル。

帰ッテ来テ，正ニ寝ヨウトスルト，一時過ギテ佐久間氏ガ，フーフー云ッテ来ラレタ。佐久間氏ハ汗ニナッタカラト，下マデ水ヲ浴ビニ行カレル。其間ニ茶ヲ入レル湯ヲ沸シテ置ケト云ハレルガ，島民ハモウ決シテ動カウトハシナイ，何トカカトカ云ッテ居ル。私ダッテ，ボートノ中デ昼飯ノ時，島民カラ椰子ノ水ヲ一杯貰ッテ飲ンダキリダ。ドウカシテオ茶一杯ニアリツキ度イモノダトハ思ッタガ，何トシテモ島民ハモウ決シテ動カナイ。仕方ナシニ，二人トモブウツク云ヒ乍ラ二時過ギ就寝。

〔3頁白紙〕

10/4　ガルミヅノ部落ニ入ル。

✓タピオカノ痩畑ワヅカ蛸ノ木ノマバラニ続ク禿山ニ出デヌ[238)]

✓蛸ノ木ノマバラニ続ク禿山ノ赭土道ヲ夕日負ヒテ行ク[239)]

✓アルミヅノ部落ヘ行クト赭土ノ影ダニアラヌ禿山ヲユク

✓ガルミヅノ赭土ノ丘ユマ見オロス海ニ鮃張レリ里ノアルラシモ

✓ガルミヅノ禿山高ミマ見オロス海ニウカベル珊瑚嶌幾ツ

✓赭土ノ禿山道ヲ幾越エテアルミヅノヒナ（鄙）ニ日ナカ入リニケリ

✓幾坂ヲ越エテガルミヅニ入リニ来テツトモ得ナクニ小石一ツ拾フ

✓カヌーニテ行クガシュールノ海ハ寂シ月隠ル頃ヲ夜光蟲ノ光ル

✓セイリングボートニ暮レシ潮干海舟底摺リテガシュールニ泊ツモ
✓カイシャルノ村長ノ家ノ昼寝覚メ青空ニ高キ椰子ト檳榔樹ト
✓カイシャルノ村長ノ家ニ泊テシ朝吸ヒシパパイヤノ味噌汁カナシモ
✓嶌人ノ昔ヲ語ルア・バイノ絵猥リニハアレドソコサヘヨシモ
✓嶌人ノ石畳道尽クル所ボートハウスアリテマングロープ茂ル

27/10
✓吾ハモヨ死ヌト書キヌ妹ハモヨ幸福ト書キヌ秋ノ浜ビニ

5/11
✓秋ノ浜ニ来テ静ケサノモノ足ラヌ

✓子供ニセガマルルママニ汽車電車二三十モ描キヌ秋雨ノ午後ヲ

✓海(うな)さかる南洋へ行くと都ろのうなぎ食ひたくて食ひてばうまき[240)]
✓とこしくに南洋へ行くと今ははた思ひ残すこともなきがあぢなさ[241)] (二月)

18/8 □□ 富士見ナル久顕ニ左千夫集ヲ贈ル。
✓ヒタ□□ブルノ心ノ凝リテ成レル歌ハカカル歌ヲシ云フベカルラムカ
✓富士見野ノ野ヲサナガラノ花園トシノビツツ贈ル左千夫歌集ヲ
✓元義子規左千夫ガ歌ヲマルメアゲテ其ノ上ニアル歌ヲ詠メ今ハ

✓浜伝フ寄ル浪ハアハレワガ行キノスズロヲ敢ヘテ打ッテハカヘス
✓浜ニシテ□□□□□□□□□思フコトモナクテマシバシヲ打ッテハカヘス浪ニ向ヘル

6/10

✓山陰ノ秋小暗サヤ稲荷堂

✓秋の日をながみよしなみ此の川に釣緒(つりを)垂れ暮す世の鈍者(おぞ)われは[242)]

✓秋の日を釣緒垂れ暮し小さけき魚に餌食(えさは)まる世の鈍者われは[243)]

✓思フコト皆云ッテシマヘト思ヒツツ面倒ニナリテヤメテカヘリヌ

✓霽レシカバ秋ノゴト澄ミシ大空ニカモ
白雲ノ飛ビテ若葉ノ美(ハ)シキ宵カモ

✓晩秋ノ日タケテ足袋ヲヌギニケリ

✓真玉なす生(あ)れ出でし子には何し献(また)さむでんでんでん太鼓またさむ笙の笛添へて（忠光誕生）

✓不動明王ハ跡バカリヤ岩(イワ)タバコ

✓裏(ツト)ハコレコレト揺ルヤ岩(イワ)タバコ　17/6

✓棄テバソレマデナレドツミシカラハ裏(ツト)ニハセマシ山花山実

✓鷲峯ノ百八櫓穴毎ニ仏ハアレド首ナシニアハレ
（百八櫓ヲ見ニ行キケルニ，穴毎ニ三体五体ノ石仏オハセド，皆々欠カレテ首アルモノ一ツモナシ，皆手頃ノ石クレヲ其ノアトニノセテアルガムゴシ）

✓梅ノ実ニサンゼント降ル雨ナガシ

6/8　久顕へ返シ

✓久顕ガ蚋ニ食ハレクハレ剥ギトリテ送リ来シコレヤ白樺ノ皮

✓久顕ガ□□□□□□(蚋ニ食ハレテ)取リテオコシシ白樺ノ皮栞ニモセム子等ニモワカタム

✓上ッ瀬ニ打橋渡シ淵瀬ニ浮橋渡シ通ヒケンイニシヘ人ノ思ホユルカモ

✓石橋(イシハシ)ヤアト幾足ヲスベリケリ

✓親馬ノアトカラ仔馬夏ノ山
✓看護婦モマジッテ病院ノテニス哉

14/8
✓山吹ノ返リ花少(スコ)シ庭ニ揺レ居リ，青空ハ高ク冴エ居テ秋トナレリケリ
✓青空ハ今ハ秋立ツト澄ミトホリケリ，山吹ノ返リ花スコシ庭ニユレ居テ

✓下痢アトノワガ力ナキ腹ニシミテ夕立過ギシ空ノ色カナ
✓枯芝ニイチ早ク見エシ醜草ノ芽ヲ摘ミ居リモ春ノ日中ヲ

✓藤浪の揺るる善らしな藤浪の下には遊べ春雀ども

城ヶ嶌　2/4
✓三崎ノ海城ヶ島ハアレド蓋(ケダ)シカモ雨カ降ラネバ面白クモナシ
✓三崎ノサキノ城ヶ嶋雨降ラバヨシトハ聞ケド今日ハ雨降ラヌ[244)]
✓面白クナキ城ヶ嶋ヲ見ヲサメテ渋茶デモグット飲ミ度クナリケリ[245)]

○上原氏よりの年賀の文に「巳の歳の四たびめぐりて己が歳も已に五十路を越えて二とせ」とありければ，
✓巳の歳の已に四度を迎へてし君，五十路まり二才(ふたつ)と己れ翁(をぢ)さびにけむ

〔以下，最終頁より書き始める〕

鎌倉ニ来テカラ暇ニアカセテ読ンダ主ナ本。
○印ハ已ニ以前ニ読ンダコトノアル本。順序不同。
　○有史以前ノ日本（鳥居竜蔵著）
　○日本古代文化（和辻哲郎著）
　　爪哇史（松岡静雄訳）
　　日本古代社会（西村真次著）
　　チャモロ語ノ研究（松岡静雄著）
　○日本周囲ノ原始宗教（鳥居竜蔵）
　　ウェルズ世界文化史大系（北川三郎訳）
　　日本古俗誌（松岡静雄著）

日本言語学（松岡静雄著）
ミクロネシヤ民族誌（松岡静雄著）
太平洋民族誌（松岡静雄著）
常陸風土記物語（松岡静雄著）
○万葉集
○古事記（岩波文庫）
日本書紀（但シ神代巻ノミ）（岩波文庫）
沖縄ノ人形芝居（宮良當良著）
八重山古謡（宮良當壮解説）
歌舞音楽略史（小中村清矩著）
天孫人種六千年史ノ研究（三島敦雄著）
申楽談義（世阿弥）　花伝書（世阿弥）　おらが春，我春集（一茶）
仰臥曼録（正岡子規）
倭寇（長谷川正気著）

見度イ本
姓序考（細川貞雄）
姓氏録
古語拾遺
穴居考
風土記
出雲　土佐　常陸　肥前　豊後　播磨
✓魏書　魏志 264-419　429 A.D.　後魏書
✓後漢書
（水鏡）　旧事記。
（神皇正統記）
（扶桑略記）
（愚管抄）
国造本記考
雲根志（木内重暁）＝石亭……
矢之根石考（石亭）
好古日録（藤井貞幹）
「古玉図孜」清呉大徴　　埃嚢抄
✓史記　　拾玉集
延喜式

後魏書
□□□

三国史記（鮮）　三国遺事（鮮）　三国志 297　揚氏漢語抄

前漢書（四十五巻ニ朝鮮伝アルノミ）

地神本紀　東国通鑑

旧事記

観古図説（蜷川式胤（ニナ ノリ））　隋書。

六国史

蝦英日辞書（バチェラー）

皇清職貢図（乾隆帝）

書経

（マルコポロ）旅行記

南詔野史

高麗史

山海経

大越史記
□□□□

（銅鐸考）＝（梅原末治）

（北九州の文化）＝（中山平次郎）

百済記（書記）

✓南史

新羅本記

✓南齋書

新姓氏録

朝鮮語辞典（総督府編纂）

中央カロリン語の研究（松岡静雄著）

古語大辞典（松岡静雄著）